國語讀本

改訂版

卷十

375.9
Ue4
資料室

41493
教科書文庫
4
810
41-1929
200030
1422

昭和四年三月廿五日
文部省檢定濟
中學校國語科用

國語讀本 卷十

昭和改訂版

文學博士 上田萬年
榮田猛猪 共
鹽野新次郎 編

資料室
375.9
Ue4

廣島大學圖書之印

廣島大學 教 34504 図書

國語讀本 卷十

目次

前篇

一 生の象徴としての短詩　岩城準太郎　一

文學と人生　藤井健治郎　七

二 二もとの松（和歌）　九

三 秋の姿　綱島梁川　一四

春と秋（長歌）　額田女王　一九

四 けづり屑　（大鏡）　一九

五 御堂造營　（榮華物語）　二四

飛鳥川の淵瀬　吉田兼好　三〇
六　豐太閤の最期　小島烏水　三一
個性の尊嚴　中村孝也　三七
七　長柄堤の訣別　坪内逍遙　三九
八　受發　幸田露伴　四八
格言一則　五四
九　船路　紀貫之　五四
一〇　在五中將　（伊勢物語）　五九
名數　六七
一一　世界の四聖　高山樗牛　六八

外來思想の批判　深作安文　八一
一二　萬里の長城（詩）　土井晚翠　八四
一三　枕草子抄　清少納言　九〇
此處だといふ處を　五十嵐力　九七
一四　平安京と寧樂京　藤岡作太郎　一〇一
古都四句　一一〇
一五　夢殿の皇子　赤木桁平　一一一
一六　安見しし我が大君（和歌）　（萬葉集）　一一八
萬葉の歌人　賀茂眞淵　一二三
一七　日本文學の展開　土居光知　一二四

後篇

増鏡抄

増鏡に就いて（參考）　池邊義象　一

一　序　一

二　おごろの下　三

三　水無瀬殿　七

四　雪のむらぎえ　九

五　實朝卿　一二

六　今をかぎり　一三

七　ことわり知らぬ涙　一四

八　新島守　一六

九　浦のながめ　一八

一〇　最明寺入道　二〇

一一　神風　二三

一二　東軍狼藉　二四

一三　志賀の浦浪　二七

一四　思はぬ山の紅葉　二八

一五　むら時雨　三〇

一六　都の名殘　三一

一七　苔の下　三三

一八　[illegible]　三六

——蔦の細道（綴田觀潮筆）——

目次

一八 あまのつり船 三八
一九 さめざらましを 三九
二〇 かへる波 四一

國語讀本　卷十

前篇

一　生の象徴としての短詩

岩城準太郎

岩城準太郎
富山縣の人、奈良女子高等師範學校教授。

白川の關
福島縣西白河郡に舊址存す。

一生の象徴としてのいづれの年よりか片雲の風にさそはれて漂泊の思やまず、春立てる霞の空に白川の關超えんと、そゞろ神のものにつきて心を狂はせ「道祖神のまねきにあひて取る物手につかず、股引の破れをつゞり笠の緒付けかへて、」千里の旅に上つた俳人の生活は、まことに澄みきつた碧い深い空に油然と湧き出た一片の雲が、吹送る天つ風に乗じて飄々と動き

去るが如き生活である。目もはるに草の花咲く大野をかけて、悠々と流れ來り流れ去る長江の水が、積翠を涵し深紅に染み淵と淀み瀨と走つて、日夜停まることなきが如き生活である。心を月花にして禽獸を離れることを努めた此の俳人は、身も亦月花になつてゐる。生活それ自身が渾然として月花になり切つてゐる。此の透徹した心境、渾成した生活、これをポツリ〳〵と作品にする。その作品は唯に外界矚目の事象を諷詠しただけに止まるものでない、總べて此の俳人の「生」そのものの暗示である。

かれはその生を連句にうち込んで、陶々の味をゆたかにふつくりと現はしてゐると同時に、更に彼の獨自の生の味

此の俳人
松尾芭蕉。

を、さびしくも又しみ〴〵と發句に託してゐる。敍事の句だの抒情の句だの、客觀の句だの、主觀の句だの、自然の句だの人事の句だのといふやうな事はこゝに用はない。五月の節句が詠んであらうと、古蹟の感懷が歌つてあらうと、天の川が出ようと温泉宿が持出されようと、すべてこれらは事物そのものを諷詠しただけではない。直ちに作者の生をつかみ來つて之を暗示したものである。

奥の田植歌に風流の旅を始めて、北邊の夏草に轉變の人の世を觀じ、岩にしみ入る蟬の聲に限りない靜寂を身にしめた此の俳人は、秋夜の天の川に孤獨の眼を凝らし、別離の哀愁に扇ひき裂く切なさを見せた。わけて齡傾く五十一

五月の節句
笈も太刀も五月にかざれ紙幟。

古蹟の感懷
夏草やつはものどもの夢のあと。

天の川
荒海や佐渡に横たふ天の川。

温泉宿
山中や菊は手折らぬ湯のにほひ。

奥の田植歌
風流の始や奥の田植歌。

岩に沁入る
閑かさや岩にしみ入る蟬の聲。

扇引裂く
越前にて門人北枝に別るゝ時の句「物書いて扇ひきさく餘波かな」。

歳の年に、割合に老けて見える弱々しい體で、深川の庵を去り、故郷に墓を展し、更に奈良に過ぎり難波に入つて、こうと う死病にとりつかれた一年間の旅路の發句は、作者の到達した生の光耀を、寂しい喪服で包んでゐるかの感じを起さすものである。味へば味はふほど、にじみ出る詩境の感味は、これらの暗示的な短句から汲取られる。

「かうした見方からいへば、短詩は生を象徴する文學である。短詩も描寫や敍述をする、記載や説明をしないでもない。然しながら、これを以て唯一の使命とする文學ではないのである。」當面に取扱はれてゐる題材は、より大なる事物の焦點をなすものであり、より廣い事實の中心をなすものである。廣い大きな世界がその背後に展開せられ、或は圓光を作り或は暈を現出する。俳句などは此の種の文學の中で最も特色的のものである。

「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」と詠んだ蕉翁の句は、唯旅中の病篤きをいつただけではない、病中の幻覺を言つただけではない、夢中に枯野が見えたといふ事實を言つただけでもない。旅に病むといふ事それ自身が、深く作者の生活に相關はるものであり、生活全體の特異の色彩を代表するものである。五年以前に江戸の草庵を出る時、既に「舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老をむかふる者は、日日旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。」とし

五年以前
元祿二年。芭蕉四十六歳の時。

徑庭
軒輊

みゝ〜言つてゐる。五年後の今日此の事に出會はした心持は、意外の變事に驚く心持とは大きな徑庭がある。まして枯野は唯偶然に見えた夢中の景だけでない。蕭殺の風吹亘る天地に、晴るれば短日の光弱く、雨ふれば冷たくしぐれる。花野枯れつくして、尾花だけが名殘の白芒、ぼやけた姿でかひろぎ立つてゐる、池の水鳥翼を收めて、空林に朝霜が白々と置く。こんな光景が枯野の一語によつて直下に想ひ起される。「卽ち枯野は冬季に於ける自然人事の全體を背景に展開する力を有つてゐる焦點的題材である。而もその枯野は作者の生活、作者の世界、作者の全人格をさへ髣髴せしむるいみじくもたへなる內容を有つてゐる。」蕉

獅子搏兎也
用其全力

翁の生は正しく此の一句に取扱はれた題材によつて暗示せられてゐる。

蕉翁の作を年代順に見て行くと、その生の足跡を生き生きと想ひ浮べることが出來る。病篤くなつて、門人が辭世の句を問うた時、古池の句に眼を開いてから此の方、作るところの句一として辭世でないものはないと答へたる彼の言葉は、彼の一生と彼の作句とにあつて、始めて權威を認めることが出來るのである。（國語と國文學）

文學とは何であるか。文學は人生の縮圖である。人生と云ふ海の樣に廣いものゝ上に現れた百般の姿を鏡の如き狹いものゝ上へさながらに描寫したものが文學であ

る。さらば人生とは何であるか。よく世間では「禍福は糾へる縄」などと言ふが、人の運命は啻に糾へる縄の如きのみではない。彼の大空に横たはれる雲のやうに、あるかと見れば消え、消えたかと見れば湧き、海かと見れば山、龍かと見れば虎、乍ちにして淡く、乍ちにして濃く、變幻出沒殆ど端倪すべからざるものである。たゞ此の一片の雲でさへ少からず吾等の感興を惹くものを、それよりも更に奇妙で、更に變化ある此の人生の波瀾動搖が、どうして吾等の感興を惹起さずにあらう。變幻出沒極りないのが人生の姿である。これが人生であるかと見れば忽ち其の姿をかへ、それが眞相かと見れば又忽ち消えて跡を晦ます。凡手は容易にこれを捉へることが出來ず、凡眼はなか〳〵其の眞相を認めることが出來ない。しかも捉へることがむづかしければむづかしいほど、認めにくければ認めにくいほど、之を捉へたい、認めたいと思ふのは、誰しもの人情である。然るに詩人といふものは其の鋭敏な眼とへて來て、それを世人の前に示すのである。是が文學である。

藤井健治郎　倫理學者、文學博士、京都帝國大學教授。

落合直文　仙臺の人、明治三十六年歿、年四十三。

高崎正風　鹿兒島の人、御歌所長、明治四十五年歿、年七十。

そこで世人は堪らない。自分の熱望の目的物が眼前に現れるから、人の視線は之に吸ひつけられ、觀ても觀飽く事を知らないのである。（文學と人生――藤井健治郎）

二　二もとの松

落合直文

一つもて君を祝はん一つもて親を祝はん二もとある松

高崎正風

鶯の木づたふ影は見えねども聲する方に散る櫻かな

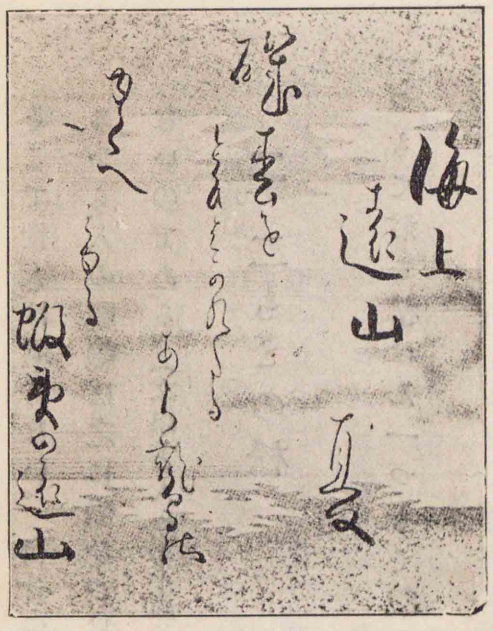
正岡子規
名は常規、松山の人、明治三十五年歿、年三十六。

筆蹟
海上遠山
磯松をとびはなれたるあらなみのゆくへにゆる蝦夷の遠山
直文

伊藤左千夫
千葉縣の人、大正二年歿、年五十。

石川啄木
名は一、盛岡の人、明治四十五年歿、年二十七。

金子薫園
名は雄太郎、東京の人。



四とせ寢て一度たてば木も草も皆眼の下に花咲きにけり　正岡子規

いとけなき兒等の睦びやしが父の貧しきも知らず聲樂しかり　伊藤左千夫

旅七日歸り來ればわが窓の赤きインクの染みもなつかし　石川啄木

尻からげしてやれば兒はよちよちと一間ばかり歩む芝原　金子薫園

與謝野寛
鐵幹と號す、京都の人。

與謝野晶子
與謝野寛の妻、堺の人。

前田夕暮
名は洋三、神奈川縣の人。

尾上柴舟
名は八郎、岡山縣の人、東京女子高等師範學校教授、文學博士。

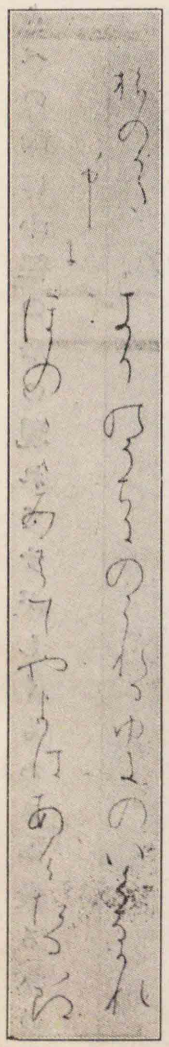
筆蹟
旅のうたの中にきりのうちにのこれるゆきのいくながれほのぼのみえてやまはあけたる　八郎

大濱の五丁がほどを黑くして網干す上のありあけの月　與謝野寛

こほろぎはやがて家をも世界をも包む翅もつ蟲かとぞ思ふ　與謝野晶子

向日葵は金の油を身にあびてゆらりと高し日の小さきよ　前田夕暮

散らばれる書を見るさへいとど佗し亂れし心見ゆるが如くに　尾上柴舟

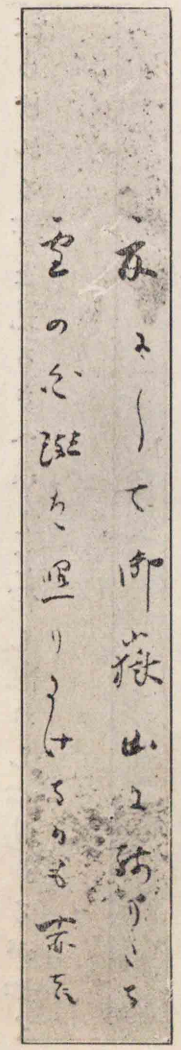


島木赤彦　本名久保田俊彦、長野縣の人。大正十五年歿。

よべの雨に小徑の石の現れてすがしくもあるか散る松の花

島木赤彦

筆蹟　夏にして御獄山に殘りたる雪の白斑は照りにけるかも　赤彦



若山牧水　名は繁、宮崎縣の人。昭和三年歿。

葛飾の冬田の原の榛の木のくきやかに晴れて日の寒きかも

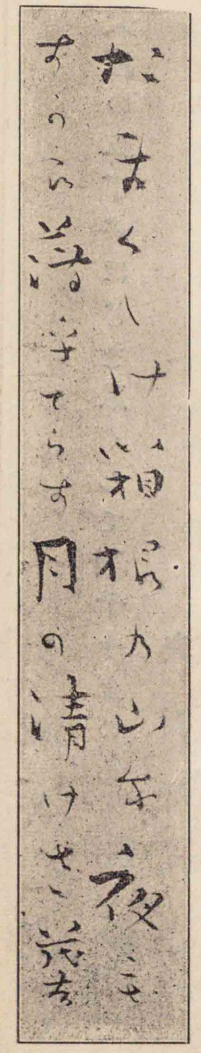
若山牧水

齋藤茂吉　山形縣の人、醫學博士。

久方の時雨ふりくる空さびし土に下りたちて鳥は啼くも

齋藤茂吉

筆蹟　たまくしげ箱根の山に夜もすがら薄をてらす月の清けさ　茂吉



窪田空穗　名は通治、長野縣の人。早稲田大學教授。

澄み來り暉く空となりにけり白菊の花地に咲き出づる

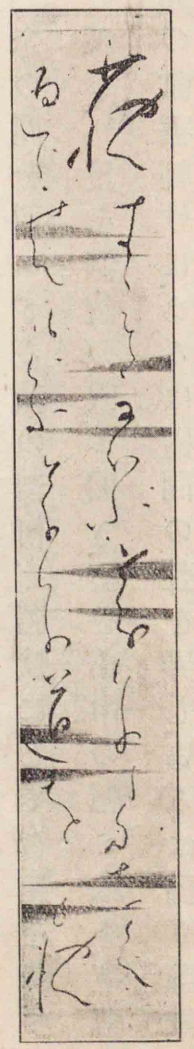
窪田空穗

北原白秋　名は隆吉、福岡縣の人。

あなあはれ日の消えがたの水ぎはに枯木一本赤き夕ぐれ

北原白秋

筆蹟　萩すゝきにほふとなりのしたしくて通らせてもらふとなりの道を　白秋



石榑千亦　名は辻五郎、東京の人。

雨くらき松原道の下り坂ゆくてあかるく波のよる見ゆ

石榑千亦

木下利玄　岡山縣の人、子爵。大正十四年歿。

ほしいまゝに伸びあがりたる波の重み倒れたゝまりとゞろと鳴るも

木下利玄

佐々木信綱　三重縣の人、竹柏園と號す、文學博士。

綱島梁川　名は榮一郎、哲學者、明治四十年歿、年三十五。

杉の梢を　秋の空尾の上の杉を離れけり（其角）

きら〳〵と海はひかりて磯の家松葉牡丹に晝の雨ふる

佐々木信綱

三　秋の姿

綱島梁川

「杉の梢を高く離るゝ秋の空、何ぞ超脱の氣象饒かなる。一念の塵を留めざる秋の潭、何ぞ淵默にして智慧を藏する深き。星を洞觀の眼と開き、雲を葛巾の帽と戴き、紅蓼・白蘋の裳裾輕げに、あるは樹間の聲を弄し、あるは獨り灝氣流るゝ空明の野を行く。げに秋の姿ぞ哲人・道士の高姿なりける。」見よ、其の衣を。尾花が波、錦の杜、桔梗・刈萱・女郎花、さては芙蓉・紫苑・藤袴のいろ〳〵に染め出づる彩のかず〳〵、

蕭蕪　荒蕪

鏗々錚々　錚錚

目もあやなれど、あはれ春草の靡蕪、夏木の鬱蒼と比して、何ぞ其の楚々として、譬ふれば一衣の羅穀の風にも婆娑たる道士の羽衣に似たるぞや。「聽け、其の聲を。滿野雨ふるが如き蟲しぐれの幽思・遠情は、人の心耳を澄ましめて、微妙の法音を聽くが如く、鏗々錚々として金鐵皆鳴る風聲・樹聲・天籟・地籟は、直ちにこれ哲人の豫言、禪士の喝語として、我等が念々の觀省に資するものなからずや。秋を仰ぎて先づ想ふは哲人の姿なり。」

哲人の世界は觀念の世界なり。積水の碧を湛へたる氣海、月光の清輝に漂へる露華、白葦・黄茅の丘野、蘆花・淺水の江湖、いづれか秋は空明一氣の中を流れざる。山の阿、水の涯、

によつぽりと　によつぽりと秋の空なる富士の山（鬼貫）

披展　披瀝

偃蹇　蹇々

到る處寸翳の目を遮るものなく、によつぽりと浮び出でたる山、美しうくねりゆく川、すべてこれ晶明、すべてこれ澄澈。げに萬有は秋に至りて、一箇の觀念世界を披展せるなり。あらゆる形式、あらゆる徽號の衣を脱ぎすてて、直ちに觀念其のまゝを赤裸々に露呈し來る。

「あらゆる形式・徽號の薫染を離れたる觀念如實の秋の姿は、一面また實在の躍々人に迫る姿なり。秋は實に其の觀念化せる明瑩の姿を以て人を壓し來る。朧にうつる醉眼の春の月、あるは菜の花がくれ打霞みゆく春の水の美、假象の世界はこゝに無くして、蔦紅葉の中より露はるゝ節くれだちし樹身、枯芝生より躍り出づる偃蹇たる雲根、いづれか

秋野としいへば　秋野といへば

秋は人に迫る實在の力を示さざる。

「吾等が哲人、秋の太虛のこゝろを仰ぎ見よ。いづこにか一點妄念の翳を着けたる。もし斯かる翳のありとせば、それは遙かなる地平線上に、罪業の名殘かすかなる斷雲の一片二片のみ。」而してそれだにやがて孤行しつゝ低迷しつゝ消え行くなり。哲人の清襟、時に罪業の雲の徂徠せざるにあらねども、それは倏ちにして一碧の心に沒し去つて、また何等の累をも留めざるなり。萬象を碧落のこゝろに包みて、執せず惑はざる剛明一氣の姿は、われ唯秋の太虛に之を仰ぐなり。嗚呼高いかな、秋の品性。

煙の如き芳草の春に引きかへて、秋野としいへば、人目も

歸依
信仰
孤懷
孤情

枯れ〳〵なるうらぶれ姿まづ目に浮べど、あはれ涸井・斷礎も千草の秋と生ひ亂れたる野邊の一日の暖かさ華やかさは、また一しほの風情ならずや。「ねよげに見ゆる若草の媚態はなけれど、秋野の温情は、たとへば、さだ過ぎたる婦の、操高く心すゞしく、歸依・慈愛の性深きにも似たるかな。」おもへば、われ尾花が秋の懷に抱かれて、得ならぬ氣海のにほひを身にしめつゝ、孤懷そゞろに遠くに騁せしをり〳〵、一種言ひ知らぬなつかしさに心動きて、涙下りしこと幾たびなりしぞ。而して我記す、そは極めて愉しき涙なりしことを。げに天地の温情は、秋の野にこそ高く脈うつことは知らるれ。

（梁川文集）

額田女王
天武天皇の妃。萬葉集の歌人。

花山院の時
永觀二年（約九四〇年前）

ふゆごもり、はるさりくれば、なかざりし、とりもきなきぬ。
さかざりし、はなもさけれど、やまをしみ、いりてもとらず。
くさふかみ、たをりてもみず。あきやまの、このはをみては、
もみぢをば、とりてぞしぬぶ。あをきをば、おきてぞなげく。
そこしおもしろし、あきやまわれは。

（春と秋―額田女王）

四　けづり屑

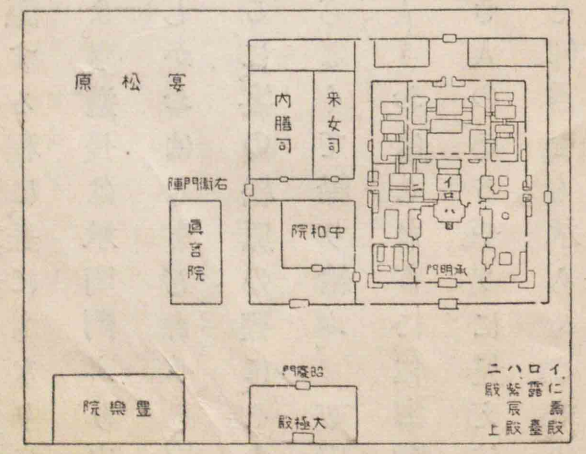
花山院の御時に、五月下つ闇に五月雨も過ぎて、いとおどろおどろしくかき亂れ雨の降る夜、帝さうざうしくや思召しけん、殿上に出でさせおはしまして遊びおはしましけるに、人々物語り申しなどし給ひて、昔怖ろしかりし事どもな

入道殿　藤原道長、時に十九歳。
道隆　道長の長兄、時に三十二歳。
豐樂院　大極殿と並んで節會の行はるゝ處。
道兼　道長の仲兄、時に二十四歳。
仁壽殿　御内宴相撲蹴鞠など行はる處。
大極殿　天皇の政事を執らせられし處、又國儀大禮を行はせられし處。

どに申しなり給へるに、「今宵こそいとむつかしげなる夜なめれ。かく人がちなるだにけしき覺ゆ。まして物離れたる處などいかならん。さらん處に、ひとりいなんや。」と仰せられけるに、「えまからじ。」とのみ申し給ひけるを、入道殿は、「いづくなりともまかりなん。」と申し給ひければ、さるところおはします帝にて、「いと興あることなり。さらばいけ。道隆は豐樂院道兼は仁壽殿の塗籠、道長は大極殿へいけ。」と仰せられければ、よその君たちは、便なき事をも奏してけるかなと思ふ。「又承り給へる殿原は、御氣色かはりて、益なしとおぼしたるに、入道殿はつゆさる御氣色なくて、「私の從者をば具し候はじ。この陣の吉上にまれ、瀧口にまれ、一人昭慶門まで送れと仰せごとたべ。」それより内にはひとり入り侍らん。」と申し給へば、「證なき事にこそ。」と仰せらるれば、げにとて、御手箱におかせ給へる刀さして、起ち給ひぬ。今二所も、にがむ〳〵各、おはしましぬ。

藤原道長（菊池容齋畫）

吉上にまれ＝にもあれ



内裏略圖

子　丑　寅　卯　辰　巳　午　未　申　酉　戌　亥
12　2　4　6　8　10　12　2　4　6　8　10

右衛門の陣　宜秋門。
中關白殿　道隆。
宴の松原　豐樂院北方の大空地。
粟田殿　道兼。
露臺　仁壽殿の傍にある屋根なき建物、舞など行はるゝ處。

子四つと奏して、かく仰せられ議する程に、丑にもなりにけん、道隆は右衛門の陣より出でよ。」と、それさへわかたせ給へば、しかおはしましあへるに、中關白殿、陣まで、念じておはしたるに、宴の松原の程に、その物ともなき聲どもの聞ゆるに、すちなくて歸り給ふ。粟田殿は、露臺のあたりまで、わなゝくく　おはしたるに、仁壽殿の東面の砌のほどに、軒とひとしき人のあるやうに見えければ、物もおぼえで、身のあらばこそ仰言をも承らめとて、各かへり參り給へれば、御扇をたゝきて笑はせ給ふに、「入道殿は、いと久しう見えさせ給はぬを、いかゞと思召すほどにぞ、いとさりげなく事にもあらずげにて參らせ給へる。「いかに、いかに。」と問はせ給へば、いとのどやかに、御刀に削られたるものを取り具して奉らせ給ふに、「こは何ぞ。」と仰せらるれば、「たゞにて歸り參り侍らんは、證さぶらふまじきによりて、高御座の南面の柱のもとを削りとりて候なり。」と、つれなく申し給ふに、いとあさましう思召さる。　こと殿たちの御氣色は、今にもなほ直らで、この殿のかくてまゐり給へるを、帝より始め感じのゝしり給へど、羨しきにや、又いかなるにか、物もいはでぞ侍ひ給ひける。　なほ疑はしく思しめされければ、つとめて、藏人して削屑を押しつけさせて見給ひけるに、つゆ違はざりけり。　そのけづり痕は、いとけざやかにて侍るめり。　末の代にも見る人は、なほあさましきことにぞ

つれなし　無愛想
あさましう　まゐり

大鏡　八卷、作者不詳、文德天皇より後一條天皇までの假名文の歴史。

御堂　法成寺。京都の東北隅、京極土御門にあり。

攝政殿　藤原頼通、道長の長子、世に宇治關白といふ。

殿の御前　道長。

申ししかし。（大鏡）

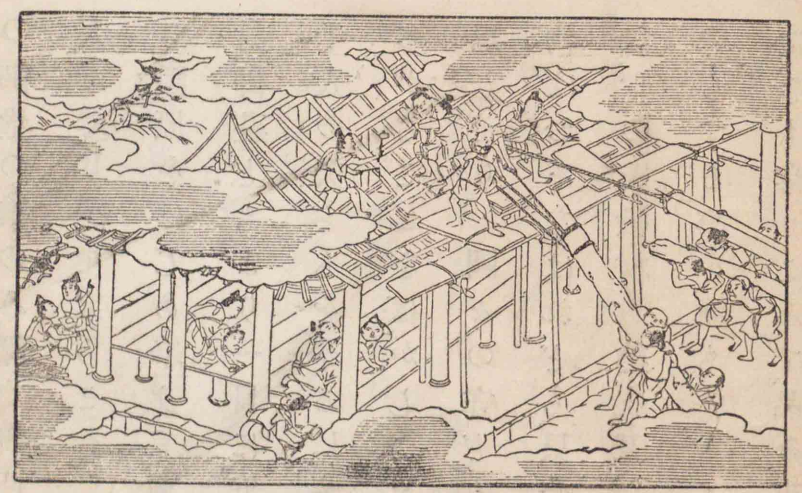
五　御堂造營

今は御心地例ざまになり果てさせ給ひぬれば、御堂の事思し急がせ給ふ。攝政殿國々までさるべき公事をばさるものにて、まづ此の御堂の事を先につかうまつるべき仰言のたまふ。殿の御前も、「此の度生きたるは別事ならず、此の願の叶ふべきなめり。」と宣はせて、他事なく、たゞ御堂におはします。方四町をこめて大垣にして、瓦葺きたり。樣々に思しおきて急がせ給へば、夜の明くるも心許なく、日の暮るるも口惜しう思されて、夜もすがらは、山を疊むべきやう、池

栽ゑ

なべての樣

作りなべ

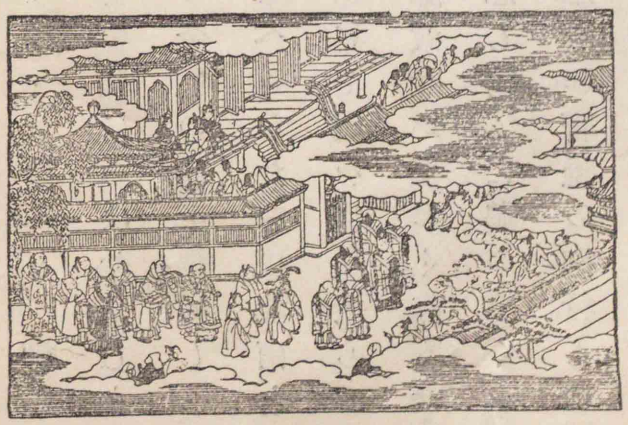


法成寺造營の古畫（一）

を掘るべきやう、木を栽ゑなめさせ、さるべき御堂々々、方々樣樣造りつゞけ給へり。御佛はなべての樣にやはおはします。丈六の金色の佛を、數もしらず作りなべ、そなたをば北南と馬道をあけて、道を整へ造らせ給ひて、廊渡殿かず多く作らせなんと思し給ふに、鶏の鳴くも久しく思され、宵曉の御行も怠らず、安きいも大殿ごもらず、唯こ

の御堂の事のみ、深く御心にしませ給へり。日々に多くの人々參り罷で立ちこむ。さるべき殿原をはじめ奉りて、宮々の御封、御莊どもより、一日に五六百人、千人の夫どもを奉るにも、人の數多かることをば、かしこきことに思したり。國々の守ども、地子官物はおそなはれども、只今は此の御堂の夫役・材木檜皮・瓦など多く參らする事を、我も〳〵と競ひつかうまつる。大方近きも遠きも參りこみて、品々方々、あたり〳〵につかうまつる。

參らする・事



法成寺造營の古畫（二）

或所を見れば、御佛つかうまつるとて、佛師ども百人ばかり並みゐてつかうまつる。同じくはこれこそめでたけれと見ゆ。御堂の上を見上ぐれば、工匠ども二三百人のぼりゐて、大きなる木どもには大綱をつけて、聲を合せてえさまさと引上げさわぐ。御堂の中を見れば、佛の御座作りかゞやかす。板敷を見れば、木賊・椋の葉などして、四五十人手毎に並みゐて磨き拭ふ。檜皮葺・壁塗・瓦作なども數をつくしたり。又年老いたる翁などの、三尺ばかりなる石を、心に任せて切りこゝのふるものあり。池を掘るとて四五百人おりたち、山を疊むとて五六百人のぼりたち、又大路の方を見れば、力車にえもいはぬ大木どもに綱をつけて、叫びのゝし

綱網

任せて

りて引きもてのぼる。鴨川の方を見れば、筏といふものに樽・材木を入れて、棹さして心地よげに謠ひのゝしりて上るめり。大津・梅津の心地するも、西は東といふことはこれなりけりと見ゆ。磐石といふばかりの石を、はかなき筏にのせて率て來たれど沈まず。すべて色々樣々いひつくし、まねびやるべき方なし。かの須達長者の祇園精舍作りけんも、かくやありけんと見ゆるを、冬の室、夏の風、各、こと〴〵なり。

梅津　京都府葛野郡桂川の東。

須達長者　須達多といふ、舍衞國の富豪、祇園精舍を建てて佛に奉れりといふ。

祇園精舍　釋迦時代にありし印度の古寺。

かゝる御勢にそへて入道せさせ給ひて後は、いとゞ勝らせ給へりと見えさせ給ふにも、猶なべてならざりける御有樣かなと、近う見奉る人は尊み、遠う見奉る人は、遙かに拜み

近う・遠う

參らす。今は此の御堂のあたりの木草ともならんと思へる人のみ多かりき。そなたざまに赴けば、海の涙もやはらかにたちて、此の御堂のものを持て運ばせ、河も水すみて、快く浮べても參ると見ゆ。なほなべて、此の世の事とは見えさせ給はず。まづは、先年に長谷寺にある僧の、御祈禱をいみじうして寢たりける夢に、大きにいかめしき男の出で來て、「何かかく殿の御事をばともかくも申し給ふ。弘法大師の、佛法興隆の爲に生れ給へるなり。」とぞ見えさせ給ひける。又天王寺の聖德太子の御日記には、「王城より東に、佛法弘めん人を我と知れ。」とこそは書置かせ給ふなれ。いづれにてもおろかならぬ御事なり。（榮華物語）

長谷寺　奈良縣磯城郡初瀬町。

天王寺　大阪市天王寺區四天王寺。

榮華物語　四十一卷、作者不詳、宇多天皇より堀河天皇に至るまでの事を記せる雜史。

飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時移り事さり、樂しみ悲しみ行きかひて、花やかなりしあたりも人住まぬ野らとなり、變らぬ住家は人改まりぬ。桃李物言はねば誰と共にか昔を語らん。まして見ぬ古へ、のやんごとなかりけん跡のみぞいと果敢なき。

京極殿、法成寺など見るこそ、心ざし止まり事變じにけるさまはあはれなれ。御堂殿の造り磨かせ給ひて莊園おほく寄せられ、我が御ぞうのみ、御門の御うしろみ、世のかためにて、行末までと思し置きし時、いかならん世にも斯ばかりあせ果てんとは思してんや。大門・金堂など近くまでありしかど、正和の頃南門は燒けぬ。金堂は其の後倒れ伏したる儘にてとり建つる業もなし。無量壽院ばかりぞ其のかたとて殘りたる。

飛鳥川　飛鳥川は大和國高市郡にあり。「世の中は何か常なる飛鳥川きのふの淵ぞ今日は瀬となる」（古今集）

桃李物言はず　桃李不レ言春幾暮。煙霞無レ跡昔誰栖。（和漢朗詠集）

京極殿　京都の土御門の南、京極の西にあり、道長の邸宅。

正和　花園天皇の朝。

丈六の佛九體、いと尊くて並びおはします。行成大納言の額、兼行が書ける扉、鮮かに見ゆるぞあはれなる。法華堂なども未だ侍るめり。これも亦何時までかあらん。かばかりの名殘だになき所々は、おのづから石ずゑばかり殘るもあれど、さだかに知れる人もなし。されば、よろづ見ざらん世までを思ひおきてんこそ、果敢なかるべけれ。（飛鳥川の淵瀬―吉田兼好）

行成　藤原行成のこと。小野道風と藤原佐理と並んで三蹟と稱せらる。

兼行　藤原兼行、能書家。

小島烏水　名は久太、高松の人、横濱正金銀行員、紀行・文藝を以て知らる。

ユーゴー　フランスの詩人、近代フランス文學史上第一位にあり、と稱せらる、西暦一八八五年歿、年八十四。

六　豐太閤の最期

小島烏水

「甚だしいかな、愛惜の人に於けるや。よしや天と地とを轉ばし得べき槓杆はありとも、愛惜を割く何物かあらん。ユーゴーはいひぬ、女は弱し、然れども母は强し。」と。されど豐太閤の强きに反して、秀頼の父なる秀吉の如何に弱かりしよ。抑、この巨人が死に垂

んとするの際、いかに哀絶痛絶の語を吐きしとするぞ。「將」瞑、已而張目曰、勿使我十萬兵爲海外鬼、言畢而薨。」と外史に書かれたるは、洵に英雄の最期を壯にする爲には、絶好の史筆ならんも、事實は決して斯くの如くならず。病重くなりてより頓に革まるに至るまで、奇なることは、一言も征韓の將士に言ひ及ぼさずして、ただこの世に遺しゆくなる一塊肉―秀賴のためをのみ思ひつゞけたることなりき。「蓋し彼が故主の子に加へたる殘虐は、こゝに倍加して彼が子に酬い來らんことを無意識の間に豫想したりしか。この豫想の實現より免れんがために、却つて後年の執行手たる家康に、一子の將來を

故主の子　織田信長の子、信雄・信孝。

委托するに至りては、知るやいかに、汝に出づるものは汝に歸ることを。たとひ佛家の謂はゆる因緣說を否定すとも、彼はこゝに關白にもあらず、太閤にもあらず、一個無告の老爺となりて、おのづからなる運命の前に慴伏したらんこと、殆ど疑を容れざるなり。

今や彼は溺れんとして、猶一莖の草を握れり。彼が八月五日の文書を見るに、一字一涙、面を背けずして讀み得るもの果して幾人ぞ。

八月五日　慶長三年。

五人の衆　徳川家康、前田利家、上杉景勝、毛利輝元、浮田秀家の五大老。

秀賴事、成立候樣に、この書付候衆しん賴み申候。何事も此外には思ひ殘すことなく候。かしく。

返すゞ〳〵　秀賴事たのみ申候、五人の衆賴み申上候。名殘をしく候。

洵にこれ隻行斷句、寥落として四周の空白も亦至情の絶調に充つ。豐太閤の文書、由來措辭奇古にして氣魄雄大、眼中人なし。殊にか

の朝鮮國王に與へたる書の如き、宇宙有數の跌宕文章、祐筆の起草に係ると雖も、太閤の口授なくしていかでか彼が如くならん。曰く、

夫人生二于世一也、雖レ歷二長世一、古來不レ滿二百年一、焉鬱々久居、此乎。不レ屑二國家之隔、山海之遠一。一超直入二大明國一、易二吾朝風俗於四百餘州一、施二帝都政化於億萬斯年一者、在二方寸中一。

と、又曰く、

予願無レ他、只顯二佳名於三國一而已。

と、讀み來りて、前の哀猿雲に叫ぶにも似たる文字と對照せば、何ぞその公生涯の大にして、私情の小なるに惑ふことの甚だしき。抑、その大なるものの僞にあらざるを肯定したるものにして、又誰か小なるものの眞なるを否定するものあらん。

文祿二年六月二十八日、太閤外征留守の將士の勞を犒はんとして、今の謂はゆる園遊會を催したることありき。諸將皆趣向を凝らし、異樣に扮裝して興を常く。家康はあじか賣になり、前田利家は高野聖の笈を肩にかけて梵唄し、蒲生氏郷は茶商となり、前田玄以は比丘尼に扮し、其他禰宜・普化僧・宿屋の亭主などに裝ひて、さまざまの歡を盡ししが、太閤は「柿帷子を召され、藁の腰蓑、黑き頭巾、菅笠を御肩に物し、味よしの瓜召され候へ」とありしは、聊か商人に違ふ所もなうて」觀るものを抱腹せしめたりといふ。當時太閤の容貌を手記するものの文に曰く「殊の外御機嫌にて、布袋の笑へる樣に、目も口もなきばかりに見えさせ給ふ。」と。その福相、宛として睹るが如し。而して病床より利家の手を攬りて、孤を託する時は如何といふに、利家自ら語りたる所によれば、「秀吉公御意にて、秀賴を立つるも退くるも大納言次第と被仰候て、御病中に起上らせ給ひ、我等が手を御取り候て、奉行共もつくばひ居り申候處にて戴かせられ、賴み申すぞ大納言、大納言、と繰返し〳〵御言被成候。」といふ。

蒲生氏郷　會津に封せられ百萬石を領す。

前田玄以　名は宗徇、初め叡山の僧なりしが、秀吉に仕へて五奉行の一人となる。

抱腹　捧腹絕倒

大納言　利家、加賀大納言と稱す。

奉行　石田三成・增田長盛・淺野長政・前田玄以・長束正家の五奉行。

こゝなる太閤の相貌は顴骨高うして眉蹙まり、頰は削げ、頤は痩せ、眼采纔かに炯々たるも、一片峻峭の氣は磨し盡されぬる一個の貧叟より以上ならず。「死ぬるものは一切の負債を償却し了んぬ」と雖も、愛の煩惱こそいとほしけれ。彼は是に至りて分身せり、一身は豐太閤として山巔に立ち、一身は尾州中村なる農夫の忰として谿底に這へり。悲叫して水面を斜絶するものあり、詩人仰いで曰く「一鳥分身上下飛」と。偉人「最期の刹那、亦斯の如くなりき。これ影にして、かれ體なるか、抑、かれ假にして、これ本なるか。此と對照するために彼ありしのみ、彼を傍觀せんがために此ありしのみ。

われ史を讀みてこゝに至る、常に卷を掩うて泣く。功名・野心・征服、所詮は醇酒に醉ひたる春宵一酌の夢なりけり。」されば方孝友が其の兄孝孺等と刑に就くの日、從容賦して曰く「旅魂依舊到二家山一」と。太閤この清醒なかりきと雖も、内は一家の存亡問題と、外は一

共に支那明代の學者、燕王に反するに及んで節を守りて仕へず、遂に害せらる。

方孝友
方孝孺

旅魂云々
阿兄何必淚潸々、取レ義成レ仁在二此間一。華表柱頭千載後。旅魂依レ舊到二家山一。

國の危急問題とに挾まれ、秀頼のためには希望と絶望との間を右往左往し、現在は榮華、將來は茫焉、その間に介まれて、悶え、泣き、苦しみ、噪ぎ、はては攝政もなく、關白もなく、南山不落の名城もなく、赤裸裸の老爺となりて、唯六歳の小兒を懷ふ。人は決して欺かれず、太閤は死に至るまで、自ら威力の奴隷なることを意識せざりきと雖も、六十餘年の生涯中、未だ曾て此の際より眞なるは無かりき。顧眄すれば山崎や、小牧山や、征韓の役や、親の血は子の骨に瀝ぎ、臣の馬は君の肉に肥ゆとも、こゝに數齣の精神的幻戯なりしのみ。醒むるとき卽ち太閤亡く、大阪城亡かりき。

南山不落
如二月之恒一、如二日之昇一、如二南山之壽一、不レ騫不レ崩。（詩經）

年代記は其一行を割いて曰く「慶長三年八月十八日、豐太閤薨ず、歳六十三。」と。（烏水文集）

○

豐公は結局幸運の人にして、また不運の兒なりき。公初め子なく、晩

くして嫡子鶴松を擧げたれども、二歳にして夭死し、次子秀頼は、公の薨去の時纔かに六歳に過ぎず。その到底難局を處理すべくもあらざるを看ては、我等は豐臣氏の爲に、その不運を哭せざるを得ざるなり。嗚呼、一族門葉少くして、一子幼弱なり。公は「個人の尊嚴」の爲に萬丈の氣焔を吐きたれども、その裏面に潛む悲哀をも、亦遺憾なく體驗したるなり。

かくて、公の事業は公の一代を以て終局を告げたり。然り、豐臣氏の運命は、雨後の大空を彩れる虹の如く、美しくも亦果敢なきものなりきと雖も、公の存在は儼然として千秋萬古犯すべからざる大いなる事實なり。殊にその純然たる個人的力量によつて、風雲を叱咤し、雷霆を制叱し、空前絶後の大業を成し得たるは、門閥なく、財閥なく、黨閥なく、閨閥なく、孤身孑然として人生の戰場に立てる年少子弟をして、慨然案を拍つて起たしめずんばあらず。憫むべき彼等の味方となり、同情者となり、激勵者となり、慰藉者となり、藹然笑を含んで傍に立つ公は、眞に讃すべきかな。實にこれ國民生活に生氣を與へ、國民思想に活力を鼓吹し、

坪内逍遙　名は雄藏、名古屋の人、文學博士、早稲田大學教授。

中村孝也　群馬縣の人、文學博士、史料編纂官。

長柄堤　大阪府西成郡豐崎村を流るる長柄川の堤、長柄川は一名中津川とも云ひ淀川の一支流なり。

生々流動する若き革新的思潮を鞭撻する英雄にあらずして何ぞや。第十六世紀の時代精神が具體化せられたる最大の偶像なると同時に、第二十世紀の時代精神が要望しつゝある崇麗なる人格にあらずして何ぞや。公の出現によつて、當代に於ける「個性の發揚」は完成に達し、光芒陸離として古今東西を照らす。而して後世の國民は個性の發揚に對する最大の儀範を國史の上に認むるを得たり。我等は公によつて發揚せられたる「個性の尊嚴」に對し、最も熱心なる讃美の聲を禁ずる能はざるなり。（個性の尊嚴―中村孝也）

七　長柄堤の訣別

坪内逍遙

晨鷄再び鳴いて殘月薄く、征馬連りに嘶いて行人出づ。はや分れゆく横雲や、殘の星を一つづゝ、鐘が消しゆくいなのめの、長柄堤に秋たけて、一むら蘆に風黑く、ありあけすごき大川水、ゆきて歸らぬ涙の音、狹霧にむせび白けゆく、千草が蔭の蟲

片桐且元　秀吉の臣、攝津茨木二萬五千石を領す、元和四年（約三一〇年前）歿、年六十二。

故殿下　豐臣秀吉。

加藤肥州　清正。

の聲、哀はいとゞまさるらん。片桐市正且元は、居城茨木へ立退かんと、從ふ郎黨一百餘人、深更に邸を立つて、大阪城をあとになし、列を正してしづ〳〵と、長柄堤にさしかゝる。（中略）

後には何か一思案、寂然として駒たつる、長柄堤の有明がた、塒に囀る小鳥の聲、川霧やう〳〵霽れゆけば、遠樹模糊として幹を分ち、ほの見えわたる賤が屋に、一筋のぼる朝煙、くだかけの聲勇ましく、生氣溢るゝ東の、空には似ぬや入り方の、月凄まじき柳蔭、枯葉枝疎らにして風飄々、見る目も昏し遠方に、おぼろ〳〵とあらはるゝ、名に大阪の四衢八街、悄然として寂しげに、一棟高く聳えしは、

市「おゝ、あれこそはお天守ぢやなあ。南山不落と祝はせられ、千萬年の後迄もと、築かせられし大阪城、故殿下かくれさせ給ひて後、まだ程もなきに礎ゆらぎ、諸大名の心は離れ〴〵、取分け加藤肥州逝

大政所　秀吉の妻。

脣齒亡ぶ　輔車相依、脣亡齒寒。（左傳）

南山不落　難攻不落

金城湯地

千姫　秀忠の長女、秀賴に嫁す。

祝ひし文字　京都大佛殿の鐘の銘の「國家安康」の文字。

去の後は、思慮ある者には堅節なく、義勇を存ずる者才略乏しく、阿附黨同して相鬩げば、大政所の御方さへ、當家を餘所に見そなはし、浮世はなれし御ありさま。脣齒已に亡ぶ、今にもあれ事起らば、「金城湯池」もその甲斐なく、

長柄堤背景（舞臺面）

いひかけて聲くもらせ、

市「須彌より重き御遺命、夢聊かも忘れざれど、御運の末か情なや、この且元がすること爲すこと、いすかの嘴とくひちがひ、兩家を繫ぐ絆にもと、迎へ奉りし千姫君は、東西不和の導火となり、毘盧舍那佛の御胸にも、大慈大悲は宿らざるか、お家とこしなへに康かれと、祝ひし文字が元となり、降つて

前門の虎（前門拒虎、後門進狼。（成語考））

誤る

過つ

不覺の涙

不覺の名

沸いたる難題は、たゞ前門の虎にして後に不慮の豺狼あり。かゝる仕宜となつたること、御運の末とはいひながら、

こらへず馬より飛下り、彼方に向ひ平伏なし、

市「これ併しながら不肖且元、愚昧にして先見なく、姑息因循して大事を誤り、空しく關東の罠にかゝり、仰せつけられし御遺命に、背き奉るけふの仕合せ、不忠とも言ふ甲斐なしとも思しめさん。それを思へば且元が、この腸はちぎるゝばかり。償ひがたき不臣の罪は、あの世で御わび仕らん。お許しなされて下さりませ。

在すが如く兩手をつき、人目なければ稍しばし、不覺の涙に暮れけるが、やゝあつて心付き、

市「あゝ、我ながら不覺の至。わが大罪のお詫よりも、さしかゝるお家の安危。長門守には如何にせし、心元なきことどもぢやなあ。

すかし眺むる折こそあれ、遙かに聞ゆる蹄の音。程もあらせず只一騎、殘霧つんざき一散に、汗馬に宙を走り來る、木村長門守重成、

木「市正殿に候な。市「長門殿、待ちかねしぞ。

いふ閒にかけ寄るくつわづら、右手に下り立ち顏見合はせ、言葉はなくてそゞろにも、まづ袖ぬるゝ朝露や、風飄々たる枯柳の枝、入り方の月ゆらめきて、老いゆく秋のさびしさを、長柄堤にとゞむらん。

木「もはや豐臣の御社稷も、いよ〳〵末となつたるか。棟梁と頼む足下まで、佞人讒者の毒舌に、逆臣の汚名を受け、空しく退身せらるるとは。某圖らぬ事よりして、端なくも御母公の御嫌疑蒙り、出仕を遠慮のその閒に、思ひがけぬ珍變あり。つゞいて足下に御討手と、昨朝承り、大いに驚き、すぐにお表へ參入すれば、城内議論沸くが如く、織田入道殿日頃に似氣なく、激論の末、席を蹴たて、只今退座あり

御母公（秀頼の生母淀君。）

織田入道（織田信雄常眞入道。）

大野・渡邊　大野修理亮治長、渡邊内藏介。

徹撤轍

しとばかり。後は亂脈無法の評定、御母公の威を笠に被る、大野・渡邊等が我意暴慢。この上は是非に及ばず、彼等を一刀に斬つて捨て、腹かつ切らんと、二度まで刀の柄に手はかけしが、貴殿が日頃の教訓を、思ひ出して無念を忍び、冤を知つて忠臣を、救ひ得ざりしいふ甲斐なさ。

悔むを且元おしなだめ、

市「いしくも堪忍せられしぞや。かねても屢、申せし如く、御家の大仇は彼等にあらず。鼠輩の爲に命を落すは、大忠臣の所爲にあらじ。某とてもこの度の一條、遺恨骨髓に徹すと雖も、今更繰返すは愚癡の至。大切なるはお家の後事。某退去のこと關東に聞えなば、破綻生ぜん事治定なるに、きのふまでは去就を定めざりし織田殿の、已に心を變じ、京表へ退身せられしからは、城内の祕密悉く漏れ、年來の苦心皆うたかた。大亂破裂せんは目前なり。この上は

九度山　和歌山縣伊都郡高野山の北谷にあり。

跋扈　跳梁

只ひとへに、籠城の計畫こそ肝要なれ。杰「して籠城の計畫とは、何を以て先とすべきか。市「されば今御城に兵糧・金銀は乏しからず。まつた猛卒勇士にも事かゝねど、得難きは智謀の將なり。某これを慮り、萬一の備をなし置きたり。杰「してその智謀の將とは。市「今九度山に隱れ忍ぶ信州上田、前の城主、眞田安房守が二男左衞門佐幸村こそ、故太閤の恩を思ふ智勇兼備の良軍師。關が原の一戰以來、關東の跋扈を怒り、蠶して世の態を窺ひ居るを、先年お身方となし置いたり。この事起らば上使を以て、急ぎ彼を招かるべし。合戰の進退は一切かの人に任せられよ。その

日元重成の訣別（劇）

購贖

南山不落　金城鐵壁

老奸雄　德川家康。

他關が原の一亂以後、浪々なせし長曾我部盛親、まつた黑田家の浪人後藤又兵衞基次、いづれも得易からぬ良將なるが、豫て因みは附け置きたり。御上使を以て招かせられなば、心を傾け馳せ參ぜん。これ第一の手配りは。市「その儀もかねて地利を考へ、出丸なくては協ふまじと、前年紀州の山々より、材木あまた切り出させ、商業の爲と僞り、紀州川の川上より、浪速津に押流させ、御船入に積置いたり。まつた港口の御庫には、年頃力めて購ひ置きたる、數萬俵の糧米あり。籠城數年に亙るとも、なほ支ふるに餘あるべし。本「それに加へて故殿下が、貯へおかれし數萬の金銀、近年御出費かさむと雖も、なほ若干の餘財あり。市「甲冑兵具も乏しからず。本「城は名に負ふ南山不落。市「眞田・後藤の智勇をもて、この堅城にたて籠り、忠臣悉く心を一にし、偏に君家を守護するときんば。本「たとひ關東の老奸雄、

速水　速水守久。

御宿　御宿正倫。

和久　和久宗是。

社鼠　城狐社鼠

利をくらはせ諸大名をなづけ、六十餘州の兵を盡し、四方八面より攻寄すとも、市「なか〳〵三年四年がほどには、攻落さんこと難かるべし。本「まつた若年には候へども、いよ〳〵軍始まりなば、我また一方を承り、速水・御宿・和久等と共に、忠義を金鐵の堅きに比し、命は素より鴻毛の、吹飜さん白旗は、祖先佐々木が四つ目結、君臣將士心を一にし、千變萬化の手を盡さば、金石も亦透りぬべし。利欲に集まる關東勢、なに退くるに難かるべきや。この上は仰に從ひこのこと君に言上なし、直ちに軍の手配りせん。御心安かれ市正殿。市「ほゝ、賴もしし〳〵。唯大切なるは上下の一致、必ず忠勤勵まれよ。とはいひながら往時に照らし、成行く末を鑑みれば、本「淀の御方の御氣質、社鼠にひとしき大野・渡邊。市「上、御發明にわたらせらるれど、市「讒佞これを蔽ふがゆゑ、市「地の利はあれども人の和なく、本「故太閤が御威武に、戰き震ひ打伏しし、六十餘州の民草

大御所　德川家康。

幸田露伴　名は成行、東京の人、文學博士。

も、市「天の時にや大御所のおのづからなる德風に、いつしか靡く世の有樣。本「如何なればかくまでに、御運傾く西天の、市「有明の影うすれつゝ、本「東天紅と八面に、かしましく鳴くくだかけは、市「新日東天に昇るといふ、本「世の成行の、二人「影なるか。

是非もなき世の有樣と、入る方の月詠め入り、暫しは愚癡にをちかた寺、耳驚かす鐘の聲、夜はほのぐと明けにけり。

（桐一葉）

八　受　發

幸田露伴

大丈夫苟も身を學藝に委ねんと欲せば、まづ受發の二途に於て大丈夫の覺悟あるを要す。受とは內の外に受くるなり。發とは外に內の發するなり。受くることは須らく大海の百川を呑むが如くなるべし、發することは宜しく甘雨の八方に澆ぐが如くなるべし。受くることの多からざらんことをこれ嫌ひて、川の大、川の小を嫌はず。發することの豐かならざらんことをこれ恐れて、方の東、方の西を問はず。これを受發二途に於ける大丈夫の覺悟とす。受くるに嫌ふ所あり、發するに問ふ所あるは、兒女の情のみ、大丈夫の覺悟にあらず。

甘雨　甘雲

受は發の本なり、發は受の末なり。途は二にして、實は一。受を能くすれば、發はその中に在り。大賢は能く受く。中才は勉めて克く受く。賤人は好んで受くるあり、敢へて受けざるあり。誓つて必ず賤人たらざらんを期する、これを眞に身を學藝に委ぬといふ。受の途に於て工夫刻苦する

好んで

堪へ。

日に新に　苟日新日々新又日新。（大學）

況や…をや

者は學藝を成すに庶幾からん。受の途に於て大丈夫の覺悟なき者は、爲すにだに堪へざらんとす、何ぞ成るとあらん。

士の身を學藝に委ぬる者、誰か生を終ふるまで人の批評を被らざる者あらんや。我、思ふ所あり、言ふ所あり、人もまた思ふ所あり、言ふ所あり。我、我が口を箝して人の言に就くを難しとせば、人をして其の舌を結んで、我が意に從はしめんとするも、亦甚だ難からずや。批評の我に加へらるゝや、堯舜の聖と雖も、亦これを如何ともする無し。況や身死し、肉爛れても、日に新に、日々に新に、批評の鞭笞を我が枯骨に加ふる士の蜂起・簇生せんも、亦、未だ知るべからざるをや。

批評の性は多く（ホメオトシソシリ　ほめそしる）褒貶毀譽を具す。人の情は常に譽を愛し、

簸弄　飜弄

褒を愛して、毀を惡み、貶を惡む。こゝに於て毀譽・褒貶の我が頭上に加へらるゝや、大丈夫の覺悟なき者、或は徒らに懼れ、或は徒らに驕り、或は人を恨み、或は自ら足れりとして、惜しむべし、堂々たる六尺の身、他人の簸弄する所となり了りたるを悟らず、人を颱風にし、我を粃糠にす。實に自ら待つの薄きのみならず、抑、又學藝に負くこと多しといふべし。

大丈夫豈かくの如くなるべけんや。それ大海の百川を呑む、大も亦呑み、小も亦呑み、清も亦辭せず、濁も亦辭せず、日に默々たり、洋々たり、而して漸く我が大を成し、徐ろに我が大を用ひ、日に活潑々たり、圓陀々たる大作用をなす。大賢の、人の言を受くる、亦、かくの如し。精雜疏密の說、毀譽褒貶の

評、皆一齊にこれを受けて擇ばず。たゞ片言隻語も、我が知非の鑑、修治の因たるべきものの、我をして日に進ましむるあらんことを願はざる無し。古人まことに斯くの如し。堯舜の聖、批評を如何ともするなしといへど、批評も亦堯舜の聖を如何ともするなし。

この故に、學藝に志ある者は、能く外に受くる大、賢の如くなる能はずとも、勉めて己に克つて人に受くべし。饒舌の分疏は牙婆の醜態、逆耳の言に聽かざるは好漢にあらじ。縱令、滿面の詬辱、堪へんとして堪ふる能はず、筋張り、血湧き、劍を拔いて直ちに報いんと欲するに至るとも、先づ牙關を咬定して隱忍し、頭を垂れ、心を虛とする工夫の裏より、一天

逆耳の言　良藥苦口利于病、忠言逆耳利于行。（孔子家語）

拔いて報いん

地を拓き得て、笑つて、立つて、謝して、牛溲馬勃をも我が藥籠中に收むるが如くならんを期すべし。これを大丈夫の受の覺悟といふ。人貶すれば便ち受けずして胡言亂說し、人讚すれば便ち默受して欣々たる如きは、閨閤の兒女に在つては咎むべくもなし、學藝の士に在つては甚だ鄙しむべしとす。學藝に遊ぶものは當に反求の功に賴るべし、漸く深造するあらん。たゞ反求の功に賴る、則ち揚げらるゝも自滿せず、抑へられなば愈、奮ふに足らん。

大丈夫當に受發の二途において、大丈夫の覺悟を以て立ち、而して學藝に盡すあるべし。子思曰く、「能くその心に勝つ、人に勝つに於て何かあらん。能くその心に勝たず、人に

反求
反省

子思　孔子の孫、中庸を作る。

勝つを如何せん。」と。爲す所ありて美とせられず、内に求めずして人に責むる、その情は憫むべし、その爲は悲しむべし。我、豈、人の勝つを好むを陋とするのみならんや、我又實にこれを愧づ。倣はんかな海や、百川それ海を如何せん。（讃言）

○

泰山不レ讓二土壤一故能成二其高一。
河海不レ厭二細流一故能成二其深一。（李斯）

紀貫之　古今集の撰者天慶九年（約九八〇年前）歿。

廿四日　承平四年十二月。

九　船路

紀貫之

廿四日。講師、馬の餞しに出でませり。ありとある上下、童まで醉ひしれて、一文字をだに知らぬものしが、足は十文字に踏みてぞ遊ぶ。

大津・浦戸　大津は高知縣長岡郡に、浦戸は同吾川郡にあり。

或る人　貫之自身を指す。

廿日　承平五年一月。

廿七日。大津より浦戸をさして漕ぎ出づ。かくあるうちに、京にて生れたりし女子、こゝにして俄かにうせしかば、此の頃の出立急ぎを見れど何事もえ言はず。京へ歸るに、女子のなきのみぞ悲しみ戀ふる。ある人々もえ堪へず。

此の間に或る人の書きて出せる歌、

都へとおもふも物の悲しきは
かへらぬ人のあればなりけり

又或る時には、

あるものと忘れつゝなほ亡き人を
いづくと問ふぞ悲しかりける

廿日。昨日のやうなれば船も出さず、皆人々憂へ歎く。

見てや…しける

苦しく心もこなければ、唯日の經ぬる數を、今日いくか二十日・三十日と數ふれば指もそこなはれぬべし。いとわびし。夜はいも寢ず、二十日の夜の月出でにけり。山の端もなくて海の中よりぞ出でくる。かうやうなるを見てや、昔安倍仲麻呂といひける人は、唐土に渡りて、歸りきたる時に、船に乘るべき所にて、彼の國人、馬の餞し、別を惜しみて、彼所の唐歌作りなどしける。あかずやありけん、二十日の夜の月出づるまでぞありける。其の月は海よりぞ出でける。これを見て、仲麻呂のぬし、我が國にはかゝる歌なん神代より神も詠みたび、今は上中下の人も、かうやうに別れ惜しみ、よろこびもあり、悲しみもある時には詠む」こて詠めりける歌、

青海原
古今集羇旅の部には「天の原」とあり。

なん…ける

青海原ふりさけ見れば春日なる
三笠の山に出でし月かも

こそ詠めりける。彼の國の人、聞き知るまじく覺えたれど、ここの意を、男文字にさまを書き出して、こゝの詞傳へたる人に、言ひ知らせければ、意をや聞き知りたりけん、いと思の外になん愛でける。唐土と此の國とは言葉異なるものなれど、月の影は同じことなるべければ、人の心も同じことにやあらん。さてそのかみを思ひやりて、或る人の詠める歌、

都にて山の端に見し月なれど
波より出でて涙にこそ入れ

廿一日。卯の時ばかりに船出す。皆人々の船出づ。こ

れを見れば、春の海に秋の木の葉しも散れるやうにぞありける。おぼろげの願によりてにやあらん、風も吹かず、よき日出できて漕ぎゆく。此の間に、つかはれんとて、附きて來る童あり、それが歌ふ歌、

なほこそ國の方は見やらるれ
我が父母ありとし思へばかへらや

と謠ふぞ哀れなる。かく謠ふを聞きつゝ漕ぎ來るに、黑鳥といふ鳥、巖の上に集まり居り、その巖の下に浪白く打ち寄す。「檝取のいふやう「黑鳥の下に白き浪寄す」とぞいふ。此の詞何とにはなけれど、物言ふやうにぞ聞えたる。人のほどにあはねば咎むるなり。」かく言ひつゝ行くに、船君なる

人、浪を見て、國よりはじめて、海賊報いせんと言ふなる事を思ふ上に、海の又恐ろしければ、頭も皆しらけぬ。七十八十は、海にあるものなりけり。

我が髪の雪と磯邊の白浪と
いづれまされり沖つ島守

（土佐日記）

土佐日記　一巻、承平四年の冬、貫之、土佐守の任満ちて都に歸る時の海路の日記。

在五中將　在原業平、阿保親王の第五子、在原姓を賜ふ、右近衛中將となる。世稱して在五中將といふ、元慶四年（約一〇〇年前）歿、年五十六。

一〇　在五中將

一、東下

昔、男ありけり。その男、身をやうなきものに思ひなして、京には居らじ、東の方に住むべき所求めんとて往きけり。

見やは……とがめぬ

八橋　愛知縣碧海郡、今知立町の東に遺蹟あり。

信濃の國淺間の嶽に煙の立つを見て、

信濃なる淺間の嶽にたつけぶり
をちかた人の
見やはとがめぬ

もとより友とする人一人
二人して諸共に往きけり。
道知れる人もなくて惑ひ行
きけり。三河の國八橋といふ所に到りぬ。そこを八橋
といふことは、水の蛛手に流れ別れて、木八つ渡せるによりてなり。その澤の邊の木蔭におり居て、乾飯くひけり。そ

八橋（古版伊勢物語）

据ゑ

宇津の山　靜岡縣安倍郡にあり、今隧道を穿ちて汽車を通ず。

いかでか……いまする

の澤に杜若いとおもしろく咲きたり。それを見て、或人の「かきつばたといふ五文字を、句の上に据ゑて、旅の心を詠め。」といひければ、

から衣きつゝなれにしつましあれば
はるゝきぬるたびをしぞ思ふ

と詠めりければ、皆人、乾飯の上に涙落して、ほとびにけり。

往きゝて駿河の國に到りぬ。宇津の山に到りて、我が入らんとする道はいと暗う細きに、蔦かづらは茂りて物心細く、すゞろなる目を見ることゝ思ふに、修行者逢ひたり。「かゝる道には、いかでかいまする。」といふを、見れば、見し人なりけり。京に、その人の許にとて、ふみ書きてつく。

駿河なるうつの山邊のうつゝにも
夢にも人の逢はぬなりけり

富士の山をみれば、さ月の晦に、雪いと白う降れり。

時しらぬ山はふじの嶺いつとてか
鹿の子まだらに雪のふるらん

その山は、こゝに例へば、比叡の山を、はたちばかり重ねあげたらん程して、なりは鹽尻のやうになんありける。

なほゆき〳〵て、武藏の國と下總の國との中に、いと大いなる川あり。それをすみ田川といふ。その川のほとりに群れゐて、思ひやりて、限なく遠くも來にけるかなとわびあへるに、わたし守、「はや、船に乘れ。日も暮れなん。」といふに、乘

りて渡らんとするに、皆人、物わびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず、さるをりしも白き鳥の、嘴と足とあかき、鷗の大きさなる、水の上に遊びつゝ魚をくふ。京には見えぬ鳥なれば、皆人見知らず。わたし守に問ひければ、「これなん都鳥。」といふを聞きて、

名にしおはばいざ言とはん都鳥
わが思ふ人はありやなしやと

と詠めりければ、船こぞりて泣きにけり。

二、小野の御室

昔、惟喬の親王と申す皇子おはしましけり。山崎のあなたに、水無瀨といふ處に宮ありけり。年毎の櫻の花盛には、

いざ　問はん
いさ　知らず

惟喬親王　文德天皇第一の皇子、小野宮と稱す。
山崎　京都府乙訓郡大山崎村。

右の馬頭　業平を指す。

交野の渚の院　大阪府北河内郡牧野村にあり。

その宮になんおはしましける。其時、右の馬頭なりける人を、常におもておはしましけり。狩は懇ろにもせで、大和歌にのみかゝれりけり。今狩する交野の渚の院の櫻、ことにおもしろし。その木の下におり居て、枝を折りて挿頭にさして、上中下みな歌よみけり。馬頭なりける人のよめる、

世の中にたえて櫻のなかりせば
春のこゝろはのどけからまし

となん詠みたりける。またある人の歌、

ちればこそいとゞ櫻はめでたけれ
うき世になにか久しかるべき

とて、その木の下は立ちて歸るに、日暮になりぬ。

小野　京都府愛宕郡。

かなかな

歸りて宮に入らせ給ひぬ。夜更くるまで物語して、さて、あるじの皇子入りて、大殿ごもり給ひなんとす。十一日の月も隱れなんとすれば、かの馬頭よめる。

あかなくにまだきも月のかくるゝか
山の端にげて入れずもあらなん

かくしつゝまうで仕うまつりけるを、皇子おもひの外に御髮おろさせ給ひて、小野といふ處に住み給ひけり。正月に拜み奉らんとて、小野にまうでたるに、比叡の山の麓なれば、雪いと高し。しひて御室にまうでて拜み奉るに、つれづれにいと物悲しくおはしましければ、やゝ久しく侍ひて、古の事など思ひいで聞えけり。さても侍ひてしがなと思へ

ど、おほやけ事どもありければ、えさぶらはで、夕暮に歸るとて、

忘れては夢かとぞおもふ思ひきや
雪ふみわけて君を見んとは

とてなん、泣く〳〵來にける。

三、さらぬ別

昔、男ありけり。身はいやしけれど、母なんみこなりける。その母、長岡といふ所に住み給ひけり。子は京に宮仕しければ、まうづとしけれど、しば〳〵えまうでず。一人の子にさへありければ、いとかなしうし給ひけり。さる程に、師走ばかりに、とみの事とて、御文あり。おどろきて見れば、こと

みこ　伊登内親王とて桓武天皇の皇女なり。

長岡　京都府乙訓郡向日町。

えまうでず。

言はなくて、

老いぬればさらぬ別のありといへば
いよ〳〵見まくほしき君かな

となんありける。これを見て、馬にも乘りあへず參るとて、いといたう打ち泣きて、道すがら思ひける。

世の中にさらぬ別のなくもがな
千代もと祈る人の子のため　（伊勢物語）

伊勢物語　和歌を中心とせる小話百二十餘項を集む。業平の作といふ。

〔三才〕　天・地・人　〔四君子〕　梅・松・蘭・竹　〔五色〕　赤・青・黃・白・黑

〔六歌仙〕　在原業平・僧正遍昭・小野小町・文屋康秀・大伴黑主・喜撰法師　〔七情〕　喜・怒・哀・樂・愛・惡・欲

高山樗牛　名は林次郎、山形縣の人、文學博士、明治三十五年歿、年三十二。

儀表　宗師　龜鑑

一一　世界の四聖

高山樗牛

生れて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる、聖人にあらずんば、誰かこれを能くせん。釋迦・孔子・ソクラテース・基督の四人、世呼んで世界の四聖と稱す。宜なるかな。

釋迦

釋迦は西曆紀元前凡そ六百年の頃、印度伽毘羅國の王家に生る。父は淨飯王、母は麻耶夫人。その本名を悉達多といふ。釋迦は伽毘羅王家の族名にして、佛陀はその出家成道後の尊號なり。釋迦、身は一國の太子に生れけれども、夙に思を人生の問題に潛め、二十九の歲、その妻子を捨てて城を逃れ、山林に隱れ、道を修むる事六年、終に人生

北天竺の各地　ヒマラヤ山の南麓、ガンヂス河上流一帶の地。

跋提河　釋迦は此の河の西岸なる沙羅雙樹の下にて入滅すと傳ふ。

高遠　卑近

木鐸　警鐘

の奥儀を究め、無上の正覺に徹底せり。爾來五十餘年の間、北天竺の各地に巡錫して教化を布き、年八十餘歲にして跋提河の邊に歿しぬ。今の佛教は卽ち釋迦一代の教訓に基く。蓋し釋迦の當時、印度には幾多の哲學ありき。然れども徒に思索の高遠を欽びて、人生の疑問に適切ならず、偏に幽玄なる談理と慘憺たる苦行とによりて安心の道を求めたり。その流派を樹てて相爭ふ所は畢竟名目の優劣のみ、未だ一世の元々をして歸命の大道に就かしむるに足らず。釋迦この閒に生れ、その廣大なる慈悲と無邊なる智慧とを以て、一世の木鐸となり、衆民をしてその歸依する所を知らしめたり。

孔子、名は丘、孔子はその尊稱なり。今を去ること二千四百餘年の昔、支那の魯國に生る。幼にして學を好み、禮を習ふ、壯年の頃より魯國の官吏となり、傍、弟子を教へて夙に令聞あり。學德愈、進む。

齊侯　景公を指す。

率ゐ

魯の定公の時に至り、擢でられて大司寇の職に就く。治績大いに擧がり、內外その風采を想望す。時に齊侯、魯國の日に盛大に赴けるを嫉み、謀を構へ、定公をして孔子を用ひざらしむ。孔子時運の非なるを見、五十六歳の老軀を挺し、門下の高足を率ゐて四方に遊說を試みぬ。

孔子

當時の支那は所謂春秋戰國の亂世なり。周の王室は名のみにして、君臣の大義は蕩然として地を拂へり。或は臣にしてその君を弑するものあり、子にしてその親を害するものあり。强は弱を呑み、大は小を併せ、權力の外に道義あるなし。教化の陵夷、風俗の頽廢、未だ曾てこの時の如きはあらず。孔子既に志を魯に得ず、乃ち慨然として故國を出で、大義名分を天下に唱へて、狂瀾を既倒に廻さんとす。志や高且つ大なりと謂ふべし。

漂浪　流浪　漂泊

かくの如くにして四方を漂浪すること十三年、時非にして道容れられず、世また耳を名教に傾くる者なし。こゝに於て、已むを得ず、老脚蹉跎として再び魯に歸り、歎じて曰く、「嗚呼、わが道遂に窮す。世遂に吾を知るもの無きか。」と。門弟子貢慰めて曰く、「何ぞ夫子を知るもの無からんや。」孔子答へて曰く、「天を怨みず、人を尤めず、下學して而して上達す。吾を知るものはそれ天か。君子は歿して名の稱せられざるを病む。吾が道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えん。」と。後幾くもなくして歿す。時に年七十三。

ソクラテースは希臘の雅典府に住める一彫刻師の子なり。その生れたるは西曆紀元前四百七十年の頃にして、釋迦・孔子と年を隔つること凡そ八・九十年なり。東西の聖人殆ど時を同じうして

世に出でたるは奇なりと謂ふべし。希臘の當時は所謂詭辯學派の跋扈せし時代にして、知識は名目の爭に止まり、道德は空文の上にのみ貴ばれたり。その狀なほ、釋迦當時の印度の如く、人生・社會の實際に關して殆ど裨益する所なかりき。ソクラテースは慨然として時弊の救濟を以て自ら任じ、盛に道を講じ、理を談じ、諄々として倦まず。詭辯學者の輩に遇へば則ちその獨得の論法を以て辯難攻擊して、一歩も假借せず。侃諤の正議とその稀代の雄辯と相伴ひて、一世を風靡せり。

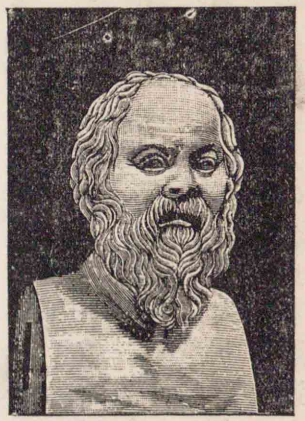
然るに「喬木は風に折らる。」といふ喩に洩れず、群小のソクラテースに快からざるもの相計りて、國法に背けるものとしてソクラテースを讒訴せり。その訴狀に曰く、「ソクラテースは國教を信ぜずして異教を創め、以て人心を惑亂せり。宜しく國法によりて死刑に處すべし。」と。ソクラテースが此の讒訴に對する抗議は實に壯

裨稗

侃諤
侃々諤々、

喬木は
木秀ニ於林一、風必摧之、堆出ニ於岸一、流必湍レ之、行高ニ於人一、衆必非レ之。（文選、運命論）
宜しく……べし
……べし
當に……べし
須く……べし

快を極めたるものにして、慨世憂國の至誠を以て國民に訴ふるところ、語々百世の眞理ならざるは莫し。然れども判官はソクラテースを以て傲慢不遜なりとなして、死刑を宣告せり。ソクラテース泰然として驚かず、曰く、「命のみ。」と。その獄中にあるや、常に門弟子を集めて、生死・靈魂・未來の事を說き、人の脫獄を勸むるものに對しては、輒ち答へて曰く、「予は唯正義に導かれんのみ。死又何爲るものぞ。人生の幸福は靈魂の上に在るを知らずや。」と。終に從容として毒を仰いで歿す。將に歿せんとするや、弟子遺言を求む。ソクラテース曰く、「爾一雞を以てアスクレピアスの神に捧げよ。」と。蓋し會、病みし時、平癒を祈りて謝を致すことを忘れしが爲ならむ。希臘の聖人ソクラテースはかくの如く


ソクラテース

アスクレピアス
希臘の醫術の保護神。

にして逝きぬ。年七十。

基督とは「膏灌がれたる者」といふ義にして、教徒の奉れる尊稱なり。猶太のベツレヘムに生る。その生後四年を以て、西暦紀元第一年となす。父はヨセフと呼べる賤しき木匠にして、母の名をマリヤといふ。長じて三十歳の頃、豫言者ヨハネの洗禮を受けて、始めて傳道の生涯に入り、爾來三年の間猶太の各地を歴遊し、諸、の迫害に屈せずしてその福音を傳へたり。抑、當時は羅馬帝國の榮華その極に達し、禍亂の萌芽その中に胚胎し、災異、荐りに至りて、天下寧日なし。殊に基督の故國なる猶太は久しく暴君の收斂に疲れ、異邦人の侮慢を被れり。民衆は徒に珍奇の淫祠を崇拜して

基督

ベツレヘム　エルサレム市の西南五哩半にあり。

ヨハネ　ヘブライの有名なる宣教師。

收斂　誅求　苛斂

益、放縱の俗に流れ、學者は詭辯を弄びて空しく人を惑はすのみ。こゝに於て一世の人心は悉く、偉人の現出してこの暗黑の社會を照破せんことを渇望せり。基督この間に生れ、自ら救世の使命を負へる神の子と稱し、昂然としてその偉大なる新教理を宣傳せり。遠近靡然としてこれに赴く。僧侶・學者・官吏等はこれを喜ばず、もつて猥りに新法・異説を唱へて民を迷はすものなりとなし、基督を捕へて磔殺の刑に處す。基督豫めこの事あらんを慮り、晏然として騒がず、靜かに祈りて曰く、「神よ、彼等を許せ。彼等はその爲すべき所を知らざればなり。」と。その刑場に赴くや、路傍に哀哭する女子を顧みて曰く、「エルサレムの女子よ、吾が爲に哭くことなかれ。たゞ己と己の子との爲に哭け。」と。かくの如くして基督は三十三年の短命を以て十字架上の露と消去りぬ。基督の死後、その弟子等は激烈なる迫害に抵抗して、その教を天下に弘む。基督教卽ち

哀哭　慟哭

エレサレム　パレスタインの都府、地中海岸より東方約三十五哩。

景慕　敬慕

羅る　懸る　係る

脅迫　脅威　威嚇　恐喝

これなり。

以上は四聖の略傳なり。その人物・事蹟の高大にして雄偉なる、永く後人の景慕し、崇拜すべき所なり。四聖の中、釋迦を除きては、何れも轗軻不遇の中にその生を終へたり。孔子は志を四方に得ず、その經綸を抱いて空しく咏歎の間に歿せり。ソクラテースと基督とは何れも讒奸の手に罹り、或は毒を仰ぎ、或は盜賊と竝びて十字架上に磔殺せられたり。慘憺たりと謂ふべし。然れどもこれ等の人の志す所は天下後世に在り。現世の禍福と一身の安危とは毫もその顧慮する所にあらず。故にその死に就くや晏然として猶歸するが如し。孔子はその身の不幸を憂へずして、却て「吾が道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えん。」と嗟歎せり。釋迦は衆生の爲に妻子と王位とを抛ちて、食を路傍に乞へり。ソクラテースは死罪の脅迫に遇うて、揚言して曰く、「正義を信ずるものに

身を修め

古之欲レ明二明德於天下一者、先治二其國一。欲レ治二其國一者、先齊二其家一。欲レ齊二其家一者、先修二其身一。欲レ修二其身一者、先正二其心一。欲レ正二其心一者、先誠二其意一。（大學）

とりて、死はた何爲るものぞ。われをして一日の生あらしめんか、その一日卽ち國民の迷を醒さざるべからず。」と。基督は己を罪に陷るゝもののために神に祈りたり。嗚呼何ぞその慈悲の廣大にして無邊なる。

四聖はその生れたる處と時とを異にす。故にその教理にも亦多少の差異なきを得ず。今その要略を擧ぐれば左の如し。

釋迦の教理は、煩惱を斷滅して、涅槃に達するを主旨とす。それ人生は苦に始まりて苦に終る。生・老・病・死、孰れか苦に非ざるべき。故に吾人は現在を苦界と觀ぜざるべからず。而して苦の原因は情慾に在り。情慾の原因は「我」の一念に執著するに在り。故に吾人は「我」の一念を脫却して、無我無念の境界に達せざるべからず。これ人生究竟の樂地にして、涅槃卽ちこれなり。

孔子の教は身を修め、家を齊へ、天下を治むるに在り。而して身

後天
先天

を修むる基は孝に在り。故に孝は百行の本なり。君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信、皆これに本づく。人は生れながらにして美德を天に受くれども、後天の氣質によりてこれを完うすること能はざるもの多し。教育の要こゝに於てかあり。既に教育を受けて身既に修まらば、家おのづから齊ふべく、家齊はば國おのづから治まるべく、國治まらば天下おのづから太平なるを得べし。故に孔子の教は一身の修養に始まり、治國・平天下に終るものと見るを得べし。

ソクラテースの教は所謂知德合一說なり。思へらく、「眞正の知識は卽ち道德なり。故に行ふと知るとはもと一體のみ。知つて而して行はざると、行うて而して知らざるとは、共に知識道德の眞正なるものに非ず。眞理を確信し、その實行を以て最上の義務となせば、正義おのづからその中に在り。正義は靈魂の滿足なり。而して靈魂は肉體と異にして、不朽不滅なるものなり。故に人の正義を行ふ、現世の利害は決して顧慮すべきに非ず。道德は富貴の爲に存せず。然れども富貴は道德の中に在り。」と。

山上の垂訓
新約全書馬太傳第五・第六・第七章に出づ。山は猶太のガラリア州にあり、祝福の山と稱せらる。

飢ゑ渴く

基督の教は愛の教なりと稱せらる。所謂山上の垂訓は三年傳道の極意を包括するを以て、左にその大略を擧げん。曰く、「心の貧しきものは福なるかな、天國はその人の有なればなり。悲しむものは福なるかな、その人は慰めらるべければなり。飢ゑ渴く如く義を慕ふものは福なるかな、その人は飽くことを得べければなり。憐むものは福なるかな、その人は憐みを得べければなり。心の淸きものは福なるかな、その人は神を見るべければなり。惡に敵することなれ。人若し汝の右の頰を打たば、左の頰をも轉じて之に向けよ。汝の鄰人を慈しみて、汝の敵を愛せよ。人に見せん爲に義をその前に行ふこと勿れ、右の手に爲す所を左の手に知らしむ

沈淪　淪落

精髓　神髓

ること勿れ、僞善者の行に傚ふこと勿れ、隱れたるを鑑み給ふ神は顯に報いたまふべければなり。人は神と財とに兼ね事ふること能はず。人を是非すること勿れ。人の目にある塵を見ながら、何ぞ己が目にある梁木を見ざる。汝等求めよ、然らば與へられん。尋ねよ、然らば遇はん。叩け、然らば啓かれん。窄き門より入れ。沈淪に至る門は闊く、その路は大きく、之に入るものは多し。嗟吁、いかに生命に至る門は窄く、その路は細く、これを得るものの尠きぞや。凡そこの訓を聽きて行ふ者は、磐の上に家建てたる智者の如く、聽けども行はざる者は沙上に屋を架せる愚人の如し。」と。基督教の精髓は、後世の人如何なる色彩を加ふとも、畢竟この山上の垂訓を出でず。

かくの如きは四聖の傳記及び教義の大要なり。嗚呼、四聖逝いて既に幾千年ぞ。而してその教の今なほ凛々として生氣あるを見よ。世界累代の幾億兆の民衆は、この教に憑りてその道念を養ひ、その安慰を求む。四聖の如きは實に人類の永遠の救濟者なりと謂ふべし。その遺德の高大なること、それ何を以てかこれに比せんや。（樗牛全集）

デモクラシー　Democracy.

○

元來外來思想に對する批判的態度は、我々日本國民に取つては傳統的のものである。古來我が國には三種の思想が輸入せられた。其の一は儒教を中心とする支那思想、其の二は佛教を中心とする印度思想、其の三は基督教を中心とする歐米思想である。最近のデモクラシーは正に第四回の外來思想である。我々の祖先は此等の外來思想を無批判的・盲目的に採用しないで、常に批判的態度を執つて、其の捨てるべきは捨てたのである。支那の家族的制度を背景として成立つた儒教は、大體道德の點からも又政治の點からも、同じく家族制度を根柢とする我が國の道德・政治とさまで乖離する所がなかつた。しかし茲に著しい一つの例外があ

る。それは禪讓放伐である。此は支那に於ける君位繼承法であつて、天子が有德者に其の位を讓るのを禪讓と云ひ、力のあるものが當今の天子を或は放ち或は伐つて、おのれ取つて代るのを放伐といふ。支那の國家に斷えず易姓革命のあつたのは之がためである。言ふまでもなく、此の方法は我が國體と全然相容れないもので、我が祖先は斷じて之を採らなかつた。佛敎に對しても亦さうである。佛敎が如何に我が祖先の、信仰は勿論、その思想の深みを增し、その道德の實行力を强めたかといふことは、改めて絮說するを須ひぬ。例へば、かの三世因果說の如き、何たる巧妙な又有效な考へ方であつたらう。けれども、該敎には我が國民性と到底相容れぬ思想がある。それは、「死々滅々」の厭世觀である、「灰身滅智」の悲觀說である。もと大和民族は陽氣な積極的な民族である所から、佛敎の厭世觀は採用しなかつた。却つて佛敎が我が國に輸入され、幾多の年所を經る間に、それが何時しか日本化して、餘程積極的な餘程國家的な宗敎と變つた。殊に日蓮宗や、淨土宗のやうに、新に我が國に生れた宗派は、國家的色彩が極めて鮮明である。「隱岐の法皇は天子なり、權の大夫殿は民ぞ

絮說　喞々

隱岐の法皇　後鳥羽上皇。

權の大夫　北條義時、左京權大夫なり。

傳敎　傳敎大師、最澄。

弘法　弘法大師、空海。

深作安文　茨城縣の人、文學博士、東京帝國大學敎授。

かし。」と、義時を罵つた日蓮の意氣は天を衝くばかりであつた。又眞宗は「王法爲レ本、仁義爲レ先。」と敎へたのである。基督敎に對しても亦同じことが言はれる。故に、若し今後該敎が我が同胞の信仰生活の奧底まで立入ることを期するならば、恰も佛敎界に傳敎・弘法などの偉傑が現れて、巧に佛法を日本化させたやうに、思ひ切つて基督敎を日本化させることを先決の要件とする。

斯樣な次第で、我が祖先は、諸種の外來思想に對して、常に一廉の見識の下に批判的態度を採つたといふことは、安んじて之を斷言し得るのである。今日我々はデモクラシーに對しても、亦此の傳統的態度を失ひたくない。人或は言ふかも知れぬ、「デモクラシーは世界の思想上の大勢である。どうして之を人爲・人力によつて堰止めることが出來ようぞ。」と。固よりさうである。けれども、如何に世界の大勢であるからとて、無批判的に盲目的に之に對することは、我々の傳統的精神の許さぬ所である、自主的精神の首肯せぬ所である。我々日本民族は今後力めて思想的に獨立の地歩を占めることを圖らねばならない。（外來思想の批判―深作安文）

土井晩翠（つちゐ）
名は林吉、仙臺の人、第二高等學校教授。

一二　萬里の長城

土井晩翠

生ける歴史か數ふれば　齡は高し二千年
影は萬里の空遠き　名も長城の壁の上
落日低く雲淡く　關山看す〳〵暮れんとす
征驂悵み留りて　俯仰の遊子身はひとり
絶域花は稀ながら　平蕪の綠今深し
春乾坤に回りては　霞まぬ空も無かりけり
天地の色は老いずして　人間の世は移ろふを
歌ふか高く大空に　姿は見えぬ夕雲雀
嗚呼跡ふりぬ人去りぬ　歳は流れぬ千載の

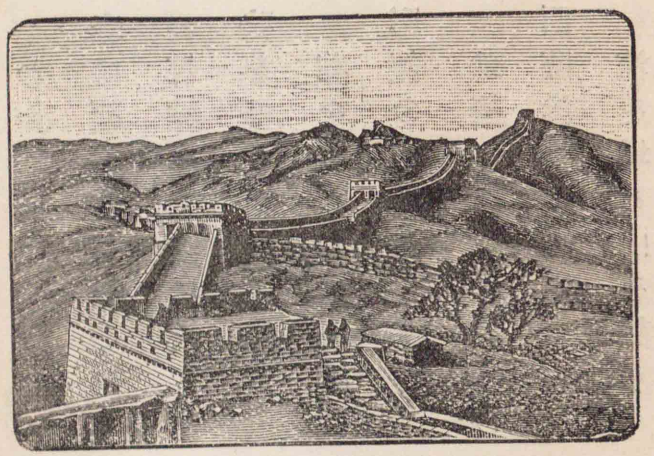
秦皇
秦の始皇帝。

三皇
伏羲、神農、黄帝。

五帝
少昊・顓頊・帝嚳・唐堯・虞舜。

六王終りて
六王畢四海一、蜀山兀阿房出（杜牧之、阿房宮賦）

阿房宮
秦の始皇帝の宮殿。


萬里の長城

昔に返り何の地か　かれ秦皇の覇圖を見ん
殘壘破壁聲も無し　恨も暗し夕まぐれ
春朦朧のたゞ中に　俯仰の遊子身はひとり
三皇五帝あと遠く　六王終りて四海一
四海の黔首ひれふして　雷霆の威に聲もなし
わが宮殿を高うせよ　一たび呼べば阿房宮

わが邊境を固うせよ　二たび呼べば萬里城

春は驪山の花深く　秋は上郡の雲暗く

驪山・上郡　並に始皇帝の離宮の在りし所。

管絃響き雲に入る　舞殿の春の夕まぐれ

袂を擧げて輕く起つ　三千の宮女花のごと

花を散らして玉觥に　浮かす歌扇の風もよし

彫龍の欄奥深く　薫る蘭麝の香を高み

珠簾を洩るゝ銀燭の　光消えなで夜や明けん

西臨洮の嶺高く　こゝ遼東の谿深し

西臨洮　長城は西方臨洮に起り、東方遼東の山海關に至るよりいふ、臨洮は甘肅省鞏昌府にあり。

流を埋め山を截り　壘を連ぬる幾千里

かゞりの焔天を燒き　つるぎの光霜凍り

殺氣夏尙ものすごく　守るは猛士二十萬

漢の此方に胡笳絶えて　匈奴の跡ぞ遠ざかる

北夷の憂絶え果てて　境は堅し國安し

先王の書も焚け果てぬ　天下の儒者も埋まりぬ

先王の書も　始皇帝、學者の時政を誹議するより、挾書の禁を發し、天下の詩書を焚き、儒生を咸陽に坑す。

わが萬世の業成りぬ　君主の思しかなりき

知るや夜半の阿房宮　後庭深く森暗く

歌臺の響よそにして　獨り嵐のつぶやきを

浮世の花の一盛り　褪むるに早き色見ずや

聞け長城の秋の營　旌旗の暗に消ゆるごき

またゝく光露帶びて　星の竊かにさゝやくを

富も力も一場の　夢覺め果てん後思へ

＊　＊　＊　＊　＊

邦は亡びて邦に嗣ぎ　人は代りて人を追ふ
鼎は移る朝二十　歳は流るゝ曆二千
中華幾たび烽擧り　長城の壁越え來り
又越え去りし國民の　數さへいかに世々の跡
山川影は替らねど　春夢空しく跡もなし
群雄の覇圖いたづらに　殘すは獨り史上の名
獨り邊土に影絶えず　齡重ねて二千歳
殘壘苔に今青む　長城の影尊しや
民の膏血世の笑　逆政の形見それながら
歴史の色に染められし　萬里の影ぞ懷かしき

西の嵐　西洋諸國の支那に對する野心に喩ふ。

其の面影に忍び出て　泣くは懷古の露のみか
暮春の恨誰がために　霞も咽ぶ夕まぐれ
霞も咽ぶ夕まぐれ　遊子俯仰の物思ひ
北夷禦ぎし長城の　昔の跡は替らねど
時世空しく流れては　中華の姿あすいかに
秦漢魏晉移り行く　昔の跡を引換へて
西の嵐のふき寄する　黄海の波今あらし
西暦一千九百年　東亞の嵐あすいかに
中華の光先王の　道この民を救ひ得じ
愛を四海に傳ふべき　神人の教いま空語

看ずや豺狼の慾飽かで　基督教徒血をすゝり
群羊守る力なく　異教の民の聲呑むを
俯仰古今のもの思ひ　遊子の恨いつ盡きん
征驂悵み嘶ける　響を返す壁のもと
思ひも遠く眺むれば　霞たゞよふ大空の
自然の樂も絶え果てつ　關山暮れて星出でて
恨を含む長城の　姿は暗に呑まれ行く

（曉鐘）

清少納言

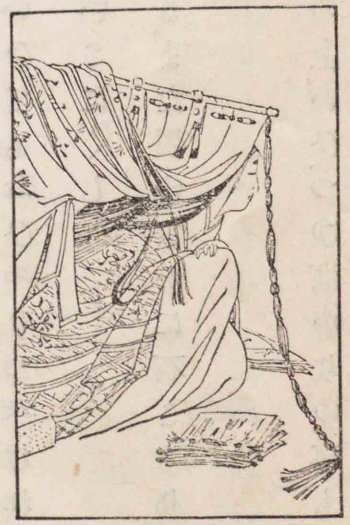
枕草子
清少納言の隨筆を集めたる書。

清少納言
清原元輔の女、一條天皇の皇后（定子）に仕ふ、才學ありて、紫式部と名を齊しうす。

一三　枕草子抄

一　春は曙

春は曙。やう〳〵白くなり行く山ぎは少しあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。夏は夜。月のころはいふもさらなり、闇の夜もなほ螢飛びちがひたる、雨などの降るさへをかし。秋は夕暮。夕日はなやかにさして、山の端いと近くなりたるに、烏の寢所へ行くとて、三つ四つ二つなど飛びゆくさへあはれなり。まして雁などの列ねたるがいと小さく見ゆる、いとをかし。日入りはてて、風の音・蟲の音など、いとあはれなり。冬は曉。雪の降りたるはいふべきにもあらず、霜などのいと白き、またさらでもいと寒き。火など急ぎおこして、炭も


清少納言

いふべきにもあらず
いふべくもあらず

てわたるも、いとつきづきし。晝になりて、ぬるくゆるびもてゆけば、炭櫃・火桶の火も、白き灰がちになりぬるはわろし。

二　にくきもの

いそぐことあるをりに長ごとするまらうど。あなづらはしき人ならば、のちになどいひてもおひやりつべけれども、さすがに心はづかしき人いとにくし。

硯に髪の入りて磨られたる、また墨のなかに石こもりてぎしぐしときしみたる。

物羨みし、身の上なげき、人の上いひ、つゆばかりの事もゆかしがり聞かまほしがりて、言知らぬをば怨じそしり、又僅かに聞きわたる事をば、われ固より知りたる事のやうに、こと人に語るもいとにくし。

物聞かんと思ふ程に泣くちご。鳥の集まりて飛びちがひ鳴きたる。ねぶたしと思ひて臥したるに、蚊のほそごゑに名のりて顔のもとに飛びありく、はかぜさへ身の程にあるこそいとにくけれ。きしぬく車に乘りてありくもの、耳も利かぬにやあらんといとにくし。

物がたりなどするに、さしでて、われ一人さかしがる者、すべてさし出は、わらはもおとなもいとにくし。昔物語などするに、我知りたりけるは、ふと出でて言ひくたしなどするいとにくし。

あからさまに來たる子どもわらはべをらうたがりて、を

かしき物などとらずるに、なれて、常に來て居入りて、調度などに打ちちらしぬる、にくし。

三　過ぎにしかたこひしきもの

かれたるあふひ。ひゝな遊のてうど。ふたあゐ・えびぞめなどのさいでのおしへされて、草紙のなかにありけるを見つけたる。又をりからあはれなりし人の文、雨などの降りてつれ〴〵なる日さがし出でたる。こぞのかはほり。月のあかき夜。

四　ふるものは

雪。霰。霙はにくけれど、雪の眞白にてまじりたるをかし。雪は檜皮葺いとめでたし。少し消えがたになりたる

さいで　布帛の裁片。

程、又いと多うは降らぬが、瓦の目ごとに入りて、黑う、眞白に見えたる、いとをかし。時雨・霰は板屋。霜も板屋・庭。

五　雲は

白き。紫。黑き雲あはれなり。風吹くをりの天雲。明けはなるゝ程の黑き雲の、やう〳〵白くなりゆくもいとをかし。

月のいと明き面に、薄き雲いとあはれなり。

六　風は

嵐。木枯。三月ばかりの夕ぐれにゆるく吹きたる花風、いとあはれなり。曉、格子・妻戸などおしあげたるに、嵐のさと吹渡りて、顏にしみたるこそいみじうをかしけれ。九月

いとをかし　いみじうをかし

だに
さへ

晦、十月朔の程の空うちくもりたるに、風のいたう吹くに、黄なる木の葉どもの、ほろ〳〵ときぼれ落つる、いとあはれなり。櫻の葉、椋の葉などこそおつれ。十月ばかりに木立多かる所の庭は、いとめでたし。

野分の又の日こそいみじうあはれに覺ゆれ。立蔀・透垣などの伏しなみたるに、前栽ども心ぐるしげなり。大きなる木ども倒れ、枝など吹きをられたるだに惜しきに、萩・女郎花などの上に、よろぼひはひ伏せる、いと思はずなり。格子のつぼなどに、さと際を殊更にしたらんやうに、こま〳〵と吹入りたるこそ荒かりつる風のしわざとも覺えね。

七　香爐峰の雪

御簾高く
遺愛寺鐘欹レ枕聽、香爐峰雪撥レ簾看。（白居易）

雪のいと高く降りたるを、例ならず御格子まゐらせて、すびつに火起して、物語などして、集まりさぶらふに、「少納言よ、香爐峰の雪はいかならん。」と仰せられければ、御格子あげさせて、御簾高く巻き上げたれば、笑はせ給ふ。人々も皆さる事は知り、歌などにさへうたへど、思ひこそよらざりつれ。「なほこの宮の人には、さるべきなめり。」といふ。（枕草子）

○

自分の趣意・心持・感じ・味はひを相手に知らせるには、無駄を省き、要をつまんで、「此處だ！」といふ所を浮かして見せる工夫が必要である。國家人生の大事件でもあるか、或は非常に面白い事でもあるならばともかく、さもなき事の記述のだらしなく長いほど迷惑なことはない。世間には手落なく書き盡してはあるが、長いだけ、委しいだけで、更に要領を得ない文章が多い。或は綺麗な名句もあり、波瀾曲折もあり、爲めに

なる教訓もあるが、讀み終つた上で、何等の著しい印象も殘らず、是れといふ中心興味を感じ得ないのがある。一つは丁度十錢均一の雜貨店みたやうなもの、一つは丁度位官も財產も申分ないが、これといふ取り所の無い貴族の盛裝を見るやうなものだ。私は添物たる金銀寶玉、綾錦の服裝に負けて主人公の引き立たない能なしの富貴人よりは、寧ろ襤褸の間より輝き出づる如き高僧の姿を仰がうと思ふ。精しきを極めて、而も要を揭げ、多くの美しい語句をつらねながら、それを駕御して、中心の興味を著しく現はし得るならば、之にました事はなからうけれども、若し中心なしの文字並べに終る氣遣ひがあるならば、思ひ切り枝葉を刈りつめて、太い幹を黑々と見せる方式、卽ち中心を浮かし出す方式を取りたい。

かういふ點から見て私の感服して居るのは、古い物だが、清少納言の「枕の草子」の文章である。

清少納言が人の思ひつかぬやうな處に、格を破つて新らしい觀察を試みたのも面白く、而も其の書き方が、春の現象のさま〳〵ある中から

曙を選み、曙の中から段々白んで行く處を選み、白んで行く有樣の中から山際の一部分だけがボーッと明るくなつて紫の雲の棚引いた處を選み、段々特殊に〳〵と目の著け處を限つて行つて、「此處だぞ！」といふ所の印象を讀者の心にあざやかに殘した手際、何と巧いものではあるまいか。私は此の文句を見て、曙の山際の紫の雲の間の明るみから「春」の女神がパッチリした目をあいて、下界をのぞき込んで、「お早う！春が來ましたよ」と云ふのを見るやうな心地がする。かういふ風に書けば、我々の文章のやうに批點や圈點をうるさく附けずして、味ひどころを味はせることが出來るであらうと思ふ。

清少納言は夏になつても、納涼の杜鵑のといふ常套のものを選ばなかつた。彼女は夜を選び、而して夏の夜は、月もよし、闇も螢の飛び違ふなどが面白く、雨の降るのも面白いと云つて居る。秋については、月や紅葉をめづる普通の見方を破つて、人の氣のつかぬ夕暮を選び出し、而して夕暮の中でも「夕日が空氣の澄んだ秋の空に花やかに射して山際に近づいた時に、その金色の眩ゆき夕映を横斷して塒へ行く眞黑な烏

の、三羽一かたまり、四羽一かたまり、二羽一かたまりなどに、前後して飛び行くなど、實に面白い。況して雁などの、竿になり、鈎になり、葡萄蔓になつて、ズーッと列ねて行くのが遙かの空に小さく見えるなどは、實に面白い。目に見える方ではこんなものであるが、耳に聽く方では、夜に入つてから落葉をさそふ風の音、爭つて鳴く蟲の音など、實にあはれである」といふ手際のうまさ。「三つ四つ二つ」などいふ、格を破つた實景を、まざ〳〵と見せるやうな力のある文句も、一度御手本が出れば誰にでもたやすく眞似られるが、始めてかういふ觀察をなし、かういふ寫し方をした清少納言の筆は、實にえらいと謂はねばならぬ。彼女はかういふ新らしい趣味のある觀察、要點を浮かし出して、讀者の心に明確に印象せしむる寫し方を、始めて試みたばかりでなく、其の後の文人の何人も及ばなかつた程、立派に之れを完成して居る。吾等は是等の點に於て大いに清少納言に學ばねばならぬ。

清少納言が肝要な味ひ處を浮かして見せる花やかな手際は、一寸した單語並べの間にも見えて居る。例へば「見るに異なる事なきものゝ文字に書きて事々しき物。」と題して「覆盆子・鴨跖草・茨・胡桃・文章博士・皇后宮の權大夫。」と書きたる。「むづかしげなるもの。」と題して「繡物のうら、猫の耳のうち、鼠のいまだ毛も生ひぬを、巣の中より數多まろばし出だしたる。」と云ひたる。「すさまじきもの。」と題して「畫ほゆる犬、火おこさぬ火桶。」と云ひたる。單語並べも、書きやうによつては、是れほどの趣味を添へることが出來るのである。

要をつまんで中心點を著しく現すのは、我が心持を活かして傳へる所以であり、同時に文章に餘韻あらしめる所以でもあり、讀者に勞力の儉約をさせる所以でもある。（此處だといふ處を浮かし出せ——五十嵐力）

五十嵐力　山形縣の人、文學博士、早稻田大學教授。

藤岡作太郎　石川縣の人、東圃と號す、明治四十三年歿、年四十一。文學博士。

一四　平安京と寧樂京

藤岡作太郎

一　平安京

日本は世界の樂土なり、東亞の伊太利なり、山川の風景往く所として佳ならざるなきが中に、殊に衆美を鍾め、群を拔いて立てるを

エキス
Extract.

如意が嶽　比叡山の支峰、一に大文字山といふ。

三の峰　紀伊郡稻荷山の頂。

鞍馬　京都市の北約三里半。

愛宕　京都府葛野郡。

山崎　天王山の舊名、京都府と大阪府との境。

四明が嶽　比叡山の頂。

神樂が岡　洛東、吉田。帝國大學の東。

雙が岡　京都府葛野郡花園村。

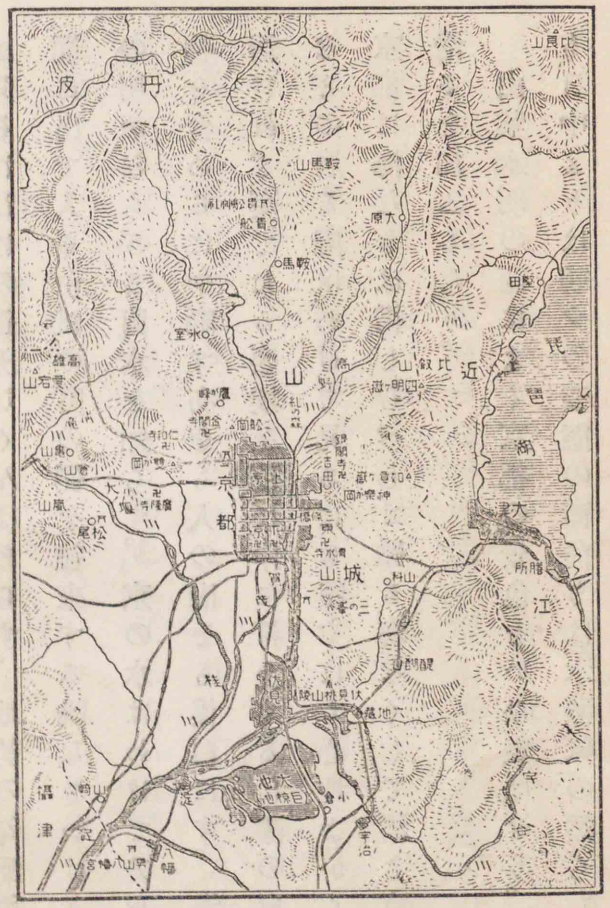
男山　京都府綴喜郡木津川の南岸。

京都とす。京都附近の景は日本のすべての景をエキスにしたるもの、規模の雄大豪壯なるものは存せずと雖も、曄麗幽婉の形態は備はらざるなし。東に近く比叡・如意が嶽より三の峰まで、東山三十六峰笑ふが如く、北には鞍馬・貴船・氷室・鷹が峰・高尾の山々波濤の如く、西に稍〻隔りて愛宕・小倉・龜山・嵐山・松尾より山崎に至りて地勢は窮まる。松柏の綠、色濃き中に、或は目覺むる樣なる櫻の入り交るあり、或は紅燃ゆる紅葉を織込みたるあり。一面の草の頂なる四明が嶽、春なほ雪白き比良の遠山などは、わけて朝日・夕日に照りはゆる色の千變萬化なるぞ面白き。東の神樂が岡、西の雙が岡は、大和の畝傍・香山・耳無の三山の如く近く相並びてあらねば、妻爭ひの口碑も傳はらねど、子の日の遊に小松引く樂みなど、いづれ劣らぬところがら。南にやゝ隔りて男山これに對すれど、國家鎭護の八幡宮、宮柱太知りまして、仰ぐも畏し。

糺　京都府下鴨村の南。

清瀧　保津川の一支流、高雄川ともいふ。

京の東端に沿うて、鴨河の流、糺の河合に高野の支流を集めて、南に珠を碎き去り、西に少し離れて桂川、大堰の激湍に清瀧を併せて、



琴の音涼しく又南に向ふ。二河南に合し、更に淀の急流に流れ込みて、沈々として西の方難波をさして走る。

茫洋たる大海、浩蕩たる波濤の壯觀なく、跌宕の觀念を人心に與

ふるものなしと雖も、一面よりいへば、山の内に籠りて海を見ざるは、又それだけの長所なくんばあらず。地勢の勾配稍、急なれば、蘆間に出で入る白帆の、町の側を往來する眺なきかはりに、濁りて底の明かならざる河水を知らず。京の水はわけてアルカリ性の鑛物を含めるにや、晒す布をも人の膚をも眞白にす。海そのものは清けれど、棄てたる塵埃を更に岸に打上ぐるに、藻の臭も添ひ、漁夫などの居る處は、わけて見るにも嗅ぐにも心地よからぬこと多し。京都に海なきは惜しむべしと雖も、海なくして清き京都は益、その清さを加ふるなり。

山紫水明の語はよく京都の景色をいひ表はせり。何處の山水も、日中よりは朝夕の姿態の面白きは、水蒸氣の然らしむる所なるを知らば、三面を山にして土地濕潤、水分を含むこと殊に濃やかなる京都の朝な夕なが、いかに變化に富めるかは、説明を須ひずとも

下京　京都市三條以南。
吉田　洛東神樂が岡の西。
三條の大橋　鴨川に架す。
寐たる東山　蒲團着てれたる姿や東山。（嵐雪）
山科　京都府宇治郡山科村。
咲く花の　青丹よし奈良の都は咲く花のにほふが如く今盛なり（萬葉集）

明なるべし。わが數年の滯留中、下京より吉田に通ひたる朝な朝なの景色は、今に恍惚として眼前にあるを覺ゆ。引渡す霞に、三條の大橋の擬寶珠の、一つ〳〵彼方へ〳〵と淡くなりて、向うに寐たる東山は、有るか無きかの夢よりいまだ覺めやらず。吉田の岡に並び立てる松は墨繪の刷毛の濃く淡く、花賣る少女の姿は隱れて、聲ぞまづ朝靄を漏れ來る。時雨の景色の、又よその國には見られぬ樣よ。愛宕の峰を覆ひて白く光りたる薄布の、さては時雨と思ふうちに、はら〳〵と面を撲つ。あはやと驚きも果てず、雲は走りて直ちに東山を包み、いつしかそれも霽れて、今は山科あたりの山巡りするなるべし。かゝる優しき景色は、山河襟帶の平安京の特色なり。

二　寧樂京

咲く花の匂ふが如く盛なりし寧樂の舊都を弔へば、風蝕雨打、玆

七堂伽藍　山門・佛殿・法堂・食堂・僧堂・浴室・東司の完備せる寺。

信貴・葛城　大和河内の境。

法隆寺　奈良縣生駒郡法隆寺村。

藥師三尊　藥師如來・日光・月光兩菩薩。

止利佛師　梁の歸化人司馬達等の孫、推古天皇の朝の人。

釋迦三尊　釋迦如來・文殊・普賢兩菩薩。

に千又二百年を過ぎたれども、七堂伽藍の偉觀、今に都の面影を殘して、そゞろにありし世を偲ばしむ。春の日うら〳〵として、信貴・葛城の峰々に霞たなびける時、まづ法隆寺を訪へ。日東帝國第一の古名刹は、寂々として菜畝麥隴の間に眠るが如し。五層の高塔は相輪高く張りて、七寶瑠璃の莊嚴を現じ、金堂・中門の殿閣は畫棟雲を飛ばして、推古式の遺韻を傳ふ。燭を秉つて壁畫に對すれば、諸佛踊々動かんとし、髣髴として名匠の神に接する思あり。藥師三尊・止利佛師の釋迦三尊・夢殿の觀世音四天王の像・玉蟲廚子・橘夫人念持佛廚子、いづれか稀世の珍品にあらざる。

法隆寺全景

四天王　持國天・增長天・廣目天・多聞天。

橘夫人　光明皇后の母。

大佛殿　東大寺の金堂。

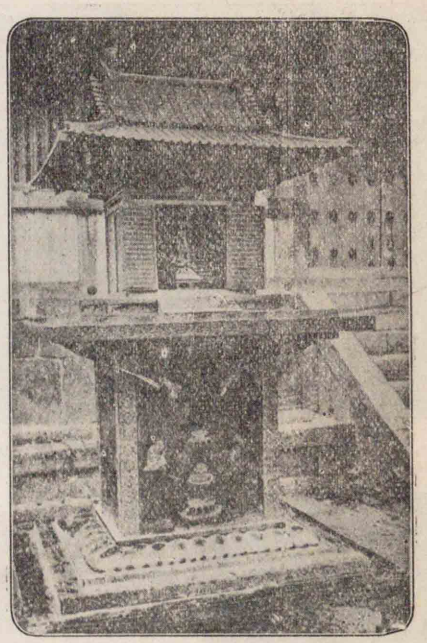
藥師寺　南都七大寺の一、生駒郡都跡村。

猿澤の池　興福寺南大門の前。

三月堂　東大寺中の一堂。

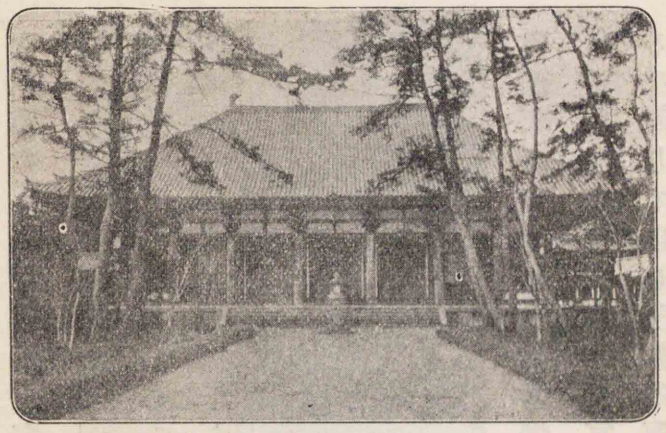
東大寺　南都七大寺の隨一。

去りて舊都に向へば、春日の森は綠滴らんとし、若草山には春色滿てり。大佛殿の甍高く其の間に聳えて、一抹の霞、藥師寺の古塔を望めたり。翠柳依々たる猿澤池のほとりにさまよひて、藤家の氏寺たりし興福寺の衰殘を憐み、麋鹿濯々たる神苑をたどりて、三月堂に不空羂索觀音・梵天・帝釋・執金剛神等の名作を觀、更に東大寺に五丈三尺の大佛を仰ぎ見れば、聖武天皇の豪華の程も懷はるゝなり。天平勝寶元年のその昔、みかど、皇后・皇太子・文武百官を率ゐて大佛を拜し、陸奥に黃金の產せるを祝して、自ら三寶の奴と稱し給ひし盛儀いかばかりなりけん。


玉蟲廚子の圖

正倉院　聖武天皇の御遺物を藏する校倉。

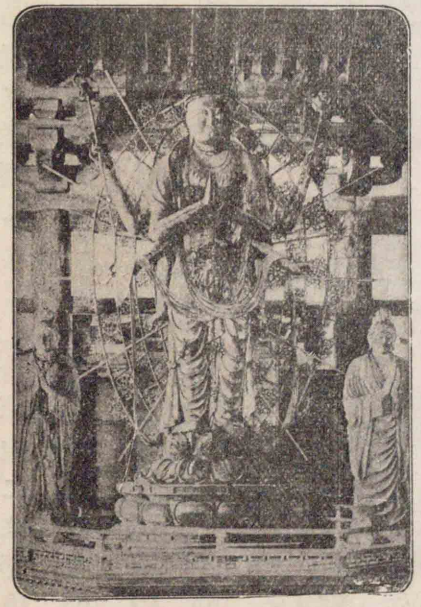
戒壇院　大佛殿の西方にあり、



唐招提寺金堂

時代の藝術の精を凝らせり。

慈雲西極に靡き、法雨東陲に注ぐ、廬舍那佛の尊像を繞りて、花降り、音樂聞え、讀誦梵唄の聲はた雲外に搖曳たりし有樣は、實にや極樂淨土も斯くやありけん。正倉院の勅封倉は今に奈良文化の粹を鍾め、戒壇院の四天王は、天平



三月堂不空羂索觀音

按ずるに、推古天皇の朝支那との交通公に開けてより、彼の邦の文化は、一瀉千里、潮の如くに傳來し、我邦の文化はこゝに一大變に際會せり。當時國運漸く隆盛となり、皇威も擴張せられ、國庫も富裕となりければ、奈良の帝都は經營せられ、七世七十餘年こゝに都して、前代に覩るべからざる燦然たる文化を現出せり。古事記・書紀の編纂もあり、風土記の撰進もあり、懷風藻と云へる詩集も成り、碩儒吉備眞備・安倍仲麿も出で、萬葉集と云へる歌集も撰せられ、歌人柿本人麿・山部赤人・山上憶良・大伴旅人・同家持等輩出せり。帝室の歸依と人民の信仰とに依りて、佛教は非常の隆昌を致し、隨うて美術は斐然として章をなしぬ。大伽藍・大寺院の建築相次ぎ、彫塑・繪畫は精妙の域に到り、之に伴うて工藝も皆進歩發展せり。されば曾て犍陀羅（ガンダラ）に於て東西特長の融和したりし、若しくは亞細亞各地に發生したりし美術の精華は、相率ゐて我が邦に注入し、こゝに凝つて奈良朝の美術を作り、

七世　元明・元正・聖武・孝謙・淳仁・稱德・光仁の七帝。

古事記　三卷、神代より推古朝までの歷史、わが國最古の史書。

書記　日本書紀、古事記につげる舊史、漢文にて書きたり。

風土記　古代諸國の風土傳說等を記せる書。

犍陀羅　古昔、印度にありたる國。

わが文化史、わが藝術史に於ける最も誇るべき時代となりにき。而して豪華を好み、政教一途の皇謨を實行し給ひし聖武天皇の御宇なる天平時代は、實にその高潮期なりけり。

嗚呼、一木一草、皆これ舊都の遺物ならざるはなし。流鶯飛燕、豈敢へて九重の春色を飾りたるものと類を異にせんや。落日の光は唐招提寺の鴟尾に映じて、秋篠寺の晩鐘は春の入相を告ぐ。物靜かなる奈良の舊都は、今や暮靄の裡に沈まんとす。

唐招提寺　律宗の本山、奈良市の西南約一里。
秋篠寺　生駒郡平城村秋篠にあり。
凡董　高井氏、蕪村の門人。

○

春水や四條五條の橋の下　蕪村

ほとゝぎす平安城を筋違に　蕪村

菊の香や奈良には古き佛達　芭蕉

大佛を見かけて遠き冬野哉　凡董

——霞たつ飛鳥市（池澤青峰筆）——

赤木桁平　本名は池崎忠孝、岡山縣の人、評論家。

カルデア　バビロニアの古名。

ヘラス　希臘の古名。

吠陀　梵語、智論と意譯す、古代印度の經典、四篇より成る。

パレスチナ　地中海の東南に濱する小地域。

アレキサンドリア　埃及の古市にして要港たり。

一五　夢殿の皇子

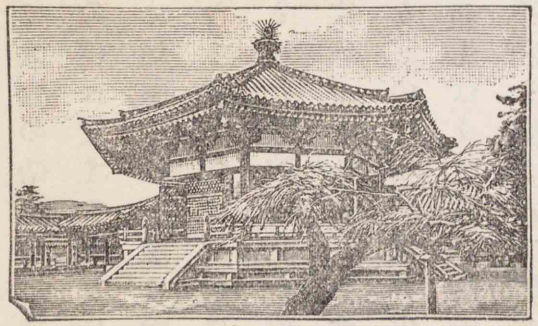
赤木桁平

西の埃及と東のカルデアとが孤立した二つの寂しい惑星として、太古の暗黑なる世界を照らした時代から、極東の一帝國が文化の曙に達するまでには、地球は幾度回轉したか分らない。その間に地中海の岸邊に咲いたヘラスの文化の華が、如何に人類に芬芳たる香を送つたかは、今更言ふにも及ばぬ。或は印度の森から生まれた吠陀（ヴェダ）の詩や、或はパレスチナの民衆の間に芽ざした猶太の宗教や、或はアレキサンドリアの學術や、或は支那や羅馬の大帝國などの文明が、世界史の上に不滅の足跡を貽した時代には、我々の祖先は、まだ深い眠の中に在つて、桃源の民にふさはしい幼稚なる平和を樂しんで居た。

彼等は多分極めて單純なる神話と、純潔を尙ぶ風習と、農耕にいそしむ若々しさとを持つた民族であつたであらう。原始時代の

甲冑
具足
物具

愛すべき遺物たる埴輪を見ても、彼等は好んで武裝したらしいが、その嚴めしい甲冑の下には、人生を樂しむ者の微笑と、人生の惡を知らない者の天眞とが隱れてゐる。彼等の外部生活はさもあれ、その內部生活の奧底には、未だ發見されない鑛脈のやうな卓越した素質が潛んでゐて、それを採掘する偉大なる手の一日も早く現れんことを待つてゐたに相違はない。



法隆寺夢殿

神武天皇の奠都や、崇神天皇の國家統一や、神功皇后の海外遠征などに依つて、吾人は、國民的文化の曙光が、漸く古代史の暗中に輝きはじめたことを想ふ。その間には、西方から流れ込んだ大陸文化の小さな氾濫もあつた。當時の權力階級の一部には、多分

刺戟
刺激

武庫の水門
和田・兵庫の舊名、今神戸市に入る。

黎明
曙光

その異常な刺戟のために昂奮した先覺者もあつたであらう。應神天皇の皇子菟道稚郎子の如きは、正に斯樣な先覺者の一人でおはしたであらう。三韓との頻々たる交通や、わざ〳〵使を吳國に送られたことや、國內から徵發した船舶を盡く武庫の水門に繫がれたやうな事實は、卽ちこの聰明なる皇子の御意圖を語つてゐるものではないか。併し、かくの如き先覺者の努力も、長夜の眠に慣れた我々の祖先を策勵して、彼等を人間生活の發展と向上とのために覺醒せしめるだけの效果を見るに至らなかつた。彼等が心ゆく限り黎明の新鮮なる空氣を呼吸するためには、猶多少の時日を要した。しかも、機運は、雄略天皇の御代から欽明天皇の御代に至る間に於て、加速度を以て近づいて來た。

織匠や醫者や學者などが、斷えず漢土から歸化した。支那や朝鮮の布敎僧が渡來して、竊かに民間に傳道を始めたのも、かなり早

貪貧

い時代のことであつたであらう。任那問題のために幾度か對馬海峽を往復した將卒等が、わが國の朝野に對して如何なる影響を與へたかも看過してはならない。いづれにしても、長い間我々の祖先の臥榻を包んで居た暗黑の幕が、段々ひき絞られてゆくこの時代の有樣を見ると、我々は待ち望む心の緊張を感ぜざるを得ない。美しい民族の曙、美しい文化の黎明ともいふべき推古朝の燦爛たる治世は、太古史の幾十世紀を過去の悠遠なる夢と化して、漸く我々の祖國を訪れたのである。

そこには、蒙昧の暗黑の下に長夜の眠を貪つた人々が俄然として眼ざめ、恰も太陽の赫々として豐榮昇るにも似た華やかさを以て上界にをどり出た壯觀があつた。そこにはまた、民衆が自己のうちに內包してゐる潛勢力を唯一の偉人に凝集せしめ、その偉大なる人格が無限の力を揮ふべき創造の舞臺があつた。時代を超

打開
打破

越する精神と、時代の欲求を辨知する叡智と、時代を正しい方向に導く勇氣とを以て、この光榮ある時代を打開すべき先覺者としての高貴なる使命を果されたのは、そも何人であつたか。わが聖德太子の人格と事業とは、我々の民族が世界史上に不朽の名を留める限り、永久に人類の記憶から拭ひ去らるべきものではない。

聖德太子御像

古代のあらゆる偉大なる宗教的人格と等しく、聖德太子は、長い間眞實を隱す傳說の不明瞭の中に、神祕なる寶玉の如く光り輝かれた。太子の傳記は、傳說の集成であつた。過去の傳記家は、皆同じ誤謬を繰返した。如何にして太子の偉大を後世に傳

へんかのために焦慮した結果、彼等は古來の聖者や賢人や名君などの類型に依つて、その御姿を描き出さうとした。單調なる輪郭の美を複雜化するために、善意の揑造が行はれ、それが全體の上に悲しむべき影響を來すことに考へ及ぶものはなかつた。その結果、近づき難い圓光の莊嚴によりて、我々の地上からひき離された一個の超人があつた。隨つて、我々の想像の力に生きてゐる人格と分離して考へられない慈悲や愛撫や信仰の、輝きに充ちておはしたであらうその眼も、豐かな情感を支配して、力强い生の鼓動を示されたであらうその心臟も、我々に取つては、總べてが皆硬化して、過去の木乃伊として印象せられるに過ぎなかつた。

善意
惡意
硬化
軟化
否定
肯定

我々は、過去の人々が取り來つた多くの誤れる尺度を否定し、眞實を計量するために努力しなければならない。種々の雲影が大山を蔽うても、その頂點に依つて、我々の眼は正しい高度を測り得

魅力
魔力
畝傍　奈良縣高市郡白橿村。
飛鳥　同郡岡村・飛鳥村附近の地、顯宗・皇極・齊明・天武諸帝の皇居のありし處。
藤原　同郡大原村、持統・文武兩帝の皇居のありし處。

るのである。しかしながら、偉大なる太子の人格と事業とを、あるがまゝに測り知ることは、我々の易しとする所ではない。我々の想像の中に活躍する太子の心象を具體化するために、我々はその心象の各部分を組み立てた如何なる要素に就いて最も心を留めるが好いか。高貴なる太子の料り難い御力は、法悅に充たされた覺者の强き魅力と纏絡して、我々の前に釋き難い謎を與へてゐる。

麗かな春の日を大和の畝傍から飛鳥への道を歩んでゆくと、見渡す限り一面に麥や蕓薹に彩られた田園や、灌木の簇生した山や、古塔の聳えた寺や溪流や丘陵などは、それ等の過去が、如何に光榮に浴してゐたかを告げようとするが、忘却に囚はれ易い我々の記憶が、十餘世紀の遠きに遡つて、飛鳥・藤原の盛期を眼前に髣髴させるといふことは、なかなか出來にくいことである。しかし、現實の情趣が、我々を過去の追懷からひき離さうとしても、我々は、この平

和なる平野の一角が、正しく太子繪傳の第一圖を形づくるものであることを忘れてはならない。（「夢殿の王子」による）

一六　安見ししわが大君

幸二于吉野宮一之時作歌　柿本人麿

安見ししわが大君　神ながら神さびせすと　吉野川たぎつ河内に　高殿を高知りまして　のぼり立ち國見をすれば　たゝなつく青垣山　山つみのまつる貢と　春べは花かざしもち　秋立てば紅葉かざせり　ゆふ川の神

柿本人麿
持統・文武二帝の頃の歌人。

吉野川
當時離宮ありたり、六田の渡より上流數町のところ。

も大御食に仕へまつると　上つ瀬に鵜川をたて　下つ瀬にさでさし渡す　山川もよりて仕ふる　神の御代かも

反歌

山川もよりて仕ふる神ながらたぎつ河内に船出せすかも　柿本人麿

ひんがしの野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば月かたぶきぬ

淡海の海ゆふなみ千鳥汝が鳴けば心もしぬにいにしへおもほゆ　柿本人麿

望二不盡山一歌　山部赤人

天地のわかれし時ゆ　かんさびて高く尊き　駿河なる富

淡海の海
琵琶湖。

山部赤人
聖武帝の頃の歌人。

士の高嶺を　天の原ふりさけ見れば　わたる日の影もか
くろひ　照る月の光も見えず　白雲もいゆきはばかり
時じくぞ雪はふりける
語りつぎ言ひつぎゆか
ん　不盡のたかねは

古版萬葉集

反歌

田子の浦ゆうち出でて
見れば眞白にぞふじの
高嶺に雪はふりける

山上憶良

瓜はめば子どもおもほゆ　栗はめばまして偲ばゆ　い
づくより來りし者ぞ　まなかひにもとなかゝりて　やす

安見知之吾大王神長柄神佐備世須登芳野川多藝津河内爾高殿乎高知座而上立國見乎為波疊有青垣山山神乃奉御調等春部者花挿頭持秋立者黄葉頭刺理一云黄葉遊副射之

萬葉卷一　十九

川之神母大御食爾仕奉等上瀨爾鵜川乎立下瀨爾小網刺渡山川母依氏奉流神乃御代鴨

思二子等一歌

山上憶良

いしなさぬ

反歌

銀も金も玉も何せんにまされるたから子にしかめやも

山部赤人

わかの浦にしほみちくれば潟をなみあしべをさして田鶴なきわたる

山上憶良

をのこやも空しかるべきよろづ代に語りつぐべき名は立てずして

慕二振二勇士之名一歌

大伴家持

父のみの父のみこと　母そばの母のみこと　おほろかに心つくして　思ふらんその子なれやも　ますらをや空し

山上憶良　聖武帝の臣の歌人。

わかの浦　和歌山市の南一里にあり。

大伴家持　歌人、旅人の子、延暦四年（約一一四〇年前）歿。

くあるべき　梓弓末ふりおこし　投矢持ち千尋射わたし
剱太刀腰にとりはき　足引の八峰ふみこえ　さしまくる
心さやらず　後の代の語りつぐべく　名を立つべしも

反歌

ますらをは名をし立つべし後の代に聞きつぐ人も語りつぐがね

今奉部與曽布

今日よりはかへりみなくて大君のしこのみたてと出でたつわれは

（萬葉集）

○

柿本朝臣人麻呂は、いにしへならず、後ならず、一人のすがたにして、荒魂・和魂いたらぬ隈なんなき。その長歌、いきほひは雲風にのりてみそら行く龍のごとく、ことばは大海の原に八百潮のわくがごとし。短歌のしらべは、葛城のそつ彦眞弓を引きならさんなせり。ふかき悲しみをいふときは、ちはやぶるものをも泣かしむべし。山上臣憶良は、ことばふつゝかにして、心うつくし。久米のともの雄々しきすがたして、立ちながら舞ふがごとし。山部宿禰赤人は、人麻呂とうらうへなり。長歌は心もことばもたゞに清らをつくせり。短歌こそこれも一人のすがたなれ。たくみをなさず、あるがまに〳〵いひたるが、たへなる歌となりにしは、本の心の高きが至なり。たとへば、檳榔の車して大路をわたるぬしの、あから目もせぬがごとし。大伴宿禰家持のぬしは、事をよくしるして、にほひなし。たとへば、いでましの大みともの行をめでたく記せるふみのごとし。短歌はいと多かれど、あらびてうらぐはしきは、まれになんある。

（萬葉の歌人―賀茂眞淵）

葛城そつ彦　葛城襲津彦、應神天皇の朝の人。新羅に至りて其の不信を責め、後また之を討つ。

久米のとも　上古、大久米命の率ゐたる眷族、久米部。大伴部と共に武事を掌れり。

賀茂眞淵　遠江の人、縣居と號す。德川末期の國學者。明和六年（約一六〇年前）歿、年七十三。

一七　日本文學の展開

土居光知

一　第一期　上古より鎌倉室町時代まで

日本最初の古典である古事記は、過去に關する記憶のまゝなる年代的記錄ではなくして、傳說的資料を當時に於ける最高の理想によつて統一し、國家・宗教等の基礎を明かにしたものである。そしてかゝる傳說を構成したのは個人ではなく、皇室を中心とする國民全體であつた。記紀を讀むと血族關係の概念の下に、神々と民族が統一され、政治的中心と宗教的中心との一致が、圓滿に、完全に行はれたことが感ぜられる。記紀や祝詞等に日本的精神を求めようとするものは、この中心を確立し、完全にし、一切のものをそれに從屬せしめ、統一しようとした民族の求心的精神そのものに求めなければならぬ。

土居光知　高知縣の人、英文學者、東北帝國大學教授。

古事記　元明天皇の和銅五年、太安萬侶が稗田阿禮の口傳により推古天皇の時までの神話及び歷史を記したる書、三卷。

記・紀　古事記と日本書紀、紀は三十卷、元正天皇の養老四年舍人親王・太安萬侶等勅を奉じて編修したる國史、神代より持統天皇の御代までの事を記す。

古今集　醍醐天皇の時代、紀貫之・紀友則・凡河內躬恒・壬生忠岑の四人、勅を奉じて撰したる和歌の集。二十卷。

睦月たち　萬葉集卷五、大貳紀卿。

梅の花　萬葉集卷五、藥師張氏福子。

古事記を生んだものは國家中心の精神であるが、萬葉集を生んだものは主觀的な個人中心の精神である。前者は民族の求心的精神であり、後者は遠心的精神である。公明正大にして正義の主體であるべき國家の觀念が確立し、國民に對し義務と權利とを與へるとき、始めて倫理的個人が出來る。そして國家の確立によつて個人が確立され、始めて內的生活を開拓し、主觀に、個人的享樂に耽り得るやうになる。かの民族の自覺、種族の多數態の統一が敍事文學の生れる動機であつたのに對して、この主觀の强調、自我のめざめは、抒情文學の生れる動機であつた。

萬葉集と古今集とを比較すれば、次のやうな心の變化を看取することが出來る。萬葉の歌人は、

睦月たち春の來らばかくしこそ梅を折りつゝ樂しきを經め

梅の花咲きて散りなば櫻花次ぎて咲くべくなりにてあらずや

の如く刹那に生き、それを享樂することが出來た。古今の歌人は

色も香もおなじ昔に咲くらめど年ふる人ぞあらたまりける

梅が香を袖にうつして留めてば春は過ぐとも形見ならまし

色も香も　古今集春歌上、紀友則。

梅が香を　古今集春歌上、（讀人不知）

の如く刹那の過ぎゆくを嘆き、感傷的に刹那を留めんとする風がある。一般に萬葉の詩はおのづから歌はれた歌であり、古今以後の歌は作られた歌のやうな印象を受けることが多い。

平安朝の初において興味の中心が刹那より連續へ、個體的から典型的へ移りつゝあつたこと、感じると同時に反省する心がめざめて、實感の率直な告白から想像力による構成的表現の力を得つつあつたことが察せられる。當時の人々が日記をつけたことは、彼等が始めて反省的になり、自他を連續の相のもとに見出さんとしたが爲であらう。日記文學は抒情詩と物語との中間に位するものである。蓋し自己の生活を反省し、その抒情的に高潮した刹那刹那を聯結して表現し、連續の相のもとに人生を觀照する態度は、更に自由に想像力をはたらかせて人生を描かんとする態度に進みゆくのが自然である。

源氏物語　五十四帖、紫式部の著、光源氏を主人公として脚色したる小説。平安朝の代表文學と稱せらる。

記紀は外なる世界の歷史であり、萬葉は內なる世界の刹那の告白であり、物語は心の世界の歷史である。平安朝の女詩人は、かの年代史的な外面的歷史を輕んじ、心情の歷史を重んじた。源氏物語螢の卷に紫式部がそれを語つてゐる。

物語は）神代より世にある事を記し置きけるなり。日本紀などは、たゞ、かたそばぞかし。これ等（物語）にこそ道々しく委しき事はあらめ。その人の上としてありのまゝに言ひ出づることこそなけれ、善きも惡しきも世に經る人の有樣の、見るにも飽かず聞くにも餘る事を、後の世にも言ひ傳へさせまほしき節々を、心に籠めがたくて言ひおき始めたるなり。

更級日記　一卷、菅原孝標の女の著。著者は平安朝の後朱雀天皇の皇女祐子内親王に仕へし人。

從來の歴史は眞實の外面を粗雜に語つてゐたに過ぎない。心のことが神代よりこのかた眞にあることである、眞の價値である。物語はこれを精微に表現するものであるとの自覺が源氏物語を生んだ。當時の人々が、この物語に、最も充實した價値ある生活を見出したことは、更級日記の著者が、

源氏を一の卷よりして人も交らず、几帳の中に打臥して引出でつゝ見る心地、后の位も何かはせん。晝は日ぐらし、夜は目のさめたる限り、火を近くともして之を見るより外の事しなければ、

自ら名などはそらに覺え浮ぶをいみじき事に思ひ、

物語のうちにある生活に憧れたことからでも想像される。

しかし紫式部の考へた價値はあまりに主觀的であり、未だ超主觀的なものを知らなかつた。そこには心情の推移が興味の中心になつてゐる。しかし精神の必然的展開といふことは未だ自覺に上つてゐなかつた。

徒然草　兼好法師の隨筆、室町時代の作。

展開なき連續は弛緩、倦怠、分裂に終る。連續的な姿にせんとすれば、反つて不徹底な、なまぬるい表現になることを感じた人々は、刹那の潑剌たる印象を、緊張した斷想を、そのまゝに書きつけた。それは枕草紙、徒然草の如き隨筆文學である。萬葉と徒然草とを比較するに、前者には素樸な純一さがあり、後者には複雜を通過した簡潔さがある。前者は刹那々々に生きた人々の表現であり、後者は連續の世界の分裂した刹那に集中した人々の表現である。

新古今集　二十卷、後鳥羽天皇が藤原定家同家隆等に仰せて撰ませしめられしもの、元久二年成る、古今集と並び稱せらる。

和歌に於ても古今以後の典型的趣味を超えて、再び印象的な、叙景的な表現に赴いた新古今の新鮮味は、同一の傾向から生れたものであらう。當時の歌に於ては萬葉ぶりの新しい流行があつた。しかし萬葉詩人の純樸はそのまゝに復活することの出來るものではない。

平安朝の文明は妥協的なものであつて、裝飾の要素が多く、外面の華美によつて內部の貧弱を補はんとしてゐた。貴族等はたゞ享樂の日の永遠に連續せんことを希ふのみで、展開は怖ろしい事であつたであらう。かゝれば沈滯は沈滯を重ねて息苦しい程になり、彌縫と華飾の文明は全く行きつまつて、終に潰滅に歸した。さうした時、人生をはかなみ、これに執着するを迷妄となし、享樂を罪惡とする厭世觀が盛になつたのは自然である。西行や長明がこの思潮の代表者であつた。

西行や長明は社會と人生にそむき、自然の愛、彼岸の宗教に逃れんとした人であるが、兼好はこの對立の一半を捨てて、他の半面に生きるには、あまりに複雜な心の所有者であつた。彼の心中には平安朝の美的趣味と鎌倉・室町時代の厭世觀とが爭つてゐた。彼にとつて「つれ〴〵わぶる」心は靜寂主義に赴かんとする心である。

西行　俗名佐藤義清。出家して四方を行脚す。和歌の達人にて山家集の著あり。鎌倉時代の人。

長明　鴨長明、鎌倉時代の歌人、文章家、方丈記の作者。

彼は「佛に仕うまつることそつれ〴〵もなく、心の濁も淸まる心地すれ。」といひ、社會生活を離れんとする。しかし一方には、來世の信仰に生きることのできぬ現實を尊重する心をもつてゐた。彼は非常に官能的であり、平安朝の教養を重んじ、有識者ぶり、古き世を戀ひ、家居の趣味等に風雅の心を述べるかと思ふと、やがて淸貧を崇拜し、名利を求むる心を卑しんでゐる。かゝる複雜な精神內容を統一することは、當時においては不可能であつた。彼は未完成の精神を尙び、無差別論者で、彼の著作は一貫した主張のない、結論のない批評となつた。そこには現實から理想を見る皮肉、理想から現實を見る諷刺、理想が理想を笑ふ自嘲がある。徒然草は國文學中稀に見る緊縮した文章であり、論理的な考へ方の眞摯さがある。これを消閑の戲筆と見ることは出來ない。

佛に仕うまつることそつれ〴〵もなく　徒然草第十七段。

謠曲と狂言とは、幾分か劇の要素を有する室町時代の代表的文

學である。能は古來神事に用ひられた散樂に田樂・曲舞等の長を採り、元曲の影響を受けて作られたものであるが、世阿彌に從へば、能は音樂を主とし、音樂によつて生み出される舞が中心であつて、物語はその舞曲を誘ひ出す所緣として作られたものである。

世阿彌　觀世元淸のこと。足利義滿に用ひられ、能樂を大成す。

謠曲は讀む時と演出される時と非常に異る印象を受ける。文章としては錦のつぎはぎともいふべく、平安朝の叙情的な辭句を列ねたものであるが、謠ふ聲は感傷の哀音を超越した、腹から出る力の聲である。演出には單純化された、力の充實した所作が發揮される。又之を內容の方面から見ると、宗教的解脫の思想が中心になつてゐて、或者はこの思想を鼓吹せんが爲に作られたものではないかと思はれる。要するに能は平安朝の美しい言葉の衣裳と音樂的形象、元曲の影響を受け、かつ劇的氣分に富む禪僧の趣味、醇化された武士の力の融合から生れたものと見るべきである。

謠曲と狂言は悲壯と滑稽「あはれ」と「をかしみ」の如き、同一の心の兩方面である。悲壯とは、人間性が、その實現を障碍し否定するものと戰つて、自己に集中し、向上する所にあらはれる境地であり、滑稽とは、この向上しつゝある人間性が、その緊張を弛め、自己の境地以下のものを顧み、觀照的な愛を以てそれを包み、自己の所まで引上げんとするものである。

二　第二期　主として江戸時代

社會が沈靜を保ち、人々の社會に對する興味をそゝることの少い時代の文學は、個人の內面性を描き、情操を第一位に置く。然るに爭亂が起り、支配權を爭ふ時代が出現すると、人々の興味が個人の內面的事實から社會的運動の方へ向ふのは自然である。かくして再び社會的活動を主題とする叙事文學が起る。この時代に於けるその傑出した作品は平家物語であるが、それは決して突然

今鏡　十卷、平安末期、高倉天皇頃の作。後一條天皇より高倉天皇に至る間の事を記したる假名文の歴史。作者不詳。

將門記　一卷、平將門の事蹟を記したるもの。天慶三年の作。作者不詳。

保元物語　**平治物語**　三卷、鎌倉時代の戰記物語。保元及び平治の亂の顚末を記す。作者不詳。

平家物語　十二卷、平治物語の後を承け、源平の興亡を記す。作者不詳。

に生れたものではない。社會意識の動搖は、藤原氏の衰微と共に生じたことであつて、源氏物語の如き情趣中心の物語から榮花物語・大鏡・今鏡の如き歴史的な物語、戰記文學の初である將門記等より保元物語・平治物語及び平家物語を讀めば、時代文學の推移を察することが出來る。

鎌倉時代は新舊思想衝突の時期であり、文化の轉回期であり、二種族抗爭の時代である。今日においても、關西人と關東人との間には趣味・性情・人生觀・日常生活・語調等にかなり大きい相違がある。我が國第一期の文化は大和を經て京都にまで北上して來た西南人によつて創造されたものであるが、第二期の文化は東北人の支配下に發達した。鎌倉以前と以後とは、趣味・宗教・政治において異種族のものであるかのやうに性質を異にしてゐる。かの西南人は、早くから武器や戰術に關する新知識を得、農を生活の基礎とし、

實朝　源實朝。鎌倉三代將軍。

神皇正統記　六卷、北畠親房の著。神代より後村上天皇までの歴史にして大義名分を論ず。

太平記　四十卷、後醍醐天皇の卽位より五十四年間の戰亂の事を記す。作者不詳。

大日本史　二百四十六卷、德川光圀の編纂せし漢文の日本歴史。

日本外史　二十二卷、頼山陽の著。源平以下諸武氏に至る諸家の事を記したる漢文の歴史。

その本性は情緒的で享樂に赴きやすく、感受性と美的趣味に富んでゐた。東北人はもと牧畜や狩獵を好み、意志的である。平家物語はこの兩種族の衝突を瞥見せしめる。

併しこれよりも一層注意すべきことは、國家意識の覺醒である。この意識は平安朝の間は眠つてゐたが、國家動搖の時代となつた時、日本は神國であり、皇室は神聖であるといふ考が、多數の人々の間にめざめて來た。平家物語は平安朝の教養、支那印度の文化を讃美しながらも、處々にこの思想を述べてゐる。この國家意識は、實朝によつて歌はれ、日蓮の宗教に豫言的熱誠を加へ、弘安の役によつて一層適切に感じられ、神皇正統記・太平記・大日本史・日本外史等の叙事文學を生み、維新の事業を成した。

鎌倉室町以後の文學には閑寂・脫俗の趣味が著しく、「枯れたる句」「寂びたる體」が尙ばれたのであるが、これは社會一般の趣味ではな

く、寧ろそれに對する反動と見るべきである。戰亂は中庸の趣味を破り、性情を放縱・殺伐ならしめる。戰亂のうちに育つて感情を醇化するやうな教養を受けず、生命を賭して一城の主となり、またそれに劣らぬ冒險によつて巨萬の富を得た人々が、その性情を解放し、快樂を求める喧騒と俗惡とは、優雅の人々をして面をそむけ、脫俗・閑寂の趣味に赴かしめたのであらう。

また幕府はめざめんとする國家の理想を晦ますことによつて安全を得、武士階級は生產者の階級を抑へることによつて太平の世に威嚴を保ち得るものであつた。主情主義は自我覺醒、形式打破の第一歩であるが、自我の覺醒は封建の制度を覆す憂がある。德川の政治は根柢から覆される憂のために自由な改造を許容することが出來ず、自我の覺醒を否定しなければならなかつた。斯くの如く、自由なく、感情が抑壓せられた時代において、抒情詩が健かな生長を遂げることは望み難い。俳諧は初めの飄輕・洒脫の趣味と言葉の遊戯から、芭蕉に於けるが如く心の底からの靜かな聲にまで深められ、抒情詩に近づいたけれども、猶自然の情趣の客觀的な表現が主であつた。狂歌は古歌の滑稽化である。優雅なものを卑俗なものにまで引下げ、茶化し、戯笑する態度は、當時のあらゆる方面に見られる。狂句は居候・姑・嫁・後家等の弱者を題材として諷刺し、人間の弱點を皮肉に笑ふものである。

第二期に於ける叙事文學の精神は、國家が不健全になつたため古を慕ひ、その全き源に歸らんとして止まなかつた。同樣に抒情詩の精神もまた感情生活が否定され、心の自由を失つてゐたので、心情の音樂的流動の境地を戀ひ、素樸な濁らざる生命の泉を汲まんとして止まなかつた。この二つの傾向は實に第二期の文化の底の流であつて、文學の展開を促した根本の力である。この精神

は多くは離れ〴〵になつてゐたのであるが、光圀が長流・契沖を慫慂して始めしめ、眞淵・宣長等によつて大成せられた國學者の事業は、その合流と見るべきである。彼等は萬葉と古事記のうちに、未だ溷濁せざる心情の流露と國家精神の源泉とを見出し、これを闡明し復活せしめんと勉めたのである。また文學が情調の音樂的流動境に憧れたことは、あらゆる方面にあらはれ、馬琴の小說の文體が七五調に近づいた事にも、浮世繪の曲線の軟かさにも、平家琵琶から系統をひく淨瑠璃より一中・豐後節・常盤津・富本・淸元が順次に生れたことにも、純粹な抒情的情調の刹那に憧るゝ時代の趣味が看取される。江戸の職人達が小唄や淨瑠璃のうちの最も抒情的な部分を、纖細な旋律に從つて口ずさむ時、窮屈な義理と慾との世界を忘れ得て、人情の流のうちに融けこみ、心情の刹那の流動を味はつたのであらう。

光圀　德川光圀。

長流　下河邊長流。大和の人、國學者。貞享三年（約二五〇年前）歿、年六十三。

契沖　攝津の人、眞言宗の僧、國學者。元祿十四年（約二三〇年前）歿、年六十二。

眞淵　賀茂眞淵。遠江の人、國學者。明和六年（約一六〇年前）歿、年七十三。

宣長　本居宣長。伊勢の人、國學者。眞淵の門人。享和元年（約一三〇年前）歿、年七十二。

馬琴　瀧澤馬琴。江戸の人、小說家。嘉永元年（約八〇年前）歿、年八十二。

第二期の代表的な物語は西鶴の浮世草子から始まる。この期の物語と抒情詩との關係は、西鶴等が談林の俳諧から出たといふに過ぎぬ。當時の抒情詩は物語を產み出す力もないものであつた。從つて當時の小說は自己の體驗を通じて物語る眞摯な告白ではない。談林の俳諧は心情の底からの聲ではなく、頓才や機智の所產であり、世事一切を茶化し、滑稽視し、表現の態度も放縱奇警であつた。西鶴の浮世草子もまたかゝる態度で描かれたのである。馬琴は勸善懲惡主義を標榜し、忠孝・武勇・邪慾・奸佞の模型的人物を作つたが、それも人間の內面性から生れる、眞の高貴と純潔とを描かうとしたのではなかつた。一體にこの期の文學者は、讀者本位の戲作者であるか、脫俗自得する道樂者が多かつた。西鶴・馬琴等の作を讀むとき、藝術家としての進步は見られるが、作者の靈性の成長は容易に認められない。

西鶴　井原西鶴。大阪の人、小說家、俳人。元祿六年（約二四〇年前）歿、年五十二。

談林　檀林とも書く。西山宗因の開きし俳諧の一派。

淨瑠璃十二段草子　淨瑠璃姫の物語。織田信長の侍女小野お通の作といへど詳ならず。

親鸞　京都の人、一向宗の創始者にして本願寺の開祖なり。弘長二年（約六七〇年前）寂、年九十二。

日蓮　安房の人、法華宗の開祖、弘安五年（約六五〇年前）歿、年六十一。

淨瑠璃は平家物語から轉化し、謠曲と並んで行はれた幸若舞の系統に屬し、その名稱は御伽草子の淨瑠璃十二段草子に基づくといふ。卽ち淨瑠璃の前身は叙事詩的なものであつて、文字を讀む人の少い戰國時代に、拍子を主とする音樂を伴ひ物語られたものである。それが能狂言或は歌舞伎の影響を受けて、次第に劇の色彩を濃厚にしたものであらう。さうして時代物から世話物へと發達して段々抒情的なものとなつた。

要するに第二期の文學は、古事記及び萬葉の如き國家及び個人の健かにして自由なる狀態に憧れたが、健かな成長を遂げたとは云はれない。この時代の文學には萬葉の如き晴朗にして自然なるものなく、親鸞・日蓮の深さと强さなく、苦悶の眞摯なる告白もなく、精神的成長の輝ける喜もなく、素直にして自由なる心なく、今日の讀者を心の底より感激せしめ、その精神を高めるやうなものを持たぬ。

新島襄　群馬縣の人。京都同志社の創立者。明治二十三年歿、年四十八。

三　第三期　明治より大正へ

第三期の文學は政治文學に始まる。維新より憲法發布の頃に至るまでは國家意識の動搖が止まず、如何なる勢力或は主義が支配すべきかといふことが新時代の中心興味であつて、個性の內面の問題は度外視された。されば當時の文學は政治思想と離るべからざる關係を有し、新しい作者は多く文才ある政治思想家であつた。

維新後に於て、人々が政治上の大望と實益の獲得に心を奪はれてゐたとき、早くも心靈上の問題に重心を置く精神の革新運動が起つた。新島襄氏等の基督教の運動はその最も顯著なるものである。この精神運動は十年代の文學には未だその表現を見ないけれども、併しその人道主義にして情熱と想像に富む教義が、若き

外山　外山正一。静岡藩の人、社會學者、文學博士、明治三十三年歿、年五十三。

井上　井上哲次郎。筑前の人。哲學者、文學博士。

矢田部　矢田部良吉。伊豆の人、植物學者、理學博士。明治三十二年歿、年四十九。

透谷　北村門太郎。東京の人。文學者。明治二十七年歿、年二十七。

禿木　平田喜一。東京の人。文學者。

秋骨　戸川明三。熊本縣の人、文學者、慶應義塾、學教授。

心を喚び醒まし、深く西洋文學に親しましめたことは、內面的生活の表現である新文學出現の主要な原因となつたに違ない。

國會開設以後日露戰爭の頃に至るまで、若き心をめざました文學は、主情主義の色彩を帶びてゐた。抒情詩が榮えたのはこの時代である。外山・井上・矢田部三博士が新體詩鈔を出し、新しい詩體に注意を促したのは明治十五年であるが、心情の純粹な告白である歌が榮えたのは猶十餘年後の事であつた。この主情主義を最もよく代表するものは二十六年に創刊された「文學界」の同人、透谷・藤村・禿木・秋骨、之に加はつた柳村・花袋等の諸氏であらう。主情主義の文學は、明治三十年頃においては、若き心を最もよく滿足さす表現であるやうに感じられたが、日露戰爭後においては、最早時代の心の全體を表現するものではなくなり、次第に時代思潮の中流と沒交渉になつた。かくて小說全盛の時代が來た。換言すれば

柳村　上田敏、静岡縣の人、英文學者、文學博士、大正五年歿、年四十三。

花袋　田山錄彌。群馬縣の人、小說家。

小說神髓　坪內逍遙の著、小說の作法を論ぜし書。

二葉亭　二葉亭四迷。本名は長谷川辰之助。東京の人、文學者、明治四十二年歿、年四十六。

硯友社　尾崎紅葉を中心としたる文士の集り。

人生を反省する心が鋭くめざめたのである。

馬琴の流を汲む勸善懲惡主義、草雙紙流の傳奇物語を排して、摸寫主義を唱へた小說神髓が公にされて、明治小說の出發點となつたのは十八年であり、露文學の影響をうけた二葉亭の浮雲が書かれたのは二十年であつた。しかし時代は未だかゝる小說を味はふ力がなく、この小說及び露文學の眞價が認められたのは後年自然主義流行の時代であつた。當時に榮えた摸寫主義は西鶴の態度と共通點を有するものであつて、皮相な寫實であり、戲作者の氣分を脫して居なかつた。その代表者は日露戰爭頃まで硯友社の一派であつた。

日露戰爭後、小說界の秀でた人々は多く抒情詩人から出てゐる。明治二十五六年以前の寫實小說は皮相な摸寫であつたが、主情主義を通過した後の自然主義は、人生內面の描寫をなし得たのであ

藤村　島崎藤村、名は春樹、長野縣の人、詩人、小說家。
獨步　國木田哲夫。千葉縣の人、小說家。明治四十一年歿、年三十八。
泡鳴　岩野美衞。淡路の人、文學者、大正九年歿、年四十八。
芭蕉　松尾氏、伊賀の人、元祿時代の俳人。
蕪村　谷口氏、又與謝氏、大阪の人、天明時代の俳人。
虛子　高濱淸。松山市の人、俳人。
漱石　夏目金之助。東京の人、小說家。大正五年歿、年五十。

る。自然主義作家の中でも藤村・獨步・泡鳴等の創作は常に告白的であつて、個性のうちから生れたといふ印象を與へる。

この時代において芭蕉・蕪村の俳諧より出發し、寫生文を經て小說に赴いた漱石・虛子等は、餘裕派の名を以て呼ばれ、自然派と對立してゐた。その創作は人生を外から眺め、諧謔に富み、最初は遊戲的氣分多く、展開する精神の眞劍さを缺いてゐた。俳諧は生活を客觀して、展開することのないといふ意味に於て完成された藝術境を有する。精神の展開を遂げんとするには、完成よりも未完成を尙び、老成ぶつた否定の境地から若々しい人生の眞劍に立歸らなければならぬ。漱石はかゝる道を辿つた人である

明治の文藝思潮は、表面から見れば、西洋のそれの追從に過ぎぬやうに見える。しかし外面的な摸倣ではなく、上述の如く、內からの必然によつて展開したのであつて、精神が新しい境地に達するや、その展開を一層完全にし、その內容を豐かにするやうな文藝思潮が輸入されたのである。されば、これを內からの必然なき摸倣といふことは出來ない。しかし我々の精神が新しい境地にめざめる時、眼を轉ずると、それは既に西洋人が通過した跡であることが感じられた。かくて第三期の展開は極めてあわたゞしくなされ、數代を費すべきことが五十年間に遂げられたのである。しかも既に第四期の展開が始まらんとしてゐる。

第一期の文學は貴族の社會に育てられ、第二期の文學は武士と町人の間に育てられ、第三期の文學は主として中流の知識階級の所產であつたが、世界戰爭と共に、勞働階級及び婦人の覺醒等を中心事件として新しい社會狀態が始まらうとしてゐる。この社會問題が第四期の叙事文學を始めるのではあるまいか。第四期の文學は多分第二期と類似した途を辿るのであらう。卽ちその社

會意識は、機械及び資本の勢力から人格の自由を救出する更に公正なる社會の出現を求めて止まず、その個人意識はまた抒情詩の狀態に憧れるであらう。（文學序說に據る）。

池邊義象　熊本の人、國文學者、御歌所寄人、大正十二年歿。

六國史　日本書紀・續日本紀・日本後紀・續日本後紀・文德實錄・三代實錄。

寬平　宇多天皇の時の年號。

大鏡　八卷、文德天皇より後一條天皇まで百七十餘年間の歷史。

後篇

增鏡抄

池邊義象

增鏡に就いて

漢文學我が物となりて、朝廷六國史の勅撰ありしが、寬平以來その事すたれては、歷史は僅かに有志家の筆に成れる極めて疎略なる記錄に過ぎざりき。然るに遙かに世降りて、崇德院の御代の頃に、藤原爲業といふ人ありき。藏人より累進して皇太后宮大進にまで至りしが、後剃髮して洛北大原に隱れ、寂然と稱したり。この人大いに思ふ所やありけん、始めて國文を以て藤原時代の紀傳體の歷史を記述し、「大鏡」と名づけたり。是より先、宇津保・源氏の如き國文の大著ありきと雖も、それらは作物語にして、史實を國文にて記述し論評したるは、實に大鏡を以て濫觴とせざるべからず。

この書よくその記せんと思ふ所を記し、よくその言はんと欲する所を言ひしかば、大いに時好に投じたりけん、この後之に倣ひて先づ成りたるを今鏡とす。次に水鏡成り、次に增鏡は成れり。四鏡は國文の四

兄弟として我が歴史を語るものなるに、如何なる故なりけん、世には水鏡・大鏡・増鏡を三鏡と唱へ、今鏡は殆ど忘れられたるが如き狀あるは頗るいぶかしと謂ふべし。

増鏡は、四鏡の中、最も後に成りしものにて、その記事は後鳥羽天皇より後醍醐天皇まで、百五十年間に亘れり。作者は、後普光園院良基公なりとも、成恩寺經嗣公なりともいへど、未だ確かならず。但し室町時代の初の著なることは、推定するに難からず。抑、この間は、承久の亂、元弘の亂など、世の大事ども多かりし時なれば、その記事も頗る複雜せり。凡そ當代の事を記せるは、有名なる太平記以下雜書多かれども、史實として眞を措き難きことも少からず。然るにこの書は、さる傳說ものと異り、京都の事、鎌倉の事、皆その實を傳へたれば、東鑑等の當時の記錄と相對して、有力なる史傳なり。加之修辭醇雅にして通讀に難澁ならず、大鏡を見て梅林の月を賞する感ありとせば、これは夕日を受くる櫻に對する思あり。されば古より國文歴史中、殊にこの二鏡を玩ぶ人多きも宜なり。

趣向は大鏡に擬して、嵯峨清涼寺にて老尼の物語れるを、筆記せるさまになせり。（國文叢書）

今鏡　十卷、後一條天皇より高倉天皇まで百五十年間の歴史。

水鏡　神武天皇より仁明天皇まで千五百十年の間、大鏡以前の歴史。二卷。

増鏡　十卷。

良基　二條良基、北朝の四帝に歴任し、攝政關白となる。

經嗣　一條經嗣、左大臣關白に進む。

東鑑　五十一卷、和漢混交體の漢文にて書きし鎌倉幕府の日記。

鶴の林　沙羅樹林、卽ち釋迦佛入滅の處。

薪盡きにし　入滅のこと。

二傳　印度より唐土に傳はり、更に日本に傳はりしをいふ。

嵯峨の清涼寺　京都府葛野郡上嵯峨。

常在靈鷲山　法華經壽量品の偈の句。

鳩の杖　老人の持つ杖。

一　序

如月の中の五日は、鶴の林に薪盡きにし日なれば、かの如來二傳の御かたみのむつまじさに、嵯峨の清涼寺にまうでて、常在靈鷲山など心のうちに唱へて拜み奉る。傍にやそぢにもや餘りぬらんと見ゆる尼一人、鳩の杖にかゝりて參れり。こばかりありて「たけく思ひ立ちつれど、いと腰いたくて堪へがたし。今宵はこの局にうち休みなん。坊へ行きてみあかしの事など言へ。」とて具したる若き女房のつきづきしき程なるをばかへしぬめり。「釋迦牟尼佛とたびたび申して、夕日の花やかにさし入りたるを打見やりて、「あはれにも山の端近く傾きぬめる日影かな。我が身の上のこゝちこそすれ。」とてよりゐたるけしき、何となくなまめかしく、心あらんかしと見ゆれば、近く寄りて、「いづくより詣で給へるぞ。ありつる人のかへりこん程、御伽せんはいかゞ。」などいへば「このわたり近く

侍れど、年のつもりにや、いとはるけき心ちし侍る、あはれになん。」といふ。「さても、いくつにかなり給ふらん。」と問へば「いさ、よくも我ながら思ひ給へわかれぬほどになん。百とせにもこよなく餘り侍りぬらん。來し方行く先ためしもありがたかりし世のさわぎにも、この御寺ばかりは恙なくおはしますなほやんごとなき如來の御光なりかし。」などいふも古代にみやびかなり。

年のほどなど聞くもめづらしき心ちして、かゝる人こそ昔物語もすなれと思ひ出でられて、まめやかに語らひつゝ、「昔の事の聞かまほしきまゝに、年のつもりたらん人もがなと思ひ給ふるに、嬉しきわざかな、少しのたまはせよ。おのづから古き歌など書きたるものの片はし見るだに、その世に逢へる心ちするぞかし。」といへば、すげみたる口うちほゝゑみて「いかでか聞えん。若かりし世に見聞き侍りし事は、こゝらの年頃にぬば玉の夢ばかりだになく、おぼ

ほれて何のわきまへか侍らん。」とはいひながら、けしうはあらず、あへなんと思へる氣色なればいよ〳〵いひはやして「かの雲林院の菩提講に參りあへりし翁の言の葉をこそ、假字の日本紀にはすめれ。又かの世繼がうまごかいひしつくも髪の物語も、人のもてあつかひぐさになれるは、御有樣のやうなる人にこそ侍りけめ。なほのたまへ。」などすかせば、さは心得べかめれど、いよ〳〵口すげみがちにて「そのかみは、げに人の齡もたかく、氣もつよかりければ、それに隨ひてたましひもあきらかにしてや、しか聞えつくしけん。あさましき身はいたづらなる年のみ積れるばかりにて、昨日今日といふばかりの事をだに、目も耳もおぼろになりにて侍れば、ましていと怪しき僻事どもにこそは侍らめ。そもさやうに御覽じ集めけるふる事どもはいかにぞ。」といふ。「いさ、たゞおろ〳〵見及びしものどもは、水鏡といふにや。神武天皇の御代よりいとあらゝ

雲林院　山城國葛野郡。

假名の日本紀　大鏡のこと。

世繼がうまご云々　今鏡。

四十帖の草紙　榮華物語。
なにがしの大臣　源内大臣通親ならんといふ。
彌世繼　今傳はらず。
隆信　藤原氏。後鳥羽天皇の頃の人。

かに記せり。その次には大鏡、文德のいにしへより後一條の御門まで侍りしにや。又世繼とか四十帖の草紙にぞ、延喜より堀河の先帝までは少しこまやかなる。又なにがしの大臣の書き給へると聞き侍りし今鏡には、後一條より高倉院までありしなめり。まことや、いや世繼は隆信朝臣の後鳥羽院の御位の御程までを記したりとぞ見え侍りし。「その後のことなん、いと覺束なくなりにける。おぼえ給へらん所々までものたまへ。今宵誰も御伽せん。かゝる人に逢ひ奉れるも、しかるべき御契あらんものぞ。」など語らへば「そのかみの事はいみじうたど〳〵しけれど、誠に事のつゞきを聞えざらんも覺束なかるべければ、たえ〴〵に少しなん。僻事ども多からんかし。そはさしなほし給へ。いとかたはらいたきわざにも侍るべきかな。かの古き事どもには、なぞらへ給ふまじうなん。」とて、

おろかなる心や見えんます鏡
ふるき姿にたちはおよばで

とわなゝかし出でたるもにくからず、いと古代なり。「さらば今のたまはん事をも又書き記して、かの昔の面影にひとしからんとこそは思すめれ。」といらへて、

今もまた昔をかけばます鏡
ふりぬる代々の跡にかさねん　（序）

二　おどろの下

御門はじまり給ひてより、八十二代にあたりて、後鳥羽院と申すおはしまし。御諱は尊成、これは高倉院第四の御子、御母は七條院とまうし。修理大夫信隆ぬしの女なり。治承四年七月十五日にうまれさせ給ふ。文治元年四月御年六つにて、位に卽かせ給

法皇　後白河法皇。

月輪關白殿　藤原兼實。

ふく風も　「太平世、風不レ搖レ枝。」（西京雜記）

あまねき御うつくしび　あまねき御うつくしびの浪八島の外まで流れ、廣き御惠の蔭筑波山の麓よりしげくおはしまし。（古今集序）

ひけり。

「御門いとおよすげてかしこくおはしませば、法皇もいみじうつくしとおぼさる。」文治二年十二月一日、御書始せさせ給ふ。御年七つなり。建久元年正月三日、御年十一にて御元服し給ふ。「おなじき三年三月十三日に、法皇かくれさせ給ひし後は、御門ひとへに世をしろしめして、四方の海波靜かに、ふく風も枝を鳴らさず、世治まり民安くして、あまねき御うつくしびの涙、秋津島の外まで流れ、しげき御惠、筑波山のかげよりも深し。」よろづの道々に明らけくおはしませば、國に才ある人多く、昔に恥ぢぬ御代にぞありける。中にも敷島の道なんすぐれさせ給ひける。御歌かずしらず人の口にある中にも、

奥山のおどろの下もふみわけて
道ある世ぞと人にしらせん

世をしろしめす　院中に政をきかせ給ふをいふ。

鳥羽殿　京都府紀伊郡。

白河殿　同愛宕郡。

水無瀬　同乙訓郡。

と侍るこそ、まつりごと大事と思されけるほど著く聞えて、いとみじくやむごとなくは侍れ。（おどろの下）

三　水無瀬殿

建久九年正月十一日、第一の御子土御門院四つになり給ふに、御位讓り申させ給ひて、おりゐ給ふ。御年十九。位におはします事十三年なりき。「今日明日二十ばかりの御齡にて、いとまだしかるべき御事なれども、よろづ所せき御ありさまよりは、なか〳〵やすらかに、御幸など御心のまゝならんとにや。世をしろしめす事は今もかはらねば、いとめでたし。」

鳥羽殿・白河殿なども修理せさせ給ひて、常に渡りすませ給へど猶また「水無瀬といふ所に、えもいはずおもしろき院づくりして、しばしば通ひおはしましつゝ、春秋の花紅葉につけても、御心ゆくか

ぎり、世をひゞかして、遊をのみぞし給ふ。所がらも、はる〳〵と川に臨める眺望いとおもしろくなん。」元久の頃、詩に歌を合せられしにも、とりわきてこそは、

見渡せば山もとかすむみなせ川
ゆふべは秋となに思ひけん

萱葺の廊・渡殿など、はる〳〵と艶にをかしうせさせ給へり。御前の山より瀧おとされたる石のたゝずまひ、苔深きみ山木に枝さしかはしたる庭の小松もげに〳〵千世をこめたる霞の洞なり。前栽つくろはせ給へる頃、人々あまた召して、御遊などありける後、定家の中納言いまだ下臈なりける時に奉られける、

あり經けん本の千年にふりもせで
わが君ちぎるみねのわか松（おどろの下）

元久　土御門天皇の年號。

定家　中納言藤原定家。

四　雪のむらぎえ

この撰集よりさきに、千五百番の歌合せさせ給ひしにも、勝れたる限を撰ばせ給ひて、その道の聖たち判じけるに、やがて院も加はらせ給ひながら、猶このなみには立ち及びがたしとひげせさせ給ひて、判のことばをしるされず、御歌にて、まさり劣れる志ばかりをあらはし給へり。なか〳〵いと艶に侍りけり。上の其の道をえ給へれば、下も自ら時を知るならひにや。男も女も、この御代にあたりて、よき歌よみ多く聞え侍りし中に、宮内卿の君といひしは、村上の御門の御後に、俊房の左のおとゞと聞えし人の御末なれば、やうはあて人なれど、つかさ淺くて、うちつゞき四位ばかりにて失せにし人の子なり。まだいと若きよはひにて、そこひもなく深き心ばへをのみよみしこそ、いとありがたく侍りけれ。この千五百番の歌合の時、院の上のたまふやう、「こたみは皆世にゆりたるふる

この撰集　新古今和歌集。

俊房　村上天皇の皇子具平親王の孫。

うせにし人　右京大夫源師光。

き道のものどもなり。宮内卿はまだしかるべけれども、けしうはあらずと見ゆめればなん、かまへて、まろが面おこすばかりよき歌仕うまつれ。」と仰せらるゝに、おもてうち赤めて、涙ぐみて候ひけるけしきかぎりなきすきの程も、あはれにぞ見えける。さてその御百首の歌、いづれもとりぐなる中に、

うすくこき野邊のみどりの若草に
跡まで見ゆる雪のむらぎえ

草の緑の濃き薄き色にて、去年のふる雪の、遲くとく消えけるほどを推しはかりたる心ばへなど、まだしからん人は、いと思ひよりがたくや。「この人、年つもるまであらましかば、げにいかばかり、目に見えぬ鬼神をも動かしなましに、若くて失せにし、いとほしく、あたらしくなん。」（おどろの下）

目に見えぬ　古今集序に、「力をも入れずして天地を動かし目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ。」とあるによる。

義時　時政の長子。

故左衛門督　頼家。

此の内大臣　實朝。

大饗　任大臣大饗として大臣に任じたる時宴會を開きて公卿を饗應するをいふ。

尊者　大饗につらなる上客。

上達部　關白以下三位以上の公卿。

殿上人　四位五位及六位の人の昇殿を許されたる者の稱。雲客。堂上人。

八幡の御社　鎌倉の鶴岡八幡宮。

五　實朝卿

時政は建保三年にかくれにしかば、義時ぞあとを繼ぎける。故左衛門督の子にて、公曉といふ大德あり。「親の討たれにし事をいかでかやすき心あらん。いかならむ時にかとのみ思ひわたるに、此の内大臣、また右大臣にあがりて、大饗など珍しくあづまにて行ふ。京より、尊者を始め、上達部・殿上人多くとぶらひいましけり。」さて鎌倉に移し奉れる八幡の御社に神拜にまうづる、いとめしき響なれば、國々の武士はさらにもいはず、都の人々も扈從しけり。立ち騒ぎのゝしるもの、見る人も多かる中に、かの大德うちまぎれて、女のまねをして、白き薄衣ひきをり、大臣の車よりおるゝ程を、さしのぞくやうにぞ見えける。あやまたず首をうち落しぬ。「その程のごよみ、いみじさ思ひやりぬべし。かくいふは承久元年正月廿七日なり。そこらつどひ集れるものども、たゞあきれたる

より外のことなし。京にも聞召し驚く。世の中火をけちたるさまなり。扈從に西園寺の宰相中將實氏も下り給ひき。さならぬ人々も、泣く〳〵袖をしぼりてぞ上りける。（新島守）

六　今をかぎり

さても院のおぼし構ふる事、忍ぶとすれど、やう〳〵漏れ聞えて、東ざまにもその心づかひすべかめり。あづまの代官にて、伊賀の判官光季といふものあり。かつ〴〵かれを御かうじのよし仰せらるれば、御方に參るつはものどもおしよせたるに、遁るべきやうなくて、腹切りてけり。まづいとめでたしとぞ、院は思召しける。

「あづまにも、いみじうあわて騒ぐ。「さるべくて、身の失すべき時にこそあなれ。」と思ふものから、「討手の攻め來りなん時に、はかなき樣にて屍を曝さじ。おほやけと聞ゆとも、自らし給ふことならね

院　後鳥羽院。
おぼし構ふること　北條氏追討の御企。
東の代官　關東より遣せし京都の守護。
御かうじ　勅勘のこと。
ものから　ものながら。

ば、かつは我が身の宿世をも見るばかり。」と思ひなりて、弟の時房と、泰時といふ一男と、二人をかしらとして、雲霞の〻はものをたなびかせて都にのぼす。泰時を前にすゑていふやう、「おのれをこの度都にまゐらする事は、思ふ所多し。本意の如く清きしにをすべし。人にうしろを見えなんには、親の顔また見るべからず、今をかぎりと思へ。賤しけれども、義時、君の御ためにあぐめたき心やはある。されば、横ざまの死をせん事はあるべからず、心を猛く思へ。おのれうち勝つものならば、再びこの足柄・箱根山は越ゆべし。」など、泣く泣くいひ聞かす。「まことにしかなり、また親の顔拜まん事も、いとあやふし。」と思ひて、泰時も鎧の袖をしぼる。かたみに今やかぎりと、あはれに心ぼそげなり。

かくてうちいでぬるまたの日、思ひかけぬほどに、泰時只一人、鞭をあげて馳せ來たり。父胸うちさわぎて、いかにと問ふに、「軍のあ

足柄　神奈川縣駿東郡足柄山。
箱根山　足柄下郡。
うちいでぬるまたの日　承久三年五月二十三日。

るべきやう、大方のおきてなどをば、仰の如くその心を得侍りぬ。若し道のほとりにも、計らざるに辱く鳳輦を先立てて、御旗をあげられ、臨幸の嚴重なる事も侍らんに參りあへらば、その時の進退いかゞ侍るべからん。」この一ことを尋ね申さんとて、一人馳せ侍りき。」といふ。義時ことばかりうち案じて、かしこくも問へるをのこかな。その事なり、まさに君の御輿に向ひて弓を引くことは、如何あらん。さばかりの時は、兜をぬぎ弓の弦をきりて、偏にかしこまりを申して、身をまかせ奉るべし。さはあらで、君は都におはしましながら、軍兵をたまはせば、命をすてて、千人が一人になるまでも戰ふべし。」といひもはてぬに、急ぎたちにけり。（新島守）

七　ことわり知らぬ涙

中院は、はじめよりしろしめさぬ事なれば、あづまにも咎め申さ

ねど、父の院遙かにうつらせ給ひぬるに、長閑にて都にてあらん事、いとおそれありと思されて、御心もて、その年閏十月十日、土佐の國のはたといふ所に渡らせ給ひぬ。去年のきさらぎばかりにや、若宮いできたまへり。承明門院の御せうとに、通宗の宰相中將とて若くて失せ給ひにし人のむすめの御腹なり。やがてかの宰相の弟に、通方といふ人の家にとゞめ奉り給ひて、ちかくさぶらひける北面の下臈一人、召次などばかりぞ、御供つかうまつりける。いとあやしき御手輿にて下らせ給ふ。道すがら雪がきくらし、風吹き荒れ、ふゞきして、來し方行くさきも見えず、いと堪へがたきに、御袖もいたく凍りて、わりなき事多かるに、

うき世にはかゝれとてこそ生れけめ
　ことわりしらぬ我がなみだかな

せめて近きほどにと、あづまより奏したりければ、後には阿波の國

にうつらせ給ひにき。（新島守）

八　新島守

六つにて位に卽き給ひて、十三年おはしましき。おり給ひて後も、土佐院十二年、佐渡院十一年、なほ天の下は同じ事なりしかば、すべて三十六年が程、この國のあるじとして、萬機のまつり事を御心一つに治め、百のつかさをしたがへ給へりしその程、吹く風の草木を靡かすよりも勝れる御ありさまにて、遠きをあはれび、近きをなで給ふ御めぐみ、雨のあしよりもしげければ、津の國のこやのひまなき政事をきこしめすにも、難波の葦の亂れざらん事をおぼしき。藐姑射の山の峰の松も、やう〳〵枝をつらねて、千代に八千代を重ね、霞の洞の御住ひ、幾春を經ても、空ゆく月日の限知らず、のどけくおはしましぬべかりける世を、あり〳〵て、よしなき一ふしに、今は

六つにて　後鳥羽上皇のこと。

土佐院　土御門上皇。

佐渡院　順德上皇。

津の國の　津の國のこやとも人をいふべきにひまこそなけれ葦の八重葺。（後拾遺集、和泉式部）

かく花の都をさへたち別れ、おのがちり〴〵にさすらへ、磯の苫屋に軒をならべて、おのづからことふものとては、浦に釣するあま小舟、鹽燒くけぶりのなびく方をも、我がふる里のしるべかとばかり、ながめ過させたまふ御住ひどもは、それまでと月日を限りたらんだに明日しらぬ世のうしろめたさに、いと心細かるべし。まいて、いつをはてとか、めぐり逢ふべきかぎりだになく、雲の涙・煙の波の幾重ともしらぬ境に、世をつくし給ふべき御さまども、口惜しといふもおろかなり。　このおはします所は、人はなれ里遠き島の中なり。海づらよりは少しひき入りて、山蔭にかたそへて、大きやかなる巖のそばだてるをたよりにて、松の柱に葦葺ける廊など、けしきばかりことそぎたり。誠に、「柴のいほりのたゞしばし」とかりそめに見えたる御やどりなれど、さる方になまめかしく、ゆゑづきてしなさせ給へり。水無瀨殿おぼしいづるも夢のやうになん。は

柴のいほり　いづくにもすまれずばただ柴の庵のしばしなる世に。（新古今集、西行法師）

るばると見やらるゝ海の眺望、「二千里の外」ものこりなき心ちする、今更めきたり。鹽風のいとこちたく吹きくるを聞召して、

我こそは新島もりよおきの海の
あらき涙かぜこゝろして吹け　（新島守）

水無瀬殿　上皇水無瀬に離宮を造りて屢御幸ありしこと「おどろの下」の卷にあり。

二千里の外　三五夜中新月色、二千里外故人心。（白樂天）

九　浦のながめ

年もかへりぬ　承久四年。

年もかへりぬ。所々浦々、あはれなる事をのみおぼしなげく。佐渡院あけくれ御行をのみしたまひつゝ、猶さりともとおぼさる。隱岐には、浦よりをちの、はるゝ〳〵と霞みわたれる空をながめ入りて、過ぎにし方、かきつくしおもほしいづるに、行方なき御涙のみぞとゞまらぬ。

うらやましき長き日影の春にあひて
汐くむあまもそでやほすらん

夏になりて、萱葺の軒端に、五月雨のしづくいと所せきも、御覽じなれぬ御心ちに、さまかはりて珍しくおぼさる。

あやめふくかやが軒端に風すぎて
しゞろにおつるむらさめの露

初秋風のたちて、世の中いとゞものがなしく露けさまさるに、いはん方なくおぼしみだる。

故郷を別路におふるくずの葉の
秋はくれゝどもかへる世もなし

たとしへなくながめしをれさせ給へる夕暮に、沖の方に、いと小さき木の葉の浮べると見えて漕ぎ來るを、あまの釣舟かと御覽ずるほどに、都よりの御消息なりけり。墨染の御衣、夜の御ふすまなど、都の夜さむに思ひやり聞えさせ給ひて、七條院よりまゐれる御文、ひきあけさせ給ふより、いといみじく御胸もせきあぐる心ちす

七條院　上皇の御母。

れば、やゝためらひて見給ふに「あさましくも、かくて月日經にける事、今日あすとも知らぬ命のうちに、今一たびいかで見奉りてしがな。かくながらは、死出の山路も越えやるべうも侍らでなん。」など、いと多くみだれかき給へるを、御顏におしあてて、

垂乳根の消えやらで待つ露の身を
風よりさきにいかでとはまし

八百萬かみもあはれめたらちねの
われ待ちえんとたえぬ玉の緒

初雁のつばさにつけつゝ、こゝかしこより、哀なる御消息のみ常は奉るを、御覽ずるにつけても、あさましういみじき御涙のもよほしなり。家隆の二位は新古今の撰者にも召しくはへられ、大かた歌の道につけて、むつまじく召し使ひし人なれば、夜晝戀ひ聞ゆること限なし。かの伊勢より須磨にまゐりけんも、かくやとおぼゆ

初雁の　前漢の蘇武の故事により雁を文の使としてかけり。

伊勢より須磨に

るまで、まきかさねて書きつらねまゐらせたる、和歌所のむかしの面影、かず〳〵忘れがたうなど申して、つらき命の今日まで侍ることの恨めしきよしなど、えもいはずあはれ多くて、

寐覺して聞かぬをきゝて佗しきは
あら磯なみのあかつきのこゑ

とあるを、法皇もいみじとおぼして、御袖いたくしぼらせたまふ。

浪間なきおきの小島のはまびさし
ひさしくなりぬ都へだてゝ　（新島守）

源氏物語須磨の卷に、六條の御息所、伊勢より須磨なる源氏の君の許に、白き唐紙四五枚はかりを書き續けたる御消息を送られたる由を記せり。

和歌所　和歌を講修し又は撰集するを掌る。村上天皇の時より始まる。

一〇　最明寺入道

時頼朝臣は康元元年に頭おろして後、しのびて諸國を修行しありきけり。それも國々の有樣、人の愁など、委しくあなぐり見聞かんのはかりごとにてぞありける。あやしの宿りに立寄りてはそ

時頼　時氏の子、泰時の孫、康元元年出家、年三十、法名道崇、弘長三年（約六〇年前）歿、年三十七。

あなぐり　檢索すること。

の家ぬしが有様を問ひ聞き、理ある愁などの埋もれたるを聞きひらきては、「我はあやしき身なれど、昔よろしき主をもち奉りし、いまだ世にやおはすると消息奉らん。もてまうでて聞え給へ。」などいへば、「なでふ事なき修行者の、何ばかりかは。」とは思ひながら、言ひ合せて、その文もちてあづまへ行きて、しか〳〵と致へしまゝに言ひて見れば、入道殿の御消息なりけり。「あなかま〳〵。」とて永き愁なきやうにはからひつ。佛神などの現れ給へるかとて、皆額をつきて悅びけり。かやうの事すべて數知らずありしほどに、國々も心づかひをのみしけり。最明寺入道とぞいひける。（草まくら）

その頃
弘安四年。
本院
後深草院。
新院
龜山院。

一一　神風

その頃蒙古おこるとかやいひて世の中騷ぎ立ちぬ。いろ〳〵さま〴〵に恐ろしう聞ゆれば、「本院新院はあづまへ御下りあるべし。内・春宮は京にわたらせ給ひて、東の武士ども上り候ふべし。」などど沙汰ありて、山々寺々御祈數知らず。伊勢の勅使に經任大納言まゐる。新院も八幡へ御幸なりて西大寺の長老召されて眞讀の大般若供養せらる。大神宮へ御願に、我が御代にしもかゝる亂出で來て、誠にこの日本のそこなはるべくば、御命を召すべきよし、御手づから書かせ給ひけるを、大宮院「いとあさましき事なり。」と、なほ諫め聞えさせ給ふぞことわりにあはれなる。東にも言ひ知らぬ祈どもこちたくのゝしる。故院の御代にも御賀の試樂の頃、かゝる大事ありしかど、程なくこそしづまりにしを、この度はいとにがにがしう、牒狀とかやもちて參れる人などありて、わづらはしう聞ゆれば、上下思ひ惑ふこと限なし。

されども七月一日夥しき大風吹きて、異國の船六萬艘、兵乘りて筑紫へよりたる、皆吹き破られぬれば、或は水に沈み、おのづから殘し。

内
後宇多天皇。
春宮
伏見天皇。
西大寺
奈良の西にあり。
大般若
六百卷。唐玄奘譯。
大宮院
姞子。後嵯峨院の中宮。
故院
後嵯峨院。
試樂
御賀の舞樂を其以前に試みらるゝ儀式。文永五年のことなり。
七月一日
弘安四年。

れるも、泣く〳〵本國へ歸りにけり。石清水の社にて大般若供養説法いみじかりける刻限に、晴れたる空に黑雲一むら俄かに見えてたなびく。かの雲の中より白き羽にてはぎたる鏑矢の大きなる、西を指して飛び出でて鳴る音おびたゞしかりければ、彼處には大風の吹きくると兵の耳には聞えて、浪荒く立ち、海の上あさましくなりて皆沈みにけりとぞ。なほ我が國に神のおはします事あらたに侍りけるにこそ。さて爲氏の大納言伊勢の勅使にてのぼる道より申しおくりける、

勅としていのるしるしの神風に
寄せくる浪ぞかつくだけつる

かくて靜まりぬれば、京にも東にも御心どもおちゐて、めでたさかぎりなし。かの異國の帝、心うしとおぼして、湯水をも召さず、「われいかにもして、この度日本の帝王にうまれて、かの國をほろぼす身

爲氏　經任の誤なるべし。

異國の帝　元主忽必烈。

二十四日　元弘元年八月二十四日。

六波羅　京都を守護する幕府の役所。

ひすまし　雑洗、厠の掃除をする下司の女。

となられん。」とぞちかひて死に給ひけるとぞ聞き侍りし。まことにやありけん。（老のなみ）

一二　東軍狼藉

さて都には、廿四日の夜、六波羅より、常陸守時知馳せ參りて、百數の中をあさり騷ぐ。その程、人の曹司などに、おのづから落ち殘りたる女房の心ち、いはんかたなし。おはします殿を見れば、近き御づし、御調度どもなにくれ、硯などもさながらうち散りて、只今までおはしましけるあとと見えながら、宮人などだに一人もなし。女房の曹司々々より、ひすましめく女の童など、われ先にと走りいで、調度ども運び騷ぎ、くづれいづる氣色ども、いとあさましく、めもあやなり。錦の几帳の内にいつかれまし〳〵つる后の宮も、何の儀式もなく、忍びてあわて出でさせ給ひぬれば、あたり〳〵かきはら

ひ、時の間にいとあさましく、御簾・几帳などふみしだきひきおとして、火の影もせず。こゝもかしこもくらがりて、うちあれたる心ちす。今朝まで、九重の深き宮の中に出で入りつかへつる男女、ひとりとまらず。えもいはぬ武士ども打ち散り、あら〳〵しげなるけはひに、續松高くさゝげて、細殿・渡殿何くれ、まかげさしてあさりたるけしき、けうとくあさまし。世はうきものにこそ。時の間に、げに心あらん人は、やがて修行の門出にもなりぬべくぞ覺ゆる。中宮は忍びて野宮殿の傍にぞおはしましつきにける。宣房の大納言の二郎季房の宰相ばかり、御とのゐにさぶらふ。（むら時雨）

まかげさし　目の上に手をかざして。
中宮　禧子
宣房　萬里小路大納言。
阪本　延暦寺。
南ざま　奈良。

一三　志賀の浦浪

阪本には、行幸を待ち聞え給ひけるに、引きたがへ南ざまへおはしましぬれば、そのよし衆徒に聞かれなばあしかりぬべし。又とまれかくまれ、まことのおはしまし所を、さうなく武家へ知らせじのたばかりにやありけん、花山院の大納言師賢を山へつかはして、忍びて御門のおはしますよしにもてないて、かの兩法親王事行ひ給ひつゝ、六波羅の兵どもの圍みを防がせ給ふ。その日は、大納言も、大塔の前座主の宮も、うるはしき武士姿にいでたゝせ給ふ。卯の花をどしの鎧に、鍬形の兜たてまつり、大矢負ひてぞおはする。妙法院の宮は、すゞしの御衣の下に、萌黃の御腹卷とかや着給へり。大納言は、からの香染の薄物の狩衣に、掲焉（けちえん）に赤き腹卷をすかして、さすがに蒔繪の細太刀をぞはき給ひける。六波羅より、御門こゝにおはしますと心得て、武士ども多くまゐり圍む。山法師も戰ひなどして、海東とかやいふつはもの討たれにけり。事のはじめに東うせぬる、めでたしなどぞいふめる。かゝれども、御門笠置におはしますよし、程なく聞えぬれば、謀られ奉りにけりとて、山の衆徒

山　比叡山。
御門　後醍醐天皇
兩法親王　尊雲・尊澄。
大塔の前座主　尊雲。（護良親王）。
妙法院宮　尊澄。（宗良親王）。
すゞし　生絲織の練らぬ絹。
掲焉に　著しく、きはやかに。
細太刀　鞘に蒔繪などして單に威をつくらふ爲の儀式の太刀。
海東　敵の大將海東備前左近大夫將監。

宮々　尊雲・尊澄。
志賀の浦　近江の琵琶湖。

も、せう〳〵心がはりしぬ。宮々も逃げいで給ひて、笠置へぞまうで給ひける。大納言は都へまぎれおはすとて、夜深く志賀の浦を過ぎ給ふに、有明の月隈なく澄みわたりて、寄せかへる浪の音もさびしきに、松吹く風の身にしみたるさへ、とりあつめ心細し。

思ふ事なくてぞ見ましほの〳〵と
ありあけの月の志賀の浦波

その後、からうじてぞ笠置へはたどり参られける。（村しぐれ）

一四　思はぬ山の紅葉

笠置殿　後醍醐天皇の行在所。

笠置殿には、大和・河内・伊賀・伊勢などより、兵ども参りつどふ中に、事のはじめより頼み思されたりし楠木兵衛正成といふものあり。心猛くすくよかなるものにて、河内國に、おのが館のあたりをいかめしくしたゝめて、このおはします所若し危からんをりは、行幸を

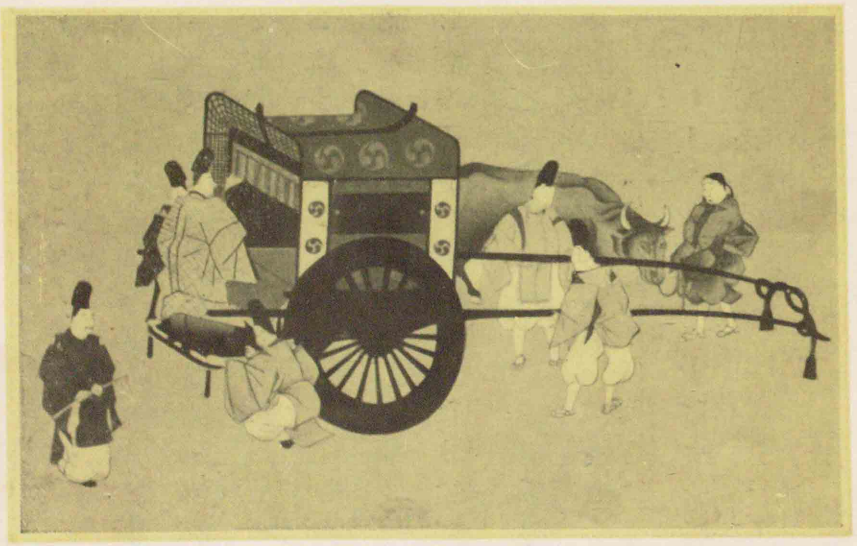
東の夷　北條氏の軍。
京にある武士　兩六波羅の武士。
木の丸殿　丸木のまゝの假舍。笠置殿。

もなしきこえんなど、用意しけり。東の夷どもも、やう〳〵攻め上るよし聞ゆ。もとより京にある武士ども、われ先にときほひ参る。木丸殿には、さこそいへ、むね〳〵しきものもなし。いかになりゆくべきにかと、いと物心細く思しみだる。我が御心もての御事なれば、かこつ方なけれど、故郷の空もあはれにおぼし出でらる。秋も深くなりゆくまゝに、山の木の葉のうちしぐれ、谷の嵐のおとづるゝも、かたきのきほふかと、肝を消す御すまひ、いつしか御身をかへたる心ちし給ふもあぢきなし。

うかりける身を秋風にさそはれて
おもはぬ山のもみぢをぞ見る　（むら時雨）

一五　むら時雨

十月三日、都へ入らせ給ふも、思ひしにかはりて、いとすさまじげ



——鳳輦（上）と網代車（下）——

衞府のすけ　六衞のすけ、近衞は中將、少將、衞門兵衞は佐、何れも供奉の官なり。

兩院　後伏見院と花園院。

春宮　光嚴院。

中務の宮　尊良親王。

なる武士ども、衞府のすけの心ちして、御輿近くうち圍みたり。鳳輦にはあらぬ網代輿のあやしきにぞたてまつれる。六波羅の北なる檜皮屋には、もとより兩院・春宮おはしませば、南の板屋のいとあやしきに御しつらひなどしておはしまさするも、いとほしうかたじけなし。間近きほどに、よろづ聞召し御覽じふるゝことゞにつけても、いかでか御心動かぬやうはあらん。口惜しうおぼしみだる。ならはぬ御宿りに、時雨の音さへはしたなくて、

まだなれぬいたやの軒のむら時雨
おとをきくにもぬるゝ袖かな

中務の宮は、正成がもとにおはしましつれど、御門のかくならせ給ひぬれば、今はかひなしとて、それも都へ入らせ給ひて、佐々木判官時信といふものゝ家にわたり給ひぬ。つれ〴〵と、物思しみだるゝより外の事なし。

世のうさをそらにもしるや神無月
ことわりすぎてふる時雨かな　（むら時雨）

一六　都の名殘

かの承久のためしにとや、あづまよりの御使には長井の右馬助高冬といふ者なるべし。これは頼朝の大將の時より鎌倉に重き武士にて、いまだ若けれども、かゝる大事にも上せけるとぞ申しける。遂に隱岐國へ遷し奉るべしとて、彌生のはじめの七日に都を出でさせ給ふ。今はと聞召す御心まどひども、いへばさらなり。所々の歎、近う仕うまつりし人々の心ちどもおき所なくかなし。御門も限なく御心惱むべし。いとかうしも人に見えじと、かつはおぼししづむれど、あやにくにすゝみ出づる御涙を、もてかくしつつおはします。ふりにし事を思しいづるにも、立ちかへりまた世

承久のためし　後鳥羽・土御門・順德の三上皇を遷し奉りし例。
彌生　元弘二年三月
所々　女院・中宮其他の宮たち。
ふりにし事　かの承久の昔のこと。

をやすく思さん事のいと難ければ、よろづ今をとぢめにこそと、思しめぐらすに、人やりならず口惜しきちぎり加はりける前の世のみぞ、つきせず恨めしき。

つひにかく沈みはつべき報あらば
上なき身とはなにうまれけん

巳の時ばかりに出でさせ給ふ。網代の御車に、御前どもなどは、故院の御世より仕うまつりなれにしものども、あるかぎり参れり。御車寄に西園寺中納言公重さぶらひたまふ。上は御冠に世のつねの御直衣・指貫・白綾の御衣一かさね奉れり。こぞの今日は北山にて花の宴せさせ給ひしも、あはれに思し出でられて、その日の事かきつらね戀しくおぼさる。人々の祿にこそはたまはせしを、今日は御旅衣にたちかふるも、あはれに定なき世のならひ、今さら心憂し。御車にたてまつるとて、日頃おはしましつる傍の障子に書

網代の車　網代にてやかたを張りたる車。
故院　後宇多院。
上　後醍醐天皇。
日頃おはしつる　六波羅の南の板屋。

きつけさせたまふ。

いさしらず尙うき方の又もあらば
この宿とてもしのばれやせむ

御供には、內侍の三位殿・大納言君・小宰相など、男には行房の中將、忠顯の少將ばかり仕うまつる。おのがじゝ、都の名殘どもいひつくしがたし。六波羅より、七條を西へ、大宮を南へ折れて、東寺の門前に御車おさへらる。とばかり御念誦あるべし。物見車所せき程なり。よろしき女房も、つぼさうぞくなどして、かちの者どももうちまじれり。若きも老いたるも、尼法師、あやしき山がつまで立ちこみたるさま、竹の林に異ならず。おの〳〵目押し拭ひ、鼻すゝりあへる氣色ども、げにうき世のきはめは今に盡しつる心ちぞする。崇德院の讃岐におはしましけむ程のありさま、後鳥羽院の隱岐に遷らせ給ひけむ時なども、さこそはありけめなれど、つてにの

內侍の三位　藤原廉子。
東寺　今下京區九條町。
つぼさうぞく　小袖の前の兩方の褄を折りて前に挿み、笠に薄衣きたる女。

み聞きて、見ねば知らず、これを初めたる心ちぞする。日頃は、何の御にほひにもふれず、數ならぬ人、及ばぬ身までも、今日の御別のあはれさ、なべておき所なげにぞ惑ひあへるかし。君も御簾少しかきやりて、このもかのも御覽じ渡しつゝ、御目とまらぬ草木もあるまじかめり。岩木ならねば、武士の鎧の袖どもも、しほとけげにぞ見ゆる。都の梢を、かくるゝまで御覽じおくるも、猶夢かとおぼゆ。鳥羽殿におはしましつきて、御裝あらため、破子などまゐらせけれど、氣色ばかりにてまゐらず。これより御輿にたてまつれば、留るべき御前どもの、空しき御車を、泣く〳〵やりかへるとてくれ惑ひたる氣色、いと堪へがたげなり。（久米のさら山）

都の梢を云々　君がすむ宿の梢をゆく〳〵もかくるゝまでにかへり見しはや（菅原道眞）

鳥羽殿　京都府紀伊郡。

やすぎの津　能義郡安來港。

一七　苔の下

出雲の國やすぎの津といふ所より、御船にたてまつる。大船二十四艘、小舟どもは數も知らずつゞきたり。遙かにおしいだすほど、今一かすみ心細うあはれにて、誠に「二千里の外」の心ちするも、今さらめきたり。かの島におはしましつきぬ。昔の御跡は、それとばかりのしるしだになく、人のすみかも稀に、おのづから蜑の鹽やく里ばかり遙かにて、いとあはれなるを御覽ずるにも御身の上はさしおかれて、まづかの古の事思し出づ。かゝる所に世をつくし給ひけむ御心のうち、いかばかりなりけむと、哀に辱く思さるゝにも、今はた更にかくさすらへぬるも、何により思ひ立ちし事ぞ。かの御心のすゑや果し遂ぐると思ひしゆゑなり。苔の下にもあはれと思はるらむかしと、よろづにかき集め、つきせずなむ。海づらよりは少し入りたる國分寺といふ寺を、よろしきさまにとり拂ひて、おはしまし所に定む。今はさは、かくてあるべき御身ぞかしと、おぼししづまるほど、猶夢の心ちしていはむ方なし。（久米のさら山）

かの島　隱岐島。

昔の御跡　後鳥羽院の御遺跡。

國分寺　知夫郡別府村に遺址ありといふ。

隱岐の小島には（後醍醐天皇の御心。）

一八　あまのつり船

隱岐の小島には、月日ふるまゝに、いと忍びがたう思さるゝ事のみぞ數添ひける。いかばかりのおこたりにて、かゝるうきめを見るらんと、前の世のみつらくおぼし知らるゝにも、いかでその事をも報いてんとおぼして、うち絶えて御精進にて、朝夕勤め行はせ給ふ。法のしるしをも試みがてらと、かつはおぼすなるべし。自ら護摩などもたかせ給ふに、いとたのもしき事、夢にも多くなんありける。つれ〴〵におぼさるゝ折々は、廊めぐる所に立ち出でさせたまひて、遙かに浦のかたを御覽じやるに、蜑の釣船ほのかに見えて、秋の木の葉のうかべる心ちするもあはれに、いづくをさしてかとおぼさる。

心ざすかたをとはばや涙のうへに

浦漕ぐ船の（須磨の蜑の浦こぐ船のかぢを絶えよるべなき身ぞかなしかりける（續古今集、小野小町））

かの島（隱岐の島。）

密敎の修法（眞言祕密の大修法。）

うきてたゞよふあまの釣船

「浦こぐ船のかぢをたえ」とうち誦じて、御涙のこぼるゝを、なにとなくまぎらはし給へる、いふよしなく心深げなり。ねび給ひにたれど、なまめかしうをかしき御さまなれば、所につけては、ましてやんごとなきあたらしさを、自らいと辱しと思さる。（久米のさら山）

一九　さめざらましを

かの島には、春來ても猶浦風さえて涙荒く、渚の氷もとけがたき世のけしきに、いとゞおぼし結ぼるゝ事盡きせず。かすかに心細き御住ひに、年さへ隔りぬるよとあさましくおぼさる。さぶらふ人々も、しばしこそあれ、いみじくくんじにたり。今年は正慶二年といふ。閏二月あり。後のきさらぎの初つ方より、どりわきて密教の祕法を試みさせ給へば、夜も大殿ごもらぬ日數經て、さすがに

後宇多院　後醍醐天皇は院の第二の皇子。

さめざらましを　思ひつゝぬればや人の見えつらん夢と知りせばさめざらましを（古今集、小野小町）

源氏大將　源氏物語明石卷に、光源氏須磨に侘住居の時、父御門（桐壺帝）の夢の告げにて、明石入道の迎へをうけ、須磨を去り、明石に行き、やがて都に歸りしことを見ゆ。新發意は明石入道のことなり。

いたう困じ給ひにけり。心ならずまどろませ給へる曉方、夢現ともわかぬ程に、後宇多院ありしながらの御面影さやかに見え給ひて、聞えしらせ給ふこと多かりけり。うち驚きて、夢なりけりとおぼすほど、いはむ方なく名殘かなし。御涙もせきあへず、「さめざらましを。」とおぼすもかひなし。源氏の大將、須磨の浦にて父御門見奉りけん夢の心ちし給ふも、いとあはれにたのもしう、いよ〳〵御心強さまさりて、かの新發意が御迎のやうなる釣舟も、たよりいできなんやと待たるゝ心ちし給ふに、大塔の宮よりも、あま人のたよりにつけて聞え給ふ事絶えず。

都にも、猶世の中靜まりかねたるさまに聞ゆれば、よろづに思し慰めて、關守のうち寢るひまをのみうかゞひ給ふに、しかるべき時のいたれるにや、御垣守にさぶらふ兵ども、御氣色をほの心えて靡き仕うまつらんと思ふ心つきにければ、さるべき限かたらひ合はせて、同じ月の廿四日の曙に、いみじくたばかりて、かくろへゐて奉る。いとあやしげなる蜑の釣舟のさまに見せて、夜深き空の暗きまぎれにおしいだす。折しも霧いみじうふりて、ゆくさきも見えず。いかさまならむと危けれど、御心を靜めて念じ給ふに、思ふかたの風さへ吹きすゝみて、その日の申の時に、出雲の國につかせ給ひぬ。こゝにてぞ人々心ちしづめける。おなじ二十五日、伯耆の國稻津の浦といふ所にうつらせ給へり。

おなじ月　正慶二年二月二十四日。

二〇　かへる波

さて都には、伯耆よりの還御とて、世の中ひしめく。まづ東寺へ入らせ給ひて、事ども定めらる。二條の前の大臣道平召ありて參り給へり。しるしの箱を御身にそへられたれば、たゞ遠き行幸の還御の儀式にてあるべきよし定めらる。關白をおかるまじければ、

氏の長者　上古の氏上に上に一族の長。攝政關白となりし人、氏の長者となる例なるが、此度關白をおかぬ故特に宣下あり。

うちつけめ　ふと見たる目の意にて、外より見し淺き考をいふ。

先陣は　東寺は九條にあり、二條萬里小路では京の端より端迄なり。

名和　名和長年。

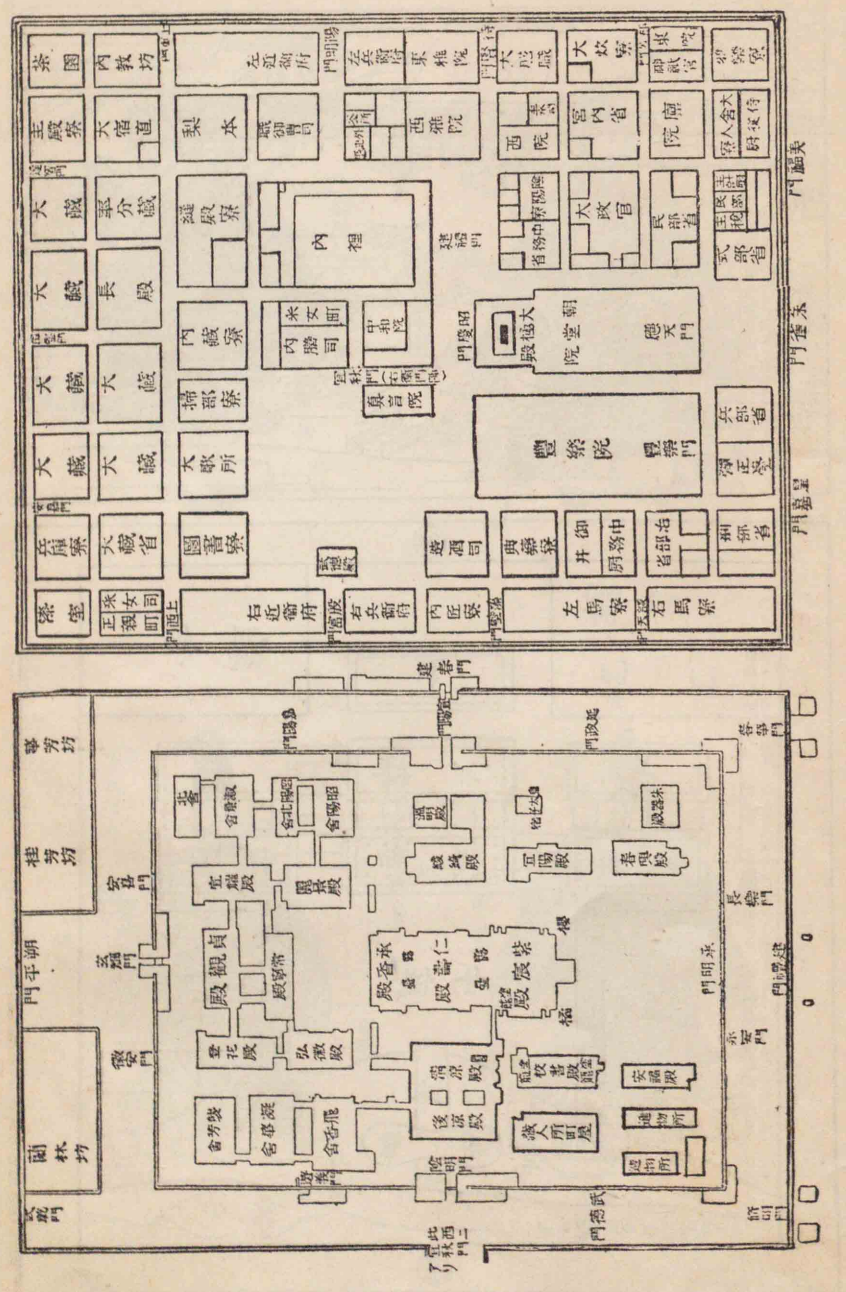
二條のおとゞ氏長者を宣下せられて、都の事管領あるべきよしうけたまはる。天の下、只この御計ひなるべしとて、このひとつあたり喜びあへり。六月六日、東寺より常の行幸のさまにて、内裏へぞ入らせ給ひける。めでたしとも言の葉なし。「こぞの春いみじかりしはや。」と思ひいづるもたとしへなく、今も御供の武士ども、ありしよりは、なほ幾へともなくうち圍み奉れるは、いとむくつけきさまなれど、こたみは疎ましくも見えず、頼もしくめでたき御まもりかなと覺ゆるも、うちつけめなるべし。世のならひ、時につけて移る心なれば皆さぞあるらし。先陣は、二條富小路の内裏につかせ給ひぬれど、後陣の兵は、猶東寺の門まで續きひかへたりしとぞ聞えしは、まことにやありけむ。正成も仕うまつれり。かの名和の又太郎は、伯耆守になりて、それも衞府のものどもにうちまじりたる、珍しくさまかはりて、ゆすりみちたる世の氣色「かくもありけるを、

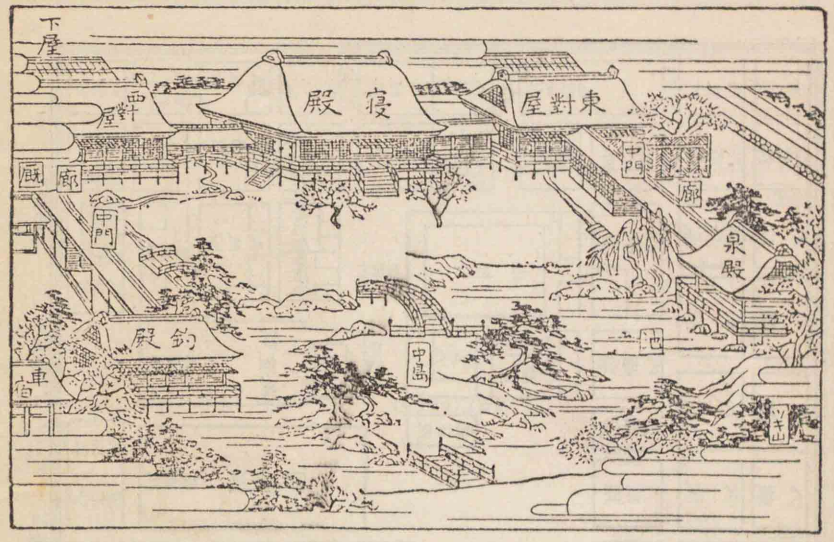
などあさましくは歎かせ奉りけるにか。」と、めでたきにつけても、猶前の世のみゆかし。車などたち續きたるさま、ありし御くだりには、こよなくまされり。物見ける人の中に、

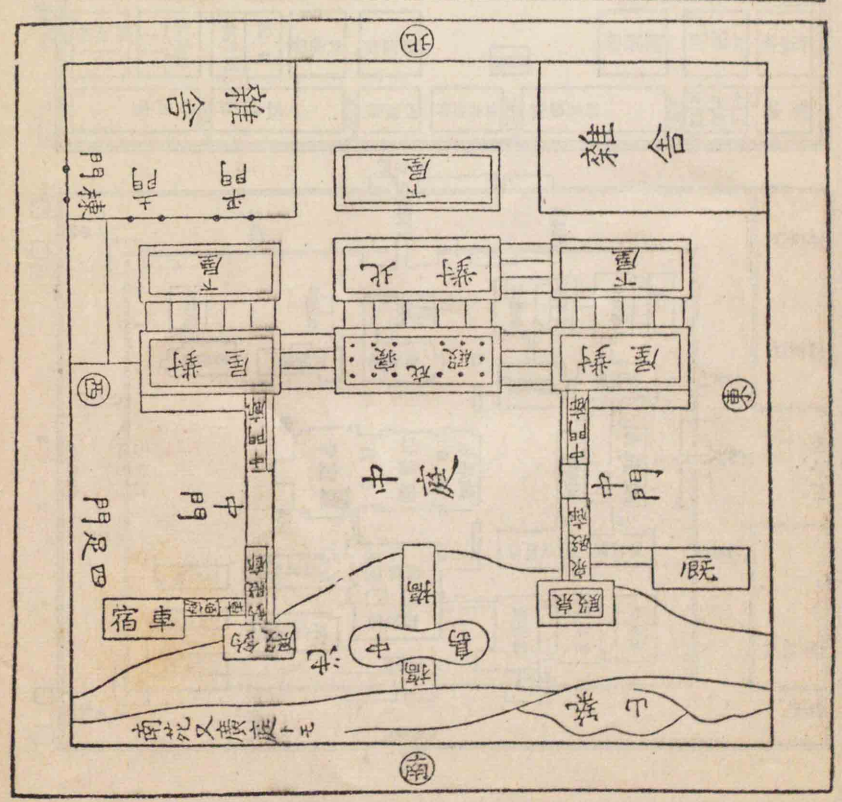
昔だにしづむうらみをおきの海に
　波たちかへるいまぞかしこき

昔の亭など思ひあはするにやありけん。（月草の花）

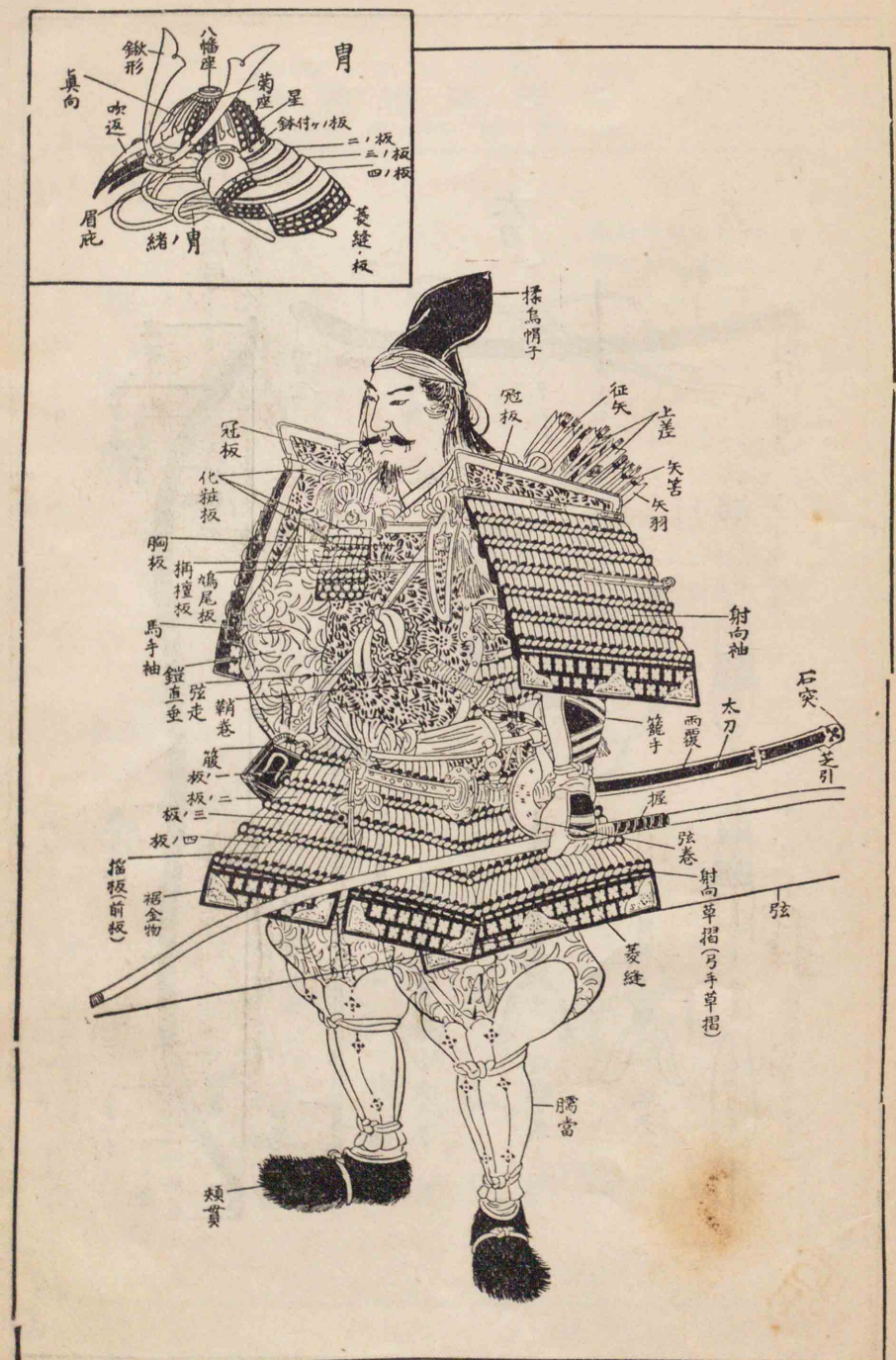
國語讀本 卷十終


內裏
豐楽院
朝堂院
大極殿
紫宸殿
清涼殿
後涼殿
殿觀貞
殿香承
殿壽仁
殿寒柴
殿常
殿明
殿貞
殿香
殿香凝
殿香飛
殿香秀
殿香芳
殿香殿
殿香昭
殿香陽
殿香北陽
殿香
殿香殿
殿香
殿香
殿香

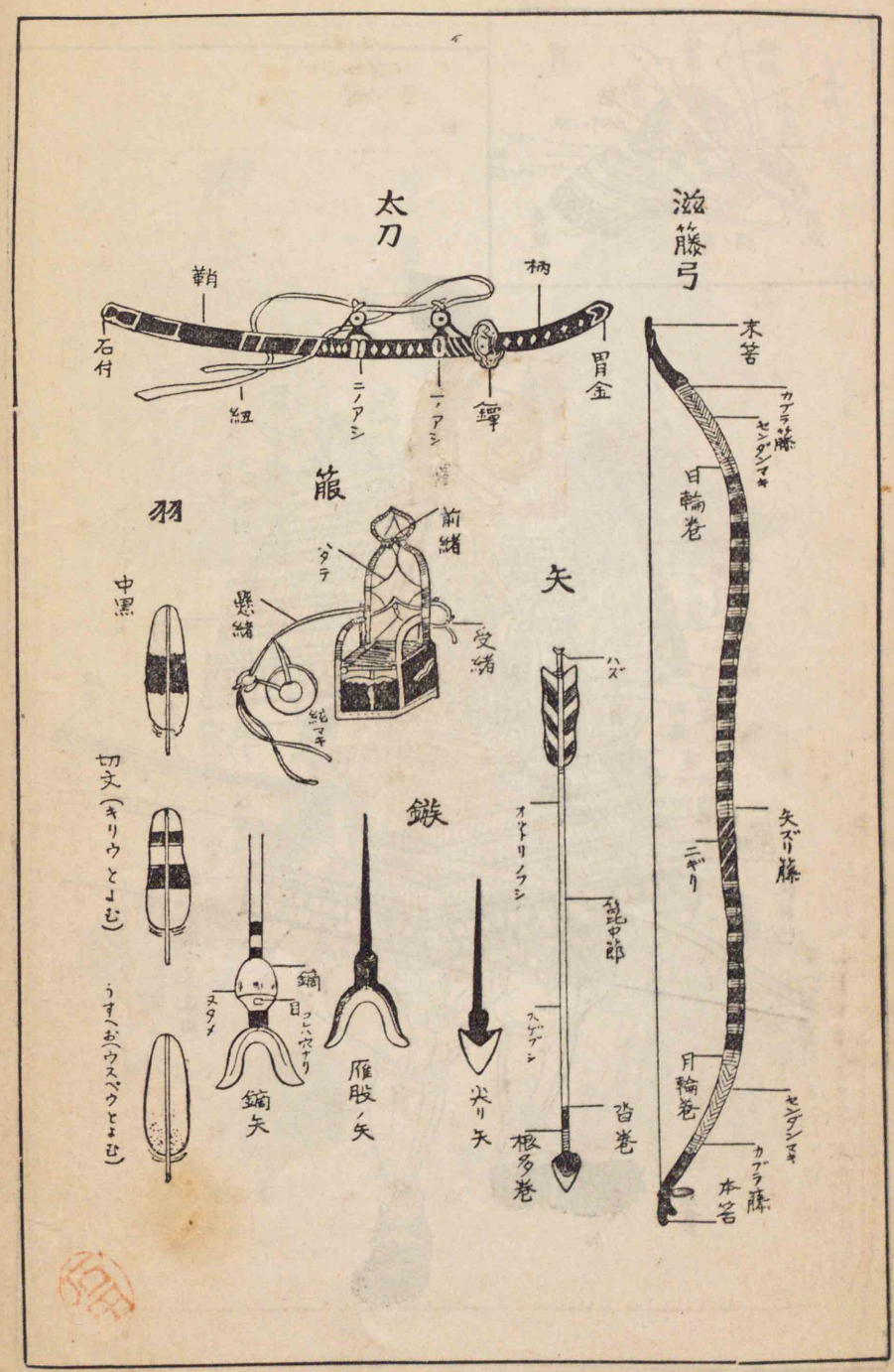

下屋
西對屋
寢殿
東對屋
廚
中門
廊
泉殿
釣殿
中島
車宿


北
舞台
舞殿
上門
平門
下屋
今殿
南
東
寢殿
泉殿
廚
中門
廊
屋敷
寢殿
泉殿
下屋
屋敷
下屋
四足門
中門
池
島
橋
車宿
殿舎
小路

束帯（前）
冠
垂纓
懸緒
白小袖（下襲）
黒袍
笏
萬繪劍
單
裾
袴
下襲
平緒
襪
表袴
沓
隨身（前）
細纓
懸緒
闕腋袍（金襴）
野飯尻鞘
赤太刀
平緒
表袴
同（後）
石帶ノ上手
石帶
平緒
ハコエヲ立ル（見ヲ格ヲ立ル上支シリツクルト七云）
立烏帽子直衣（夏）
立烏帽子
單
衣
蝙蝠
腰帯
色二藍
奴袴


冑
鍬形
八幡座
菊座
星
鉢付ノ板
二ノ板
三ノ板
四ノ板
真向
吹返
眉庇
緒ノ冑
蓑縫ノ板
揉烏帽子
冠板
征矢
上差
矢筈
矢羽
冠板
化粧板
胸板
搦
鳩尾板
撞板
馬手袖
射向袖
鎧直垂
弦走
鞘巻
籠手
太刀
石突
芝引
籠ノ板
二ノ板
三ノ板
四ノ板
握
弦巻
指板(前板)
裾金物
射向草摺(弓手草摺)
弦
菱縫
臑當
頬貫

直垂
風折
懸緒
白小袖
小サ刀
蝙蝠
狩衣(武家)
蝙蝠
白無垢
アテ腰
袖括
奴袴
冠
巾子
甲
垂纓
簪
磯ノ
丸木
巻纓
緒
笄
ヒナサキ
額
眉
風口
正装
前髪
髪
衣
打衣
単
表衣
袴
引腰
引腰



昭和四年三月廿五日
文部省檢定濟
中學校國語科用

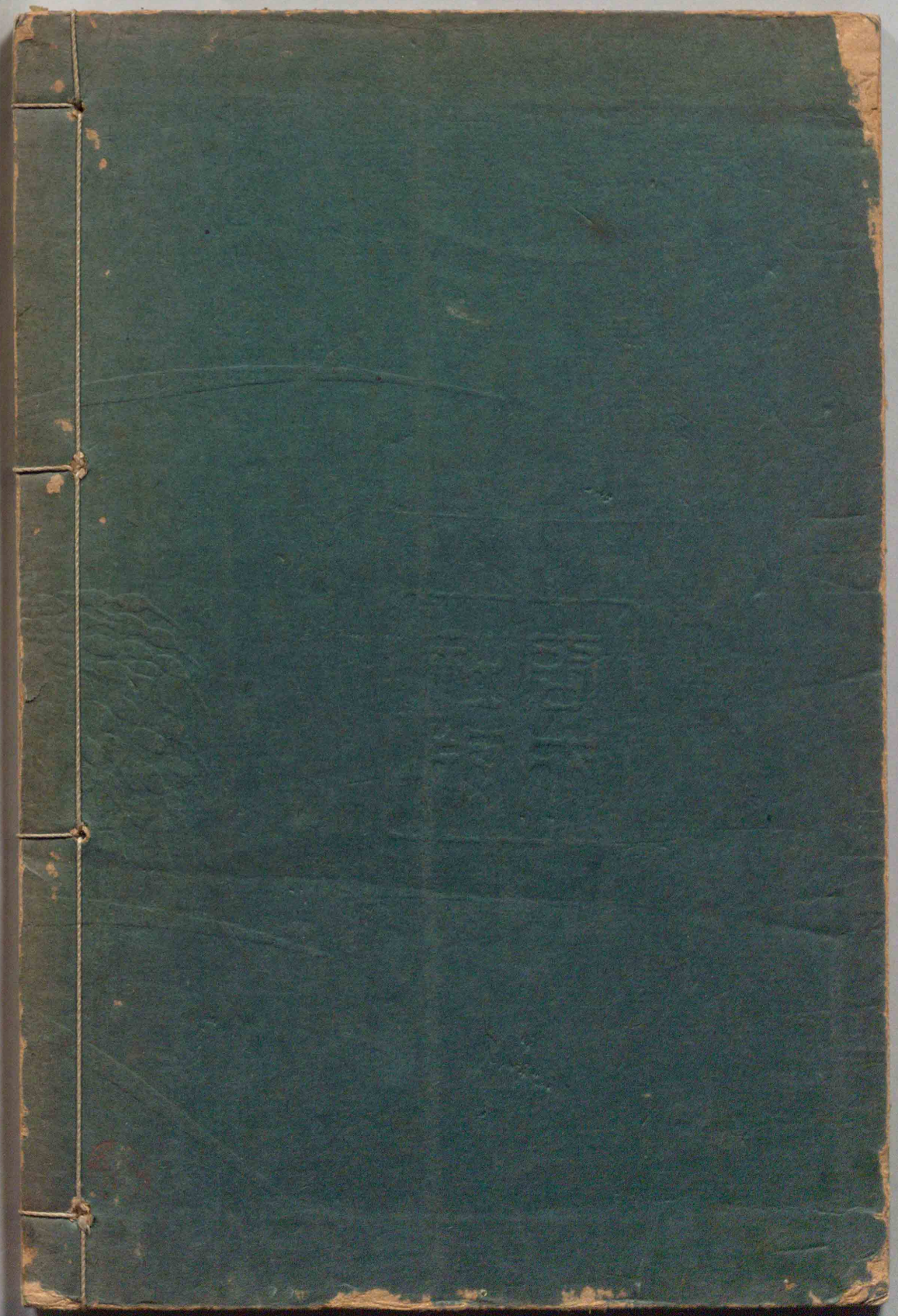
昭和改訂版 國語讀本

卷數	定價	昭和臨時定價
一、二、三	各金四十七錢	金七十四錢
五、六、八	各金四十六錢	金七十三錢
七、九、十	各金四十五錢	金七十一錢
四	金四十四錢	金七十錢

大正十三年十二月十六日印刷
大正十三年十二月十九日發行
大正十四年二月廿一日訂正再版印刷
大正十四年二月廿四日訂正再版發行
昭和三年十一月一日改訂印刷
昭和三年十一月四日改訂發行
昭和四年三月十七日改訂再版發行
昭和五年十一月十九日改訂十版發行
昭和六年二月二十七日改訂十一版發行
昭和六年九月二十七日改訂十五版發行

不許

發行所 東京市京橋區銀座西七丁目二番地
株式會社 啓成社
電話銀座(57)二四九四番
振替東京一二〇五五番

編者 上田萬年
同 榮田猛猪
同 鹽野新次郎

印刷兼發行者 株式會社 啓成社
右代表者 布津純一
印刷所 東京市芝區芝浦町二丁目三番地 株式會社 啓成社印刷部